



第四編

俊頼と説話歌論考



# 第一章 俊頼と今昔物語集

## 第一節 研究方法の基底

俊頼は平安末期を飾る革新歌人としてその作風も個性的なものを多く含んでいた。しかし、また凡てが新奇をねらった歌ばかりでないことも見て来た通りである。そうした個性の強い俊頼の歌学書「俊頼髓」はこれまたそれ以前の歌学書とも異なる多くのものを持つてゐる。その第一が伝説・説話歌群

を多く收容してゐることである。この章に於てはそのうち「今昔物語集」の説話が「俊頼  
髓」においてはその様な位相に把握されて  
ゐるか。西書の説話にはいかなる関係がある  
か。その問題を中心に考えてみたい。  
「俊頼髓」は先行歌学書から影響を承けて  
ゐる面もあり、それ以後の歌学書にはまたか  
なりの影響を与えてゐる。殊に豊富な説話歌  
群を集め独自の関心を示してゐるのはその特  
異性といふべく、彼の説話を考えるについで

こまず、<sup>7</sup>今昔物語集<sup>1</sup>との関係をみる必要  
 が生じてくる。<sup>7</sup>今昔物語<sup>1</sup>における作者、  
 成立年代については近時説話文学研究の発達  
 に伴って新しい観点から考え直そうとする動  
 きが活発になつてきた。その作者については  
 これまで宇治大納言源隆国であつたと考証さ  
 れてきたが、現在では、隆国没後の説話等も  
 含まれてゐることなどから既に疑問視されて  
 きてゐる。それでは隆国に代る撰者は誰かと  
 いうことになると種々な説も出されていま

だ結論は得られていない。この中で、片寄正(注・1)  
義氏が鳥羽僧正覚猷（隆国第九子）、僧正忠  
尋、及び源俊頼を試論としてあげたことは、  
俊頼研究の上には注意すべき説である。坂井  
衡平氏、山岸徳平氏も多少論拠は異なるがこ  
の説の系統である。しかしこれに対し今野達(注・2)  
氏は、今昔物語集所載の貴族説話、詩歌説話  
を委細検討して、俊頼説を否定している。そ  
の理由として、今昔物語集の貴族説話、詩歌  
説話に関してはおかなりの誤謬があり、こうし

た貴族官僚的社會に基盤をもたず、しかも詩  
 歌には素養の浅い事実のあることを多く例示  
 している。ここからは、当代の一流歌人俊頼  
 の撰とは到底考えられないとするのである。  
 ここから撰者は、決して特権的貴族的存在で  
 はなかつた。謂わば隠れた中下級僧侶の手に成  
 ったろう事を、今昔研究の基本的一条件とし  
 て極力主張したい。即ち南都北嶺のような大  
 寺に所屬する事務系統の僧侶、しかもそれは  
 書記僧であつたろうとするのである。これ

は、すぐれた「今昔物語集」の撰者推定論であるといふべきであらう。更に(注③)全氏は「俊頼髓脳」が「今昔物語集」の直接の古典たることを述べている。ことに「今昔物語集」の撰者が、巻十「震旦部世俗」の編成に、歌学書たる「俊頼髓脳」を動員したことは取材面の上には制約もあつたことを指摘しているのは注意すべきであらう。これは「俊頼髓脳」の方がむしろ資料提供者になつてゐることなのである。中国説話に於て「今昔物語集」と、「俊頼髓

脳<sup>レ</sup>とを比較すると、七話（七首）までが共

通している。『俊頼髓脳<sup>レ</sup>』は、いわゆる説話

集ではない。その本質はあくまでも歌を中心

とする歌学書、歌論書であるがその中には、

多くの説話群が、歌を中心に配列されている

のも又事実であり、そこに説話採録者として

俊頼の一面を知ることが出来るし『俊頼髓脳

』の特質も存している。俊頼以後の歌学書を

みると、語釈、説話とも『俊頼髓脳<sup>レ</sup>』から影

響<sup>レ</sup>されていているものが非常に多く、むしろ、俊

頼の解釈が全部肯定されているものばかりではないが、そのまま踏襲継承されている方が多い。本朝説話歌群の歌も又そうである。これを歌学書の面から考えると、俊頼以前になつた平安朝初期、中期の歌学書が主として、歌そのものの修辞学的、或は秀歌の品等類別、或は歌枕的のものにその考察の対象が向けられて、いるのに対して、俊頼髓脳には、歌病論とか修辞的な面とかは継承されてきてはいないが、只それだけでなしに俊頼独自の執筆態度

がみられる。

その主なものが「説話歌群」の登場であり、これに対する俊頼の評価・鑑賞という新しい面であった。我が国の歌学史、歌論史上に於て俊頼は一大変革を完遂したのである。

歌論書の性格が一新された意味に於て俊頼の位置は極めて大きいといふべきである。

俊頼以後の歌論書「語抄」、奥義抄、和歌童蒙抄、袖中抄、色葉和難抄などをみると俊頼の説を、かなり大巾にとり入れている。顕昭

などは、<sup>「</sup>散木集註<sup>」</sup>まで、著わした俊頼研  
究開拓者でもあり、その著<sup>「</sup>袖中抄<sup>」</sup>は、さ  
すが彼の精緻な歌学を窺うに足る著であり、  
俊頼の説に対する異義もかなり多いが、<sup>「</sup>俊  
頼髓脳<sup>」</sup>を大切にとりあつかっている。他の  
歌学書にしても、俊頼説をそのまま引用した  
場合の多い<sup>「</sup>色葉和難集<sup>」</sup>の如きものもある。  
この様に<sup>「</sup>俊頼口伝集<sup>」</sup>は、旧歌学的体制  
を捨象し、新しい歌論体制を樹立して第一歩  
をふみ出した著として極めて、独自のなもの

を有している。こゝした観点から筆者は、「  
 俊頼髓脳」の内容を分析することにより彼の  
 解釈、鑑賞態度を考え、併せて彼以後の歌学  
 書との関係をも検討してきた。(第二編第三  
 章) ここではまず説話歌群を対象に選び「今  
 昔物語」との関係をみてゆきたい。

その前に「今昔物語集」の成立期がまず問  
 題になつてくる。近時説話文学の研究も新し  
 く進展してきて、「今昔物語集」の成立期に  
 ついても検討がなされてきていゝるが、その中

の主な諸説をあげると次の通りである。

(一) 保安元年(1120)以後の説(俊頼66才以後)

○片寄正彦(今昔物語集の研究上)

(二) 右に全い

○益田勝美「岩波書店日本文学史」古代

説話文学

(三) 江談抄成立(1100)と(1110)以後説(46才と56才以

後)

○今理達

(四) 保安三年(1122)天治頃とする。(68才)

○橋健二「国語国文」(昭和36年5月)

「今昔物語集成立年時保安元年以後

説についての一傍証」

(五)後三年役話の完成以前とする説。(33才

以前)

○中野猛「今昔物語集の作者について」

「国語」昭和32年4月号

「俊頼口伝」の成立期は、岡田希雄、久

曾神昇氏説によると、大体、永久二年(114)十月

乃至今年三年(1115)正月まで(俊頼の60才)

の間というところが考証されている。これは信じてよい事である。

今昔物語集成成立説の最も早いのは先述(五)の中野猛説である。後三年の役は寛治元年(1087)にあたる。新しい成立期では(四)の橋健二説でその開きは約三十年以上になる。これを「俊頼髓脳」の成立を中心に考えれば、それ以前に「今昔」が成立しているとはみるのは、中野説のみで、その他、茅賀矢一、岡田希雄等先学もこれに属する。あとには、すべて今昔物語集の方が後と

いう事になりこの説の方が多し。筆者も内容  
 からみて今昔は、<sup>ト</sup>俊頼髓脳<sup>ト</sup>以後の成立説  
 に賛成したい。その理由を両書の具体的な説  
 話から考えてゆきたい。

<sup>ト</sup>今昔物語集<sup>ト</sup>と<sup>ト</sup>俊頼髓脳<sup>ト</sup>両書には共  
 通の説話が十九話あり、その一覧表を次にか  
 かげておく。

	(3)	(2)	(1)	(番号)	(今昔物語集)	
	七	五	十四	卷語		
	○唐玄宗后、楊貴妃 依皇寵被 <sub>レ</sub> 斂語 (歌なし)	○漢前帝后王昭君 行胡國語 (歌なし)	○漢武帝、以張騫爲 <sub>レ</sub> 令 見 <sub>レ</sub> 天河水上 <sub>一</sub> 語 (歌なし)	說話主題		
	(4)	(3)	(2)	(1)	(俊賴髓腦)	
	思ひかね別れし野べをきてみれば 浅草が原に秋風ぞ吹く	なげきこし道の露にもまさりけり なれにし里を悪ふる疾は	みる度に鏡の影のつらきかな かゝらざりせばかゝらましやは	ありしにもあらず世はなりにけり 天の河うき木に乗れる我なれや		和歌主題
	○白氏文集 ○唐物語	○曾我物語	○西京雜記 ○唐物語	○前漢書 ○荆楚歲時記		その他 關係書

<p>(8) 十一 一 ○ 聖徳太子、 在此朝一 始弘<sub>二</sub>仏法<sub>一</sub>一語 (歌あり)</p>	<p>(7) " 三 ○ 漢武帝、 蘇武遣<sub>二</sub> 胡塞一語 (歌なし)</p>	<p>(6) " 九 ○ 震且國王、 愚斬<sub>二</sub>玉 造手一語 (歌なし)</p>	<p>(5) " 九 ○ 臣下孔子、 道行、 値<sub>二</sub> 童子問一申語 (歌なし)</p>	<p>(4) " 八 ○ 震且具招孝、 見流 詩<sub>二</sub>惠其主<sub>一</sub>一語 (歌なし)</p>
<p>(10) (9) いなるがや富の緒川の絶えはこそ 我が大君の才は忘れぬ しなてるや片岡山に飯に飢ゑて ふせる旅人あはれおやなし 詞 ○ 拾遺集</p>	<p>(8) 秋風に初雁がねぞ聞ゆなる たが玉碎をかけて来つらむ ○ 前漢書 ○ 無名抄 ○ 古本蒙 求</p>	<p>(7) 血の涙おちてぞたぎつ白川は 君がよまでの名にこそありけれ ○ 韓非子 ○ 無名抄 ○ 太平記</p>	<p>(6) 垣ごしに馬を牛とはいはねども 人の心の程をみるかな ○ 和歌童 ○ 藤抄 ○ 無名抄</p>	<p>(5) 人しれお思へばうけることの昔も つひにあふせのたのもしきかな ○ 無名抄</p>

(13)	(12)	(11)	(10)	(9)
"	"	"	廿四	十一
一五十	七十四	廿八	廿三	七
○大江匡衡妻赤染、 讀 <sub>二</sub> 和歌 <sub>一</sub> 語 (歌あり)	○伊勢御息女、幼時 讀 <sub>二</sub> 和歌 <sub>一</sub> 語 (歌あり)	○藤原道信朝臣、 送 <sub>レ</sub> 父 <sub>二</sub> 讀 <sub>二</sub> 和歌 <sub>一</sub> 語 (歌あり)	○源博雅朝臣、行会坂 盲許 <sub>一</sub> 語 (歌あり)	○婆羅門僧正、馬 <sub>レ</sub> 値 <sub>二</sub> 行基 <sub>一</sub> 從 <sub>二</sub> 天竺 <sub>一</sub> 來朝語 (歌あり)
(16)	(15)	(14)	(13)	(12) (11)
わが宿の松はしるしもなかりけり 杉むらならば尋ねきなまし	人しれずたえなましかばなかくに なき名ぞとだにいはましものを	みる人もなき山里のや花の色は なかく風ぞおしむべらなる	世の中はとてもかくてもありぬべし 宮もわらやもはてしなけれは	靈山の釈迦のみ前に <sup>て</sup> まかりてし 真如うちせおみひ見つるかな 迦毗羅會にともた契入りしかひありて 文殊のみかほあひ見つるかな
○赤染衛 門集	○格沢本 説話集	○拾遺集 ○玉葉集 ○後拾遺 集	○江談抄 ○和歌童 抄 ○梅沢本 説話集	○三宝絵 詞

(18)	(17)	(16)	(15)	(14)
廿一 廿七	〃 十四	〃 十三	三十 九	〃 七 五十
○兄弟二人、殖萱草 紫苑一語 (歌なし)	○人妻、化成写後成鳥 飛失語 (歌あり)	○夫死女人、後不嫁他 夫一語 (歌あり)	○信濃国夷母弃山語 (歌あり)	○藤原惟規、讀和歌 被免語 (歌あり)
(22) (21)	(20)	(19)	(18)	(17)
わすれ草わが下廻に下けたれど 鬼のしこ草ことにしありけり わすれ草かくもしみくに植ゑたれど 鬼のしこ草なほおひにけり	あさもよひきの河ゆすり行く水の いづさやむさやいづさやむさや (イルサヤ一合昔)	かぞいろはあはれとみらむつばめすら ふたりは人にちぎらぬものを	わが心なぐさめかねつさらしなや をばすて山に照る月をみて	神がきは木の丸殿にあらねども なのりをせぬは人とがめけり
○万葉集 (巻4) (巻12)	○俊頼口伝	○俊頼口伝 ○鏡後撰 集	○大和物語 ○沙石集	○古本説 ○説書 ○俊頼口 伝 ○十訓抄

(19)

廿一

廿八

○

藤原惟規、  
於越  
中國一死詔

(歌あり)

(23)

子ヤニ(毛)フビシキ今昔  
人のあまたあれば  
なほ(行)今昔ニの度はいかむとぞ思ふ

○ 小世継

○ 後拾遺集

この一覽表をみてわかる通り、<sup>1</sup>今昔と  
<sup>2</sup>俊頼口伝と一致する説話は、今昔の五卷  
 にわたって吸収される。この観点に立って以  
 下考えてゆく。

(一) 中国説話を内容とする卷十の四十話の中  
 七話が<sup>3</sup>俊頼髓脳と重複している。その配  
 列は今昔からみると(1)、(2)、(3)、(4)、(5)の順  
 になつていていすれもつづいていゝ。これは  
 もとより、今昔物語自体の配列意識に基づく  
 ものでこの五話は、中国皇室における女御説

話の一グループに孔子説話が一話加わった形  
 でつづいていゝる。また(6)、(7)の配列順序は、  
 中国国王に関する説話グループとしてまとま  
 っているのである。これを「俊頼口伝」の配  
 列からみると、その順は、(7)、(1)、(6)とな  
 っており、多少異なるが、配置場所は、大体同  
 い所にかたまつてつづいていゝる。「俊頼口伝  
 」の編集は、雑然とはしていゝるが、後部にな  
 づて再び中国説話を配列させ、その順は、(2)  
 (3)、(4)、(5)と今昔と全く同じ順序になつてお

う、両書ともその配列構成は、大体同じ重なり合いを有しているというところが知られる。所収和歌は、「俊頼口伝」の方のみに八首ある。

(二)次は、今昔物語集巻十一の全三十八話の中へ本朝付佛法」の二話が、「俊頼口伝」と重複する。この巻の編集意図は、まづ仏法伝来史話から始より、(8)と(9)の説話が配置されてくるのはこの巻として当然であり、「俊頼口伝」に於ても、聖徳太子と、婆羅門僧正の説

話群を最初にもってきていることは軌を一にする。『俊頼口伝』に所収和歌は四首のうち『今昔物語』と二首重複する。

三 今昔物語集巻二十四（本朝付世俗）に所収説話は五十七話で、その中『俊頼口伝』と重複するものが五話である。（所収和歌五首も共通）

今昔物語集巻二十四は本朝における芸能の巻ともいうべき性質を有し、今昔の編集意識もよく統一されている。この点、和歌・歌学の方面からは重要な巻である。(10)は、蟬丸、

博雅の音楽説話、(11)は道信和歌説話へ二十首  
 中の一首、(12)は伊勢、赤染など女人哀  
 歌説話、(14)は惟規の歌徳説話という内容を有  
 する。7俊頼口伝に於ても(10)は身分階級の  
 如何を問わず、或る芸能に秀でいる人達の例  
 として蝉丸の琴と和歌のことにふれている。  
 (11)は藤原道信の歌物語ともいうべき二十首の  
 中から一首をとってあげている。俊頼としては  
 特別に道信の歌物語という今昔の編集意識に  
 かかわらず、常識的にみると疑問の残る歌で

あつても却つてそれが秀歌となり得るといふ例として抜いたものの中の一首である。(12)は風体論の上からいとはしくおいふしたる歌の中の一首として伊勢の歌をあげたもの。(内)容的には今昔と関係うすし。

(13)は、三輪山説話を語る資料として赤染衛門の歌を抜いたもの。(これらも関係稀簿)

(14)は、延則の歌徳説話で今昔物語のとりあげた主張と同じ立場にたつて、内容的には両書の関係が深い。

(四)、次は今昔物語集卷三十(本朝付雑事)

の十四話の中三話が「俊頼口伝」と重複する。

まず、(15)は「大和物語」とも関係がある。

(16)・(17)は「俊頼口伝」のほかはこの説話の典

拠となるものは詳かでない。「俊頼口伝」の

側から「今昔物語」の位置と比べてみると、

(15)は、(三)の(14)のあとに例示しているいくつか

の説話群の中に位置し、(16)・(17)は(三)の(14)の前

の説話群の中に位置しているという風に(四)は

「今昔物語」の位置とは全く関係がない。

この事は俊頼が他の歌をも多く採り入れ、  
「今昔物語集」にみえる歌は、その向にほつ  
りほつりとちりばめているといつた形から来  
ることである、説話内容としては関係は深いが、  
配列の位置には何ら関係なく、俊頼は自由に  
むしろ雑然と説話群の歌を配置していつたと  
いうことがわかつてくるのである。所収和歌  
は三首。

(五) 次は今昔物語集卷三十一へ本朝付雑事  
の三十七話の中二話が「俊頼口伝」と一致す

る。(18)・(19)は今昔物語集に於ては続いて隣り合つて配列されてゐる。

「俊頼口伝」に於ては、(18)は(四)の(17)のすぐ前に隣り合わせてゐるが、(19)は、(17)の後の方の中国説話群のところに配置されてゐる。でこの二話は互いにはなれてゐる。

このように両書に一致する説話を考えてみると第十卷「中国説話」の部は歌がなまいといふだけ、「俊頼髓腦」とは極めて関係が深い。その他「今昔物語集」をみると廿一卷廿七語を除いて

は凡て歌を収録している。以下論考の方法として「俊頼髓脳」に採用している歌の順序は雑然として前後してゐるので「今昔物語集」の巻を基準にして両書一致の説話と歌とを対照しつゝその他の関係書をも参考に両書の内容面を更に詳しく検討してゆくことにする。

## 第二節

中国説話と俊頼髓脳との接点

## (1) 張 騫

① 天の河うき木に乗れるわれなれやありしに  
 もあらず世はなうにけうへ古歌へ

この歌について俊頼はまず、その成立の背  
 景を語り「是は昔采女なりける人をたぐひな  
 くおぼしけう。例ならぬ事ありてさとにい  
 たりける程に忘れさせ給ひにけう。心地よろ  
 しくなりていつしかと参りたりけるに、夢に

も似ず見えければ、怨めしと思ひてまかうい  
でたてまつりける歌なり」と述べている。

さてこの説話の出典は「荆楚歳時記」  
漢書卷第三十一列伝<sub>レ</sub>等による。俊頼は男女  
の怨情を中心として解釈しているところによ  
り、その特色がある。

ところで、俊頼はこの解につづいて中国の  
説話を長々と引用、説明を試みている。即ち  
漢の武帝の時、張騫という者が宣旨を蒙って  
天の河の上流にうさぎ木にのって尋ねゆき織女

牽星とあつて帰つた故事に基づいて説明して  
 いる。この説話は、今昔物語第十「漢武帝、  
 以張騫令<sup>メタル</sup>見<sup>ル</sup>天河、水上語第四<sup>ル</sup>にも掲載されて  
 いる。「今昔物語集」<sup>と</sup>俊頼口伝<sup>と</sup>の説  
 話の内容は殆んど同巧。異なる点は「今昔<sup>ル</sup>  
 に於ては張騫の説話そのものを語るのが主目  
 的であるが、「俊頼口伝」では、この歌の説  
 明のために中国の伝記がいわば説明の具に供  
 せられていふこと<sup>が</sup>今昔と全くその発  
 想を異にしていふ。なお、張騫が浮木に乗つ

て天の水上に行つた様子を見、今昔では「浮木に  
乗て河ノ水上ヲ尋木行ケレバ、遙ニ行キ行テ  
一ノ所ニ至レリ。其ノ所、見モ、不知ヌ」とあ  
る。『俊頼口伝』には「うき木にのりて河の  
みなかみ尋ね行きければ、見モ知らぬ所に行  
きてみれば、」とあり、その表現に、助詞「  
ば」を二度もつづけて使用しているのは、む  
しろ古風且つ素朴な筆致である。今昔の様に  
「見モ不知ヌ」と述語として表現した方が新  
しい表現手法である。これは、今昔の方が俊

頼口伝を翻案して書いたとみる方が妥当であ  
 ろう。また、同じく天皇に奏上したところに  
 今昔では「一ノ所土至タレバ、織女ハ機ヲ立  
 テ布ヲ織リ、牽星<sup>ヒツボシ</sup>ハ牛ヲ牽<sup>ヒク</sup>テ」とある。  
 「注(4)日  
 本古典文学大系本の頭注に、「牽星」のこ  
 とにふれ、和名抄、名義抄によると字面は「  
 牽牛」であり、牛をひくという本話からみて  
 いぶかしいと指摘しているのは至言であり、  
 「俊頼口伝」をみると「尋ねれば、たなは  
 たひこほしなど牛をひかへ、たなはたは機を

織りてとある。やはう、ト牽牛ト或はトひこほしトとある。ト俊頼口伝トの方が正しかろう。今じくつづいて天皇に奏上した言葉に今昔ではト所ノ様、常ニモ不似ザリツトトとある。  
この所は俊頼口伝には、ト所のさまのありしにもあらずかはうたうければ、そのよしをきいてかくよめるなりトと、張騫の奏上の言葉がいつの間にか里から宮中に帰つての采女の心中に置き代えられているというつなごの

表記方法をとっている。この俊頼の技巧は全  
 く巧妙であり、以下、<sup>7</sup>俊頼口伝<sup>レ</sup>では采女  
 の物語に移転して帝は、<sup>ニ</sup>の歌を御覧<sup>い</sup>てあ  
 われに思われもとの様にその采女をかた時も  
 たちさらず思召した。しかし、やがていくば  
 くもなく失せ給い、<sup>ニ</sup>の采女は天皇の塚に生  
 きながらこもった。この御陵を<sup>7</sup>いけごめの  
 み<sup>サ</sup>さ<sup>ギ</sup>と<sup>ギ</sup>と<sup>レ</sup>と言<sup>つ</sup>て、薬師寺の西にあるとい  
 う説話に統一させたのである。今昔は、中国  
 説話として独立しているが、<sup>7</sup>俊頼口伝<sup>レ</sup>に於

ては古歌と中国説話との結合の形をとって  
る。これは「今昔」の撰者が中国説話には一  
心の知識を有していたにしても詩歌の知識に  
乏しかつた一例ともなう。こうした歌は一切  
切りはなして「俊頼口伝」から中国説話の部  
分のみを採用したのではないかと思う。歌学  
書「奥義抄」の解は、「俊頼口伝」に據り、  
「色葉和難集」は、「奥義抄」の説をそのま  
ゝ引用しているという系譜をもつものである。

## (2) 王昭君

「俊頼口伝」に次の二首がある。

② なげきこし道の露にもまさりけりなれにし

さとをこふる涙は（後拾遺・雑・懐圓法師）

③ みるたびに鏡のかけのつらさかなかゝらざ

うせばかゝらましやは（全・赤染衛門）

何れも「王昭君を読む」という題詞がある。

王昭君伝説の原典は「西京雜記」卷二にあり、

「今昔物語」卷第十にも採られ外に唐物語・

曾我物語にも同一説話があり、広く一般に流布

された。俊頼の伝説説明は、今昔物語と殆ど同巧。即ち漢の八代元帝時代、胡国に容姿の劣った女を遣わすことになり、絵師に美人に書いてもらわんと金銀その他を贈ったが王昭君のみはその美を憑みて絵師に賤を与えなかつたため、真実の姿には書かれず、賤しげに画かれて遂に胡国に遣わされたという悲話である。その内容は全く同じ。只今昔の方は、胡国と名を提示しているが、俊頼口伝には、「急びすのやうなる者」とある。（

文選では「白奴」とす。文章表記の上から

殆ど同じと思われるのは、天皇が胡国につれ

去られたあと王昭君のいた所に行つて悲しん

だ情景描写である。「今昔」には「春ハ柳、

風ニ靡キ、鶯徒々ニ鳴キ、秋ハ、木ノ葉、庭

ニ積リテ、檐ノ隙ナクテ物哀ナル事云ハム

方无カリケレバ、弥恋ビ給ケリ」(右の朱書

は「俊頼髓」(日本歌学大系本)の本文、

「今昔」の本文は日本古典文学大系本による。

以下同じ。

この酷似を何と考えたらよかろうか。今昔の□（欠字箇所）の箇所は「俊頼口伝」では「しのぶ」とよませている。又、一体に今昔物語の文体は、用語を端的にしかも漢文的表現に出で、修飾的面に乏しい。ところがここに引用された文章は抒情的である。これは今昔本来の文ではない。これは明らかに先行文献によっていることが知られる。しかも「俊頼口伝」の酷似を考えると、「今昔」は「俊頼口伝」に依據しているという解釈がな

了たつのではないか。むしろ、ここでも前の  
 「張騫説話」と同じく両書の間には相違がある。  
 それは今昔に和歌二首が全くない点である。  
 つまらう、今昔は、王昭君の説話のみを伝える  
 事を目的としていているが、俊頼は、これを、懷  
 圓法師と、赤染衛門の二首の和歌に引きつけ  
 て説明しようとしていているのが異なる。従って、  
 今昔の結びは、たとい王昭君の右になつても  
 心の慰さまざることにふれて「此レ形ヲ憑ミ  
 テ絵師ニ賅ヲ不手ザルが故也トゾ、其ノ時ノ

人諺リケルトナム語り伝ヘタルトヤレトイ  
う  
教訓的なものになつていのである。

「俊頼口伝」には全くそうした意図はなく  
二首の歌の解をなし、更に「かの急びすのや  
うなる者と申すはこの国のみかどの、わが国  
にはよき女のなきにかたらよからむ人賜らむ  
と申しけるとも申したる文ありとぞ」とい  
う  
異伝のある事を附加して結びとしている。こ  
の異伝は「西行雜記卷二」の「匈奴入朝。求  
美人為闕氏。於是上接回以昭君行」によつた

ものである。つまり、中国説話そのもの  
 とりあげ方に両書では相違がみられる。今昔  
 の撰者はここに於ても和歌のことは全く遮断  
 して「俊頼口伝」からその説話の素材を採用  
 したのである。文体の修辭的酷似が何よりも、  
 それを物語り、今昔の編者が「俊頼口伝」に  
 依ったことが明らかになつてくるのである。

(3) 楊貴妃

④ 思ひかね別れし野べをきてみれば浅茅が原

に秋風が吹く (詞花集・源道濟)

唐玄宗と楊貴妃との悲恋哀話の原典は『白  
氏文集第十二感傷篇長恨歌』並びに陳鴻の『  
長恨歌伝』などで広くわが国にも流布された  
ものである。今昔物語巻第十『唐玄宗后楊貴  
妃、依皇寵被殺語第七』、『俊頼口伝』、さ  
らには中世に至り唐物語・太平記・曾我物語  
第にも採用されている。今、『俊頼口伝』と  
『今昔』とを比較してみると、説話の内容は  
ほぼ同巧であるが、細部に亘ってみると、内

容もいささか異なっている。文体も似てはい  
 るが今昔の方は、すでにふれた様に全体的に  
 漢文的表現がめだつ。

この説話においても、王昭君の場合と同じ  
 く、何よりも大きな執筆態度の相違は、「俊

頼口伝」に於ては源道済の歌の説明のために、  
 長々と「俊頼口伝」で最も長い説話「この

悲哀の説話を添えていることであり、今昔に  
 はこの和歌は全くないのである。なお、両書

の相違点をあげてみると、  
 (一)楊貴妃を殺した

人は「今昔」では、陳玄礼であるが、「俊頼口伝」では、安録山。 (一) しかも「俊頼口伝」では、安録山に対して「みかどをしみ給はずしてこの女御を賜ひてけう」としているが、「今昔」では「天皇悲びノ心深クシテ憂ニ不堪ザレバ、給フ事无シ」とある。 (二) 「今昔」では楊貴妃の殺された時の皇帝の悲しみのあとに「然レドモ道理ノ至レルニ依テ、嗔ノ心ハ无シ」とあるが、「俊頼口伝」にはこう書いた皇帝の心境描写は全くない。

その他細部にわたって両書と比較すると、  
 かなり相違がある。この原語が「白氏文集」  
 や「長恨歌伝」(陳鴻)等によつて伝播され、  
 ているので説話内容の細かな点についてはその  
 の受けとり方で多少異なるのはむしろ当然であ  
 ろう。それでは、相違点のみかと云うと決  
 してそうではない。ことにここで注意すべき  
 ことは文章表現上に非常に酷似している個所  
 のあることである。

一) まず、俊頼が、今昔にないだ道済の和歌の

説明をどの様に結びつけて表現しているかを  
 考えてみると、今昔の最後に近いところに「  
 彼ノ楊貴妃ノ被<sup>コト</sup>殺<sup>サレ</sup>ケル所ニ、思ヒノ余リニ、  
 天皇行給テ見給ケル時ニ、野<sup>ノ</sup>辺<sup>ノ</sup>ニアサチ、風<sup>ノ</sup>  
 ニ並寄テ哀也ケリ。彼ノ天皇ノ御心何<sup>ナニ</sup>許<sup>カ</sup>也ケ  
 ム。然レバ哀ナル事ノ様<sup>サマ</sup>ニハ此レヲ云フナル  
 ベシ」という文がある。この部分を「俊頼髓  
 脳」の最後には「その楊貴妃が殺されける  
 所へおはしまして御覧じければ、野べにあさ  
 ち風<sup>ノ</sup>に波<sup>ノ</sup>よ<sup>ク</sup>りてあはれなりけむとかのみかど

の御心のうちをおしはかりてよめる歌なり。  
 と、今昔の描写をいつの間にか道済の歌の成  
 立事情に転化させているのである。それでい  
 て、ここに用いている語彙をみると、双方と  
 も酷似していることがすぐわかるであらう。  
 野、辺、あ、さ、じ、あ、は、れ、は、も、と、よ、う、  
 御心何許也ケムレの推量が、かのみかどの  
 御心のうちをおしはかりてよめる歌なり。  
 歌の成立の説明にはなっていて、その基底  
 には同じ語彙が重なり合っているのである。

(二) 次に玄宗が楊貴妃を寵愛してゐるさまを叙した表現をみると、

「世ノ中ノ政モ不知給テ、只、春ハ花ヲ共

ニ興ジ、夏ハ泉ニ並テ冷ミ、秋ハ月ヲ相見

テ長メ、冬ハ雪ヲ二人見給ケリ。

となつており、殆ど同文である。

(三) 楊貴妃の殺された後の帝の悲しみの表

情の描写は、

「此ノ事ヲ思ヒ不忘ズ、歎キ悲ヒ給テ、春ハ

花ノ散ヲモ不知ズ。秋ハ木ノ葉ノ落ヲモ不

見給はず

見ズ。木ノ葉ハ庭ニ積リタレドモ掃ッ人モ

无シ。

と殆ど同文である。

四、次に蓬萊宮に到りついた情景描写をみ

ると、

其ノ時ニ、山ノ葉ニ日漸ク入テ、海ノ面

暗カリ持行ク。花ノ靡モ皆閉テ人ノ音モ不

為ザリケレハ、方士其ノ戸ヲ叩ケルニ、青

キ衣着タル乙女ノ髪上タル出来テ云ク

とあり、これも殆ど同文とみてよい。

まだ、これ以外に<sup>も</sup>近似している箇所は、実は非常に多いのである。これをどの様に考えたらよいのであろうか。『俊頼口伝』と『今昔物語』とを比較する場合は、筆者の考えとしてほぼ、説話内容そのものより表現面の近似を重視したいという考え方をもっている。ところでは、前述酷似の指摘箇所(一)の文が玄宗皇帝終焉のあとに追加されているのは、すでに橘健<sup>注(四)</sup>二氏が触れている通り理論的には、おことに不自然である。

これは、  
 俊頼口伝レの文章を無理にこ  
 に挿入したためにかような不自然におち入ッ  
 たと考えざるを得ない。しかも、これが、  
 俊頼口伝レの文と殆ど同巧といウことを考え  
 合わせるト、今昔の文を俊頼が依據したトは  
 どうしても考えられない。今昔の方が、  
 俊頼口伝レに依ッたと考えるのがむしろ自然な  
 考え方である。それに今一つ今昔に用いてい  
 るッ野辺ニアサガ、風ニ並寄テ哀セケリレに  
注(6)  
 岩波日本古典文学大系本レの頭注に

「アサキ」を「背が低く一面に生えている千  
ガヤ。これをかなにしたのは、その用語と相  
俟って、かな文字との著しい交渉点と思われ  
る」と指摘しているのは、この場合極めて重  
要な点であり、これを俊頼の面から考えると、  
「俊頼口伝」にある「野べのあさぢ風に波よ  
りてあはれなりけむ」の表現をそのまま「今  
昔」が引用しているという考え方が成り立つの  
である。頭注では「交渉点」とあるが、それ  
はまさしく依據点とおさかえてもよいのであ

る。かくして、今昔の編者は、説話内容は、支那の原話をも参考として、「俊頼口伝」に依ったと考えるのが妥当と思われる。

俊頼自身は、全く長恨歌などを出典として楊貴妃の物語を述べつゝことに説話好きの俊頼が「長恨歌の心」を詠んだ有名歌人道済の歌に関心をもっていたことは容易に考えられるし、道済の歌と直結させる所に歌学書として意味をもたせたのであろう。このみでなく、「俊頼口伝」所収の説話歌というものの

は歌学書として説話を覗きみるのがその特色  
であった。

4) 吳松孝

④人しれず思へばうけることの葉もつひにあ  
ふせのたのもしさかな(藤原惟規)

この歌は藤原惟規のりへ為時の子、紫式部の兄  
後拾遺歌人が女につかたした歌である。俊  
頼はこの歌の心を中国説話に結びつけて説  
明した。この説話も、今昔物語卷第十「震旦

吳招孝へ俊頼口伝では吳松孝へ見流詩恋其主  
語第ハレにその類話が載せられている。

吳松孝が、若い頃九重の内から流れ出た川  
のほとりに行つたところに柿の赤いもみじの  
葉に女手で詩の書いているのが流れきたのを  
見つけた。それより、いかなる女の書いたの  
だろうと思慕の情をおこしそれに和して同じ  
く柿の葉に詩をかきつけてその川の水上に流  
した。次は宮中にいたづらに長く送る女御の  
ことに筆をうつし、松孝はその後里に帰つた

この女御を心ならずも親のすすめにより妻にする。その女が囃らばし詩を書いた女御であつたという二人の不思議な宿世物語である。

へ出典は未詳であるが、この類話には、「合璧事類」に「本事詩」等にある旨をすでに芳賀(注・卯)矢一博士が指摘している。

さて、この説話も「今昔物語」と「俊頼口伝」に於ては大体同巧であり、今昔物語の諸本欠字の個所は「俊頼口伝」によつて補足し得る。両書の文章の表現の一部を対照すると

次の通り。

一、冒頭に近いところに

九重の内より

全

流に

（なし）

全

宮ノ内ヨリ流レ出タル河ノ邊ニ行テ遊ケル

（詩のつくり）添加

全

みつけて

全

見れば

二木ノ葉ノ流レテ下リケルヲ見テ取テ見ケ

柿の葉のみみぢの赤かりけるに

全

けさ

レバ、柿ノ葉ノ赤ク紅葉タルニ詩ヲ書タリケ

と思ひける後に

女の手とみえければ

リ。招孝、此レヲ見ルニ、女ノ手ニテ有リ。

（なし）

（あ）なし

書きけあは

この人

フ此レ、何ナル人ノ作テ書タルナラムト思

ゆかしさに 困いにならうて

（なし）

すへきやうも 覚えさうけれ

フニ、誰トモ不知ネドモ、心バセ、有様思ヒ

（なし）

全

和をつりて

全

被遣テ恋キ事无限シ。其ノ詩ノ和シテ、其レ

モ柿ノ葉ニ書テ、其ノ河ノ水上ニ行テ流シケ

（なし）

全

九童の

レバ、宮ノ内ニ流レ入ニケリ。

(二) 天皇が多くの女御達を里に帰す條の描写

に

然テ、年来ヲ経ケル程ニ、宮ノ内ニ被打

籠テ徒二年ヲ経ル女御、負数多有ケリ。然レ

ドモ、天皇御覽ズル事モ无カリケルヲ、天皇

此等、憑テ徒二年ヲ送ル、極テ系惜

少々ヲバ祖々ニ返シテ男ニモ嫁ガセヨト御セ

給ヒ、少々返シ給テケリ。

以上、両書の酷似してゐる表現をみてきた。

尚、他の部分の表現にもこうした近似性は甚だ多いのである。

この話柄においては、両書相違する箇所もむろんある。この大きな相違は、やはりここ

においてても、<sup>ト</sup>今昔<sup>ト</sup>には和歌がないのに、

<sup>ト</sup>俊頼口伝<sup>ト</sup>では、<sup>(惟規)</sup>延則の歌を説明せんがた

めの中国説話提供であるという事。これは前

の楊貴妃、王昭君、張鷟の場合と全く同じで

ある。主人公の名が今昔では招孝であるが、

俊頼口伝では、松孝となっていて、しかし、

こうした相違は、説話そのものから云えば本質的な相違ではない。やはり、表現の近似性ということが重要な問題になってくるのである。

この説話の原話も前述の如く種々あるわけである。文章表現に於ては今昔に漢文的表記の特色は有しているが、内容はもとより、全く同じ文章の個所が甚だ多い。この表記の酷似性は、丁俊頼口伝に依つて今昔の方がそれを受け入れたものと思われ。

## (5) 孔子と顔回

④ 垣<sup>ゴ</sup>に馬を牛とほいはねども人の心の程  
をみるかな(四條中納言)

この歌は四條中納言藤原定頼(公任の一男  
)が小式部内侍に贈った歌であるが、この心  
を俊頼は、孔子とその高弟顔回の中国説話を  
以て説明している。これも、<sup>下</sup>今昔物語集  
の巻第十<sup>上</sup>臣下孔子、道行、值童子問申語第  
九<sup>上</sup>の後段にある説話である。

「今昔」におけるこの説話の構成は、二部  
から成り前半は、孔子と神童の説話、後半が、  
孔子と顔回の説話になっている。「俊頼口伝  
」に於てはその後半の説話を背景に四條中納  
言の歌をその主題としたものである。説話の  
内容は孔子が多くの弟子達を具して行つた時  
道のほとりの垣越しに頭を出している馬をわ  
ざと牛といつた事について同道の多くの弟子  
達はこの迷がとけず、顔回一人が「日よみの  
午」の字が頭を出して書くと牛といふ文字に

なることを悟ったという説話にもとづいたもの  
のである。その本文を対照してみると、次の  
如くなる。

孔子、諸ノ弟子共ヲ引具シテ道ヲ行キ給ケ

ルニ、道ノ邊ナル垣ヨリ馬ノ頭ヲ指出テ有ケ

ルヲ見給テ、孔子、<sup>(なし)</sup>此ニ牛ノ頭ヲ指出タル

ト宣ヒケレバ、弟子共<sup>全</sup>正シク馬ヲ牛ト宣

フ、恠キ事也<sup>あやしと思ひて</sup>ト思ヒケレドモ、様有ラムト<sup>あまう</sup>

思テ、終道ヲ各ノ心得ムト思ヒケルニ、顔回<sup>全</sup>

ト云フ第一ノ御弟子、一里ヲ行テ心得ケル様

一日読ノ午ト云フ字ヲ、  
頭ヲ指出シテ書タル

フ、牛ト云フ字ニテ有レバ、  
此ノ馬ノ頭ヲ指

出タレバ、人ノ心ヲ試ムトテ  
牛ト宣ケル

也ケリトモ思テ、師ニ問ヒ申シケレバ、  
然

カ也トゾ答ヘ給ケル。次々ノ  
御弟子共、次

第二十六町ヲ行ゾ心得ケル。

この文に於ては、  
俊頼口伝の方が稍々

簡単で敬語法を用いていないが殆ど同文。

俊頼口伝の結文をみると、  
「さればそれな

らねども、人心をばみるとよまれたう。  
」と

あり、これは四條中納言の「垣ごし」に「和  
 歌のつなぎの役目をもつ結文なのである。勿  
 論、和歌を配しているのは、例の如く「俊頼  
 口伝」の特色であり、この章は終つていろが  
 「今昔」には和歌はなく、孔子讚嘆の説話  
 が中心であるので長い。歌学書としては「和  
 歌童蒙抄」第九「馬」の項に、「俊頼口伝」  
 の文を圧縮した形で引用している。只、「俊  
 頼口伝」では一里とあるが、今昔も童蒙抄も  
 共に十六里に配しているのが相違しているだ

りである。これは、また十訓抄中巻にもごく  
短章で収録され、広く日本にも伝播された説  
話である。但し中国出典の文献は不明。  
さて、両書の酷似をどの様に考えたらい  
てあるうか。さきの王昭君、楊貴妃、松孝、  
孔子の四つの中国説話は、俊頼口伝にお  
いては、この順に収録されているし、今昔の  
順序も全くこれと同じ。(但し、上陽人の話  
柄のみは俊頼口伝にはない。)それに両者の  
執筆態度の上には相違はあるが、以上の酷似

の文体から見ても俊頼口伝を資料として、今昔の方が採っているのではないかと思われる。

(6) 和氏の玉

(7) 血のなみだおちてぞたぎつ白川は君がよま  
での名にこそありけれ(素性法師)

これは、前太政大臣藤原良房(忠仁公)の  
白川の辺に葬送した夜、素性法師の詠んだ哀  
傷歌で、古今集第十六哀傷にも入集、大鏡  
L 第二巻にも見える。俊頼が、この歌をとり

あげるに当ってはこの歌に詠まれている「  
血の涙」の出典が韓非子第四和氏篇にある楚  
の国の「玉造師卞和」の説話に関心を持って  
のことである。即ち、楚山の山中で粗玉を発  
見した玉造師和氏が、厲王、武王二代の帝に  
わたす献上したが、遂に玉の真価は認められ  
ぬばかりか、両手を斬られ、悲しみの余り、  
涙尽きて、血の涙を流して三日三晩泣きつづ  
け、三代目文王に至って始めて真実の宝玉と  
わかったという説話内容である。

この説話をふまえて素性は忠仁公の薨去を

血の涙で葬送したと、いうのである。俊頼は、

素性法師の歌については一言もふれずに「血

の涙といへる事はおこりある事なり」の書き

出しで以下「下和」の説話をのべているので

ある。そして、これは、今昔物語集巻十「震

旦ノ国王、愚斬玉造手」語第二十九」にも収

録されている説話である。「今昔」と「俊頼

口伝」では、説話内容は同巧。今昔の方が詳

しいが、今昔は、おそろしく「俊頼口伝」に依據

したものであろう。次に表現面から両書を比

較してみよう。

「玉ヲ造テ、天皇ニ奉リタリケルヲ、天皇、

他ノ玉造ヲ召テ、此ノ玉ヲ見セ給ケレバ、其

ノ玉造、此ノ玉ヲ見テ、「此ノ玉ハ光モ无ク

テ不用ノ物也」ト申ケレバ、天皇、大キニ嗔

リ給テ、「何デ此ル不用ノ物ヲバ奉テ、公ヲ

バ欺ゾ」トテ、其ノ本ノ玉造ヲ召テ、左ノ手

ヲ被斬ニケリ。其ノ後、代替テ、他ノ天皇、

位ニ即給テ、亦前ノ玉造ヲ召テ玉ヲ造セ給ケ

給ふ帝王に

(なし)

こゝにすまに玉をつくり

人

みかどに

(なし)

全

みかど

ことたまつくり

人

(なし)

みさせ給ひけるに、

(なし)

全

これは

全

(なし)

人

玉

全

(なし)

奉りけるぞとて

(なし)

(なし)

全

マを給ひけり

(なし)

さてまた世のはりけり

又新しく立たせ

給ふ帝王に

(なし)

こゝにすまに玉をつくり

て

全

ほいめの様に

(なし)

レバ造テ奉タリケルヲ、前ノ天皇ノ如ク他ノ

全

とほせ給ひければ、

(なし)

(なし)

玉造ヲ召テ見セ給ケルニ、其ノ度モ、亦前ノ

(なし)

これまた

(なし)

全

玉なり

(なし)

如ク、<sup>全</sup>此ノ玉、<sup>全</sup>光モ无ク不用ノ物也<sup>全</sup>ト申

全

全

(なし)

全

(なし)

ケレバ、亦、前ノ如ク、<sup>全</sup>天皇嗔リ給テ、<sup>全</sup>此ノ

全

手に入れにけり。

(なし)

全

度ハ右ノ手ヲ被斬ニケレバ、<sup>全</sup>下和泣キ悲ム事

全

(なし)

全

无限シ。

文章はまだつづくが、こここの部分のみの両

書ノ表現を比較しても、今昔の方が漢文的に

同じことを繰り返して冗漫。その話柄内容は

全く同巧である。<sup>全</sup>俊頼口伝<sup>全</sup>の方は、この

中国の説話を素性法師の「血のなみだ……」  
の歌と関係づけて、更に「帝王の愚かにおは  
しますなるためしに申す事なり。みかどの前  
などにやほ荒涼してはよむまじさ事と承うし  
かど、承暦のたびの歌合にも恋の歌に候ひし  
はいかなる事にか。と歌合の例まで出してい  
るは歌学書らしい特色であろう。(歌は「恋  
すとも泪の色のなかりせはしばしは人に知ら  
れがらまし。(越前守家道朝臣)

執筆態度

そのものには相違があるが、ここ

においても今昔の方が「俊頼口伝」からその  
 説話内容を引用したものではあるまいか。簡  
 単な「俊頼口伝」の表現をもとにし、今昔は  
 これを漢文的に敷衍したものであるう。

(ク) 蘇武の玉梓

(ハ) 秋風にはつかうがねぞきらゆなるたがたま  
 づさをかけてきつらんへ友則

これは「是貞のみこの家の歌合」の一首で  
 (古今集第四秋上雁の歌八首中の一。一首)

この歌の話柄の原典は「前漢書卷第五十四  
列伝にある蘇武の説話に依り広くわが国に  
も伝播されたもので、「今昔物語集」第十「  
漢武帝、蘇武遣胡塞語第三十一」にもある。但  
し、前漢書の原話では、衛律の方が先に匈奴  
にいて、降つてをり蘇武に投降を勧めたとい  
うことになつてゐる所が異なる。「今昔」の  
文章は「俊頼口伝」より詳しいが内容は同巧。  
おしろ「古本蒙求」にその出典を求めている  
様である。蘇武が胡塞に使ひして年久しく帰

らず、衛律が迎えに行き、謀を以つて蘇武にあつたという雁の便りの故事である。

俊頼は、この一首を「それによそへてかう雁の歌はよむなり」と述べている。又「今昔

にはは、むろん、例の如く中国説話を主題と

しているののでこの歌はない。従つてその結び

は「然レバ虚言ナレドモ事ニ随テ可云也ケリ。

衛律が謀ノ言バ賢カリケリトナム語り伝ヘタ

ルトヤレトという如き教訓に終つているのであ

るが、俊頼はここにおいて一首の歌の説明

を中心にして中国説話をふまえているのであり、  
その執筆態度には大きな相違がある。(「源  
平盛衰記巻八」)、「平家物語巻二」にも収録  
しているが、潤色が多く大分相違している。

この西書の表現を比較してみると次の通り。  
漢武帝と申しけるみかどの御時に、

「今ハ昔、漢ノ武帝ノ代ニ、蘇武ト云フ人有

ケリ。天皇、依テ此ノ人ヲ胡塞ト云フ所

蘇武といへる人を遣したるが、

ニ遣タリケルニ、久ク返リ不得ズシテ、年来

(なし)

ありけるを

(なし)

衛律といひける人の亦

其ノ所ニ有ケルガ程ニ、亦衛律ト云フ人、其

(なし)

ゆきて

(なし)

ノ所ニ行タリケルニ、衛律行キ着クマニ、其

所ノ人ニ先ヅ(なり)ソ、蘇武ハ有ヤ否ヤト人レ問ケレ人

バ、其ノ所ノ人、蘇武ハ有ケルヲ(なり)隠サムガ為あるを

ニ、謀ヲ成シテ、其人は蘇武、早ウ失テ年久ク成(なり)

又ト答ケルヲ、衛律、そらふことをかくして(反対にならざる)隠シテ虚言ヲ云フ人

ゾト人心得テ、心を得て蘇武、不死スシテ未ダ有ル(なり)

也。此ノ秋、雁ノ足ニ文ヲ結付テ蘇武が書ヲ書ききたて

天皇ニ奉ケレバ、雁、王城ニ飛ビ来テ、其ノ(なり)

書ヲ天皇ニ奉タリキ。レ

以上の如く、ここに於ても、ト俊頼口伝レハ、

簡略で今昔の方が詳しくくむしろ冗漫である。

さて、今まで述べてきた今昔との文章表現  
上についても今いであるが、俊頼は、中国故  
事そのものは、一首の歌を説明するための背  
景的位置においてある。今昔は、そうではな  
く、故事そのものを詳しく述べて、最後は例  
の如く何らかの教訓的言辞を以て「……語リ  
伝へタルトヤ」といふ一定の型に終るのであ  
る。丁俊頼口伝における中国説話の書き方  
は主要点のみを誌し、文飾は一切省略すると  
いふ表現方法をとっているのである。それを

逆に今昔は取り入れて肉をつけ漢文的表現を  
なして「今昔物語」としての表現様式を整備  
したと考えられる。むしろ、「俊頼口伝」と  
重複している今昔の全部の説話がすべて「俊  
頼口伝」に依っているとは考えられないが、  
以上述べた中国説話は、その表記のとりあつ  
かい方や配列の順序が両書とも隣り合せて  
いるという点、その文章表記の類似からみて  
いずれも俊頼口伝を先行としたものとして筆  
者は考えているものである。しかしその前後

関係については、なかなか困難な問題がある。今昔の作者も広く和漢書にはふれていようし、俊頼自身も、また歌学者という立場からのみでなく、広く和漢の説話については人一倍深い関心もあつたと推測され得る。書承もあり、又一方には口承もあり、今昔も、俊頼口伝といずれもそうしたもののから説話材料も得ていることだから、祖本を同じくした場合もあり得る。そうした場合の前後関係は極めて困難であり、結果にあつては偶然一致した説

話もあり得るわけである。これが口承ともか  
らみ合い、両書のみ類似説話の前後は簡単  
には決定されない。只、両書の文章表記から  
みて以上の説話などは「俊頼口伝」を先行す  
ることを考えてきたのである。今後とも可能  
な限り我々はその中から問題をみつけつゝ解  
決に近づけようと努力するより外はないので  
ある。

以上「今昔物語集」卷十の中、中国説話と「俊頼髓脳」  
との関係についての論考を終る。

注

- (1) ・「今昔物語集の研究」(上)
- (2) ・「今昔物語集の作者を廻つて」  
〔国語と国文学〕  
昭和33年2月号
- (3) ・「今昔物語の成立に関する諸問題」  
〔国文学解釈と鑑賞〕  
昭和38年1月号
- (4) ・「今昔物語集」二  
二七九頁
- (5) ・「今昔物語集」と「俊頼髓脳」との関係(一)  
〔奈良女子大学文学部  
附属研究紀要(中学)5  
高校)5  
集〕
- (6) ・「今昔物語集」二  
二八六頁
- (7) ・「攷證今昔物語集」  
天竺、震旦部

第三節 仏法伝来説話

今昔物語集巻第十一（本朝付佛法）は(1)仏法伝来説話と(2)諸寺縁起譚の二部から構成されていゝ。このうち俊頼口伝と関係していゝのは(1)である。それは聖徳太子と行基菩薩の史話で両書とも歌四首が一致する。

○しなてるや片岡山にいひに飢ゑてふせる旅

人あはれおやなし (聖徳太子)

返し

○いかるがや富の緒川の絶えばこそ我が大君  
のみちは忘れぬ (飢人)

この二首は聖徳太子が片岡山で飢臥の乞食  
とあわれんだ歌とその返歌である。

俊頼はこの歌につき「これは文珠師利菩薩

の飢人にかはりて聖徳太子に奉り給へる御返

なり。飢人は文珠なり。太子は救世観音なれ

言 つ て い る と こ ろ か ら み て 仏 教 説 話 と は い え	歌 な れ ば 返 歌 の た め し に し る し 申 す な り し と	俊 頼 は 、 そ の あ と の 方 に 「 こ れ ら は 神 仙 の 御	を 典 據 と し て 取 り あ げ た も の の よ う で あ る が	絵 詞 、 日 本 往 生 極 樂 記 、 大 日 本 法 華 經 驗 記 等	今 昔 物 語 も こ の 太 子 説 話 は 日 本 書 紀 、 三 宝	こ と が 主 た る 目 的 で あ つ た わ け で は な い 。	て い る が 俊 頼 に つ い て は こ う し た 説 明 を な す	ひ け る に や し と 仏 教 伝 来 前 生 譚 の 説 明 は と つ	ば 、 み な 御 心 の う ち に 知 り か は し て よ ま せ 給
--	--	--	--	--	---	---	--	--	--

俊頼の執筆態度の上には今昔とやや異なる立場から取りあげてゐる。これは説話文学集と歌学書という兩者の性格の相違から来たものでこの二首のみでなく、

○靈山の釈迦のみ前にちぎりてし真如くちせずあひ見つるかな  
(行基菩薩)

返し

○迦毗羅会にともに契りしかひありて文殊のみかほあひ見つるかな  
(波多羅門僧正)

の贈答歌についてとも言えることである。俊頼

が「このふたりは同じく文殊にておはしまし

けるとぞいひ伝へたる」と説明してゐるのは

今昔の曰う「行基菩薩ハ早く文殊ノ化身也

」と同巧でありいわゆる仏の前生譚であるが

俊頼がこの歌を例示するについて「は

「歌は俊名の物のなればかゝれざらむこと

こ、と、は、の、こ、は、か、ら、む、を、は、詠、む、ま、じ、け、れ

ど、ふ、る、き、歌、に、あ、ま、た、聞、ゆ、

といふ説明があつてのことである。今昔の如く長

々々行基の行動を叙するのが目的ではなかつた。それ故、ことばのこわいのをとり出し、  
 「靈山と申すは釈迦如来の法華經とかせ給ひける所なり。真如といへるはまことといへるなり。返しの迦毗羅会も同じことなり」と語釈を認みているのである。これなど今昔とは大いに相違する点で歌学書たる特色を活かしているのである。  
 以上の四首は今昔も取りあげているが、おそらくその出典原話は他にあり「俊頼口伝」

からではあるまい。俊頼は「今昔」の仏教伝来説  
 話にあたる部分は勿論とりあげてはいるがそ  
 れは主目的ではなく一つの背景的位置におき、  
 歌そのものを表面に押し出して、いる形をとつ  
 ている。さきの聖徳太子と飢人との二首にし  
 こも「歌の次」として採りあげて、いるのであ  
 った。仙教説話そのものとしてではなかつた。  
 行基菩薩と婆羅門僧正との贈答歌の配列順  
 序が、ずつと後になつて、いるのも実はそこ  
 に起因して、いることである。

「おほよそ歌は神仏、みかどきさきより始  
め奉りて、あやしの山賤にいたるまで、其  
心のあつる物はみなよまざるものなし  
と。この四首は拾遺集（巻二十哀傷）に入集  
してゐる。以上の通り、今昔と俊頼口伝とは  
歌四首は一致してゐるが、その取りあげ方に  
かなりの相違点があるのでその継承関係は明  
らかでない。大方それぞれ別個の成立過程を  
経たものと推測される。

第四節 音楽・歌徳の諸説話

「今昔物語集巻廿四」は「本朝付世俗」の編  
 で、この巻が優れた医術、陰陽呪術、音楽、  
 詩歌などのいわゆる芸能に関する諸説話を集  
 大成した特殊な一巻であることとをまず注意す  
 べき必要がある。  
 「俊頼口伝」とこの巻とは五つの説話が一致  
 している。この事について以下考えてゆく。

(1) 琵琶の秘曲を極めた蝉丸

まず、この巻から採用されたものに音楽説話として蝉丸の次の歌がある。

○世の中はとてもかくてもありぬべし宮もわらやもはてしなれば（蝉丸）

この一首についての俊頼の説明はごく短かくそれも道に執した昔の人達の説話の中の一首として例示したにすぎないが、今昔では「

源博雅朝臣、行会坂盲許語（廿三）とある。

出典は「江談抄」である。類話はず治大納言物

語（小世継）、和歌童蒙抄にもみえる。

今昔によると博雅は管絃の道を極めた人で、

会坂に住む盲人蟬丸に流泉、啄木の秘曲の口

伝を三年の後にようやく受けた説話である。

この一首は博雅が盲人のあやしき家に住ん

でいるためにゆかず使者をたてて「何ドオモヒカ不思

ケストコロ懸所ニハ住ゾ。京ニタリ来テモ住カシスと言わせ

た時、蟬丸は答えずして示した歌ということ

になつてゐる。俊頼口伝の認明は今昔ほど詳

しくはなない。

「是は逢坂の園にゐて行ききの人に物をこむ  
てよをすぐす者ありけり。よすがに琴など  
弾き、人にあはれがられける物にてゆゑづ  
きたりけるものにや。あやしの草のいはを  
つくりて藁といふものをかけてしつらひた  
りけるを見て、あやしのすみかのさまや、  
藁してしもしつらひたるこそなど笑ひける  
をよめる歌なりし。

と、こここでは博雅・蟬丸の名も出していなく

て一人の賤しい物乞いの琴弾として点出して  
 いる。しかもそこには今昔にみるような説話  
 内容には<sup>全く</sup>觸れていない。俊賴口伝では、  
 の経緯というよりもこの一首の生成の方が重  
 要であつたのである。しかもこの歌の配列場  
 所は神仙の歌について位置し、<sup>7</sup>まして人の  
 かたちしたうむものはこのみみるべきにや。  
 ……目に見えぬ鬼神をもあはれと思はせ、た  
 けきもの、ふの心を慰さむと古き物にも書  
 けれど、昔の事にや。この頃は、さも見え  
 ずし。

と古今集序を引き昔と今の人の歌に対する在  
り方の相違を示すための多くの他の歌例の一  
首としてこの蟬丸の歌もあげているのである。  
この一首は、新古今（雑）にも入集。今昔で  
は前述の通り芸道（音楽）の永遠性という点  
に焦点をあてて編纂されたところにもこの説話  
の存在理由もあつたわけであるが、俊頼は、  
ことさらそうした意識上りも賤しき者でも  
道に執する時には歌を詠むという昔の人の歌  
の在り方に焦点をあてた。そこに両者の執筆

態度の相違があつた。

(2)

道信の秀歌

○みる人いなき山里の花の色はなか  
く風ぞをしむべらなる(藤原道信)

道信は法住寺為光大臣の第三子。左近中将

で歌をよくした。今昔には「形千・有様ヨリ

始テ、心バヘ糸イト可カ咲シラテ、和歌ヲナム微妙ミウカウク読

ケル。と述べており、今昔における道信の説話は一編の歌物語ともいべき章で道信の種々の場に詠んだ二十首の歌から構成。この歌はその中の一首である。

この歌の詞書は今昔によると「亦此ノ中将屏風ノ絵ニ、山野ニ梅ノ花栄タル所ニ、女ノ只一人有ル屋ノ系幽ナル所ヲ此ナム読ケル」といふ背景のもとに詠まれた歌になつてゐる。しかし、作歌契機となつたのは「みる人もなき山里の桜花外の散りなん後ぞさかまし

(古今集・伊勢)といふ一首をふまえた歌のよ

うに思われる。修辞技法としては「をしむべ

らなり」とある用法も古今集にその用例があ

り、いわば古今集的措辞の継承である。

「俊頼口伝」が十首の中みらこの一首のみ取

りあげたのには理由があった。その事を俊頼

は次の様に述べている。

「もろくの花は風をうらみてのみこそある

に、是は風の花をしみとめたるは思ひかけ

ぬ事なりや。まことに風のおしみとめたるに

はあらず。ほかの花みなりはてぬるに此山  
里の花のまぢさかりなるは風の吹かざりける  
なりと。風はふけば所をも定めぬ物なるに、  
是にしも風吹かざりけるは、風のをしみける  
なめりといへるなめり。是ひとつの妙なり。  
と激賞している。一般の見方は花の方が風  
をうらむのであるが、この歌では「風の花を  
をしむ」という、普通とは逆に風をみたてた  
のを俊頼は「妙」と評しているのであり、こ

の考へは事實に非ざることを比喩的に表現し  
 てそれバ効を奏した場合には「妙」に至ると  
 いう俊頼の鑑賞態度の最も端的にうかばえ  
 る例とみるこゝとが出来る。俊頼はそうした意  
 味からこの歌一首をぬき出しその秀歌たる所  
 以を説明したのである。ここでは俊頼は説話  
 そのものを中心に語ることは目的ではなく、  
 その点今昔と異なる。むしろ一首の面白さを  
 中心にこの歌を取りあげ鑑賞したところ在意  
 味がある。今昔は、拾遺集、玉葉集、後拾遺

などの道信の歌を基底にし一編の物語風にまとめあげたものの如く、俊頼は、俊頼で別に道信の歌一首を摘録したと言う風に両者の依據関係はないと見た方が自然である。

(3) すぐれた伊勢の恋歌

○人しれずたえなましかばなひなひになき名  
ぞとだにいはましものを（伊勢）

この一首は、古今集巻第十五（恋五）所収  
 の伊勢の歌であり、又、今昔物語巻二十四「  
 伊勢御息女、幼時謠和歌語第四十七」にも所  
 収。今昔によると、この歌は、枇杷左大臣（  
 藤原仲平）が、まだ若くて少将の時に伊勢に  
 忍んで通つていて人々の噂に上つたがその後  
 通わずになつた時、詠んだ歌である。これに  
 より少将は哀れに思い、再びもとの如くすみ  
 つくようになつたという一種の歌徳・愛情復帰  
 説話である。ところが「俊頼口伝」には全く

説話はあげていない。歌の品等論「いとほしく  
おいふしたる歌」の例として、後撰集の「  
なざるぞと人にははいひてありぬべし心のとは  
ゞ如何こたへむ」と共にあげているのである  
。こうしただ点から考えると、今昔物語所載の  
一首ではあるが後頼は古今集から採ったので  
はないかと思われる。その理由として「恋歌  
五」は、怨む恋、うきおもひ、悲しき恋、忘  
らるる恋といった発想であり、明るい恋では  
ない。後頼が、「いとほしくおいふしたる歌

ー というのも、そういうし た類型として把握した恋  
 の歌であつた筈である。ここにおいては今  
 昔の如き物語の内容を語る必要はなく、作者  
 は誰でもよいのであり、説話を伝えるための  
 特定の主人公である必要はなかつたし、恋の  
 歌そのものから感得される「あはれさ」を含  
 んでいれればよかつたのである。この点説話を  
 介したその他の今昔物語と俊頼口伝とを比較  
 してみると、いささか事情を異にしている。  
 それは説話性はなくとも秀れた歌を俊頼が歌

学書として選んだがために外ならぬ。従ってこの歌も両書の間には依拠関係はない。

(4) 三輪明神の歌をふまえた赤染衛門の哀歌

○我やどの杉はしるしもなかりけり杉むらな  
らば尋ねきなまし（赤染衛門）

今昔物語集巻第二十四の「大江匡衡妻赤染

讀<sup>ニ</sup>和歌語第五十一<sup>レ</sup>をみると他にも二首あり  
 おそらく今昔の撰者が赤染衛門集に基づいて  
 構成した説話であろう。この一首は夫の匡  
 衡が稻荷の祢宜の娘を愛し久しく赤染の許に  
 帰らなかつた時、赤染の遣わした歌であり、  
 その後、匡衡は恥づかしく思い、家に帰り再  
 び祢宜の娘の許には通わぬ様になつたといふ  
 一種の歌徳説話としてとりあつていゝる  
 のである。ところが、俊頼は今昔の説話の如  
 くには取り扱わずに、三輪明神の「恋しくば

とぶらひ来ませ千早振る三輪の山もと杉たて  
るかどしを例歌として、三輪明神の縁起神婚  
説話を中心に説明しているのである。すなわ  
ち、この歌はすぐ前に例示した「三輪の山い  
かに持ちみむ年ふともたづぬる人もあらじと  
思へばし（古今集第十五恋五伊勢）と共に「  
明神の歌」の中に一括して取り扱っている。  
つまり伊勢、赤染衛門の二首とも夫を想う発  
想のもとに詠まれた歌である。この両首とも  
作者は三輪山説話をふまえて、夫々恋の思

いを抒情しているのが一致している。又三輪

山伝説にしても内容は大和の国に住む男女の

恋の説話が三輪明神の縁起に結ぶついた形を

とつているのである。この故に俊頼が赤染衛

門の歌の説明に「杉をしるしにて三輪の山を

たづぬとよむも、みな故あるべし」と述べた

のも理由あることであつた。只、俊頼と今昔

とではこれらの歌に対する取り組み方に根本

的な相違がある。即ち、俊頼は現実に起つて

いる恋の説話にせず、その本歌となつた素材

の三輪明神そのものを説明していることである。これは、「俊頼口伝」の構成上とも関係してくる問題で、まず説話群の最初に神仙説話をあげて、つづいて高僧説話、神仙説話を配しているのも、こうした説話を一まとまりにしようとする彼の執筆態度によるものであった。

彼の伝説、説話などを取り扱う態度の上に  
(1) 伝説、説話そのものを直接に語る場合、  
(2) 伝説、説話を素材背景として和歌を語る場合

のニッがあるた。この場合は、(2)に属する  
 〇 とうしたことから非現実的な説話、中国説  
 話の場合等は主として(2)に多い。同じ中国説  
 話を取扱うのにも「今昔物語」と「俊頼口伝  
 〇 では語る説話内容は一致していても、俊頼  
 の背後には常に和歌が存在していたことであ  
 る。ここにまた説話そのものを目標とする今  
 昔物語集と歌そのものを目標とする歌論書と  
 の相違があつたのである。

(5) 守房伝承の延則の歌

○かみがきは木のまろ殿にあらねども名のり  
をせねば人とがめけり（藤原延則）

この一首は「朝倉や木のまろ殿にわがをい  
ばなのりをしつっ行くはたがこそ」（天智天  
皇）をふまえて作った延則の歌であり、金葉  
集（雑上）には藤原惟規として入集。これに  
まつわる説話は今昔では「藤原惟規読和歌被

免語<sup>レ</sup>（第五十七）に所収。説話の内容は俊  
 頼口伝と大体同巧であるが最後の方には今昔  
 にない部分がある。最も短いのは十訓抄であ  
 る。この説話の主題は、延則（今昔・十訓抄  
 では惟規）が大斎院（選子内親王）の女房に  
 自己の名を告げずに訪れたため侍達からあや  
 しくとがめられ御門を開かれたが歌の徳によ  
 り許さして門を出たといういわゆる歌徳説話  
 である。大斎院が心の温い方であられたとい  
 うこともこの説話では重要な要素であった。

その事は「木の丸殿といへる事は我こそ聞きし事なれ」と仰せられぬこととで知られる。つまり、この説話は天智天皇の「朝倉や」の歌をふまえてのことが大切であるのに本当はこれを知らなかつたため（知つてゐるのは私のみと斎院の同情されたこと）に起つた延則を斎院が許されたのである。この事が実はこの説話を成立させた重要なポイントであつた。

ところがこの個所が今昔、十訓抄にはなく

普通の歌徳説話の如く取り扱っている。俊頼

口伝はここの場面を次の如く記している。

「女房承りてこの延則に語りければ、この事

よみながらくわしくも知らざりつる事なり

とてこの事のおびしかりつればこの事をよ

く承らむとて、ありける事なりけりとしてよ

ろこびけるとぞ守房語りし。その延則が先

祖にてよくきき伝えたるとぞ

と述べている。ここの描写は心理的にも複雑

であり延則と斎院とが「朝倉や」の一首を中

にして延則の歌に執した説話になつてゐることは注意すべきである。こうした点から明らかに今昔・十訓抄などは「俊頼口伝」を基にしてその表面のみの歌徳説話を採用してゐるといふことになるのである。

ここで注意すべきは、両書ともこの説話は守房が語つたという伝承者を、はつきりと記した例であること。これによると今昔も、俊頼口伝も共に、守房（今昔では盛房）が伝承者となつてゐることは共通してゐる。近時、

今昔物語の著者をめぐって(一)長い伝統(注・ウ)的な源

隆国説(長野掌一氏)(注・ロ)近頃は白河院の近臣

(国東文麿氏)など異説ではあるが、西氏は

只著者のみでなく、その間に伝承者の介在し

ていたことについても考究さ小ている。本話

にしても、すでに植松(注・三)茂氏がやうした問題と

共に指摘されているし、説話というものの性

質から、伝承者の名がその表現記述の中には

つきりと出てきている例は本話に限らず他に

も多い。即ち、この説話の提供者は守房であ

つたといふことである。

守房と俊頼との関係を示すものに、<sup>つ</sup>散木  
奇歌集卷九・雑上<sup>レ</sup>に俊頼の次の様な詞書を  
もつ歌がある。

<sup>つ</sup>つくしに侍ける頃、肥後守盛房が劍身のよ  
きあり、たまはんと申しけるが、をとむせ  
ざりけ水ば、いかにかと尋けるに、忘水に  
けりと申すと聞てよめる

○なき影にかけける太刀も有るものを鞘つ  
かのまに忘水はてける

この歌は、金葉集雑上にも入首しており、  
 その書も、「経信卿に具してつくしに侍り  
 けるころ……」以下殆ど散木奇歌集と同じで  
 あり、明らかに俊頼が父経信に伴われて筑紫  
 に在った頃の歌である。経信はすでに述べた  
 如く嘉保二年（1095）七月二十二日京を発ち、  
 大宰府に下向し、この地にて承德元年（1097）  
 正月六日ぬきで没している。俊頼の左京権大  
 夫在官時代の4才から3才までの間であり、  
 この時、盛房は肥後守であつた。「中右記」

によると、盛房が大宰小貳に任命されたのは、寛治八年四月二十八日の小除目の時であり、肥後守に任命されたのは「園太暦」によれば、寛治六年正月二十六日のことであるから、おそらく肥後守は兼官であったであろう。

盛房は、越前守定成の子である。今昔物語頭注（日本古典文学大系本）によると「尊卑分脈、惟規の孫に盛綱は見えるが、盛房は見えない」とある通り、これは「今昔」の作者の誤謬である。なお、盛房の事蹟は康和四年十

二月朔日（中右記）の條を最後に以降は不明  
 である。これを俊頼の年譜と比較してみると  
 応徳三年は、俊頼32才右近衛少将で、翌寛治  
 元年八月廿七日に左京権大夫従四位になり「  
 聽ニ雜袍ニとある。（朝野群載）  
 頼48才。「堀河院艶書合レ」に作者として出席  
 父経信が没して六年。俊頼は、中央歌壇に  
 て活躍している時機に当たる。盛房の活躍  
 期も年令は定かにしないが、ほぼ俊頼と一致  
 していることが知られる。

盛房は官人としても活躍しているようであるが、かなりの歌人でもあったとみえて、俊頼は、

○夏山の青葉まじりのをそ櫻はつ花よりもめづらしきかな (夏歌)

の一首を金葉集に入集させている。また彼が歌学者であつた例としては「綺語抄」に、「鬼のしこ草は蘭をいふ。或人云、肥後前司盛房説也」とある如き彼の名はこうした所に  
も見えているのは注意すべき事であらう。

官人としては俊頼はいわば守房の上司経信の子息であり、筑紫での親交もあつたろうし、歌の話も交わされ、守房の口から「かみがき」のこの一首を背景とする歌物語の語られたであらうことも想像される。

たとい、盛房が延則の孫でないにしても、この二人は何らかの姻戚関係を有していた人ではあるまいか。

説話の提供者として成立したこの一首には  
 いろく  
 と俊頼を中心として説話文学と歌論

書との間に横たわる多くの問題を含んでいた  
ようである。

以上、今昔物語集卷廿四と一致する俊頼口  
伝の歌五首を中心に考えてきた。同じ歌では  
あるがその取り扱いはかなり相違  
がある。このうち最も関係の深いのは(5)の説  
話であり、これは俊頼口伝を典拠として今昔  
が採用したものであることを指摘しておく。

オ五節 姨母棄・燕・白鳥などの諸説話

今昔物語卷三十所収の説話で俊頼口伝と一致するものが三話あり、和歌三首もまた一致する。この項では、今昔と俊頼口伝との関係を中心にその問題点を考えてゆきたい。

(1) 姨母棄山説話の伝流

○わが心なぐさめかねつさらしなやをばすて

山に照る月を見て

この歌は、古今集卷十七雑の歌に「読み人しらず」として入集している歌であるが、「大和物語」一五六段にもすでに載せられてい  
る説話の歌でもある。今昔物語「今昔物語」の  
卷三十「信濃国夷母棄山語第九」と殆ど同文  
で収録されている。いわゆる信濃姥捨山の棄  
老伝説の典型的なものの一つである。この物  
語は、また「源氏物語」「枕草子」その他多

くの古典にも収録されている。歌学書として  
 は、俊頼口伝しを始めとして袖中抄、色葉  
 和難集、八雲御抄などにも採用されている。

この姨捨山棄老伝説の原典は、印度棄老説  
 話から中国に入つて「原谷」の説話になつた  
 ことについては既に（注④）茅賀矢一博士が指摘され  
 ている。即ち今昔物語卷五ヤ世二には「七十  
 余人流遣他国、語し、全卷九ヤ四十五には「震  
且厚谷、謀父止不孝語」等が収められてい  
 ることから、この棄老説話の歴史は古い。こ

れが日本に渡来して信濃国の姨母棄山の伝説に転化されてきたのである。

しかし、この中に所収の歌は、前述の如くすでに古今集に入集しているし、又古今集時代歌人にも

○あやしくも慰めがたき心かなをばすて山の月もみなくてへ小野小町集

○みつゝわれ慰めかねつ更科の姨捨山にてりし月かもへ凡河内躬恒集

などのあるところから大和物語にこの説話が

収録されるまですでに書承、口承いず  
れからも広く伝播されていたものと思われ  
るところで、この説話と歌が大和物語、今昔  
物語集、俊頼口伝の三書共にとりあげてい  
ることを中心に以下考えてみたい。

まず、今昔物語の説話と大和物語とを比較  
してみると、その説話の内容そのものは同巧  
現在の妻に責められて夫が姨母を月の夜、山  
に棄つたが、終夜眠れず悲しく思つてこの歌  
をよみ、翌日は迎えにゆきるとの如くに養つ

たという構想で何れも妻の心からこの事件は起つたことになつてゐるが両書には次のような相違がある。(一) 今昔の方では「然レバ今ノ妻ノ言ワム事ニ付テ、由元干心ヲ不可発ス今モ然ル事ハ有<sup>アリ</sup>又ベキ<sup>シ</sup>」という教訓的言辞が添加されておリ、しかも「今の妻<sup>シ</sup>という表現から「元の妻<sup>シ</sup>のいたことをほのめかしてゐるのである。この事は今昔では、すぐその次に「住下野国、去<sup>レ</sup>妻後返棲語ヲ十<sup>シ</sup>という説話が載せられていて、ここでは今の妻(異

妻)の許にいた男が本の妻の夫を想う歌を聞  
 いて再び本妻のもとに帰った話であり、外に  
 もすぐつづいて本妻の許に帰った二話がある  
 これらは「今の妻」と「本の妻」との対照的  
 な話にして、いるためにこうした教訓が添加さ  
 れたものと思われる。しかし、大和物語の方  
 は、そうした意図は全く見られずに独立した  
 話として取り扱っている事。(二)、今昔には「  
 八月十五夜の月」とあるが、大和物語には唯  
 「月のいと明き夜」とのみある事。(三)、今昔

には、<sup>カカリ</sup>「其前ニハ冠山トゾ言ケル。冠ノ中子ニ似タリケルトナム語り伝ヘタルトヤシノ地名伝説が結びついてゐるが、大和にはない。以上の三項目が両書の主な相違点で、今昔の方が詳しく教訓的である。これらのことから、(1)両書の間には関係がないという立場には松本治久氏、<sup>(注・5)</sup>倉野憲司博士がおり、最近では<sup>(注・6)</sup>国東文磨氏も同じく疑問視されてゐる側に立っている。(2)これに對して関係あるとする立場、即ち今昔が大和を引用しながら俊頼

口伝を参考としたとする立場には酒井金次郎<sup>(注・8)</sup>  
 氏・平田<sup>(注・9)</sup>俊春氏・橋健二氏<sup>(注・10)</sup>等がいる。尚、直  
 接、俊頼口伝にはふれていないが、今昔が大  
 和によったとするのに川村悦麿氏・目加<sup>(注・11)</sup>田<sup>(注・12)</sup>  
 さくを氏・萩谷朴氏<sup>(注・13)</sup>等がいる。

それでは次にこれらの事と「俊頼口伝」と  
 を比較してみると、(一)は大和に近く、(二)、(三)  
 は今昔に近い立場にある。  
 ところがここに両者の間に大きな相違があ

る。それは(一)姨を捨てたのは「大和物語」  
今昔物語集「ではいずれも妻に責められた男」  
の行為であるのに「俊頼口伝」では姪になっ  
ている事。(二)「わが心なぐさめかねつ」の歌  
を詠んだのは、「大和」  
「今昔」では男  
あるが、「俊頼口伝」では姪となっ  
ているの  
である。この事について  
すでに「袖中抄」  
「が指摘している。即ち、俊頼朝臣と大和物  
語と大いに違い物語はをひ、是はめひ也。彼  
はむかへてかへりたり、是はすて、やみにけ

リ。尚物語の説に付べき歟。(中略)すてた  
 らん夜は、をばにてもをばすて山にてる月を  
 みてとは詠むべからざるか」と言つたのは、  
 了俊頼口伝への批判である。この事は、た  
 しかに俊頼口伝には不自然な無理を含んでい  
 る。綺語抄ではさらに甥が山で殺した事にな  
 っている。これらを何と解したらよいだろう  
 か。思うに、了俊頼口伝し「綺語抄」は異伝に  
 立っている。

こうした点から松本治久氏が、今昔物語が

「俊頼口伝」を材料としていたならば「我が  
心」の歌を詠んだのは姨母として構成したの  
ではないか。しかるに、今昔では、姨母を捨  
てた男の作った歌になつてゐるので「俊頼口伝  
以外」の材料を用いたのではないか。という考  
え方に立つてゐる。松本氏の論には「大和物  
語」との関係が全く考慮されてゐない。ここ  
に弱点がある。この事については橘健二氏も  
言及されてゐる。倉野博士の指摘された今昔  
の「其ノ前ニハ冠山トゾ言ケル。冠ノ中子ニ

似タリケルトゾ語り伝へタルトヤシの個所が  
 大和には全くない理由で両者の関係を否定さ  
 れている。この個所は「俊頼口伝」には存し  
 ているがこうした事をいかに解したらよいで  
 ありうか。私見としては、ある一個所がない  
 からと言つて全々関係のないといふことを結  
 論づける事は早計であらう。説話には書承も  
 口承もあり得るし、説話は流動する。俊頼は  
 説話には非常な関心を有して、俊頼口伝  
 には中国伝説も多くとり入れて、本朝説

話にしても大和物語とは決して無縁とはいわれない。唯、この説話について言えば大和物語では歌を詠んだのは男であり、へこれは今昔も同様、俊頼口伝に於ては姪である点たしかに大きな相違である。これはおそらく口承であらう。八月十五日夜というのも大和にはない。この点、今昔と俊頼口伝は近い関係にある。この見地から私見としてはやはりこの説話は、今昔が大和を引用しつつ、俊頼口伝をも参考にしていると解したい。俊頼口伝に

おける異伝は、今昔物語集としては採用せず、  
 冠山の説明を附した事は、俊頼口伝に依  
 拠したと解するのが妥当であろう。

この様に今昔、大和、俊頼口伝、三書とも  
 共通している面もあるが細かに内容をみると  
 三書ともそれぐ異っている所もある。然し  
 説話は中国説話でもそうだし、異伝もあつて  
 流動するものである。異伝であつても部分的  
 には夫々影響しあつていることは考慮に入れ  
 ておかねばならないことである。

以上のことから「姨母棄山」の説話は今昔の成立年代から推測して大和、俊頼口伝にその出典を求めろということが言えるのである。

(2) 燕を見倣う寡婦説話

○かぞいろはあはれとみらむつばめ そら(今昔)  
りは人にちぎらぬものを(作者不詳)

今昔の題には「夫死<sub>シ</sub>女人、後<sub>ニ</sub>不<sub>レ</sub>嫁<sub>ガ</sub>他<sub>ニ</sub>夫<sub>ニ</sub>語<sub>シ</sub>

とある。その中の一首。夫を亡くした娘に再び夫を持つ様にと両親のすすめにも耳をかさず、燕すら二夫にま<sup>み</sup>えずという習慣のあることを例に、まして心ある人間は二夫を持たずという貞女の心を主題とした一篇の説話である。説話としては動物説話の形態をもとつている。この説話内容は俊頼口伝と殆ど同巧である。配偶を失った雌燕が永く他の雄燕と行を共にしない説話は「南史」(一ノ七十四)にその出典がある。和歌童蒙抄はこれを引用詳

しく説明している。へ霸城王整之姉妹、襄陽  
が敬瑜の妻になり十六才の時夫を亡くしたが、  
燕二夫にまみえぬ例を両親に語り嫁がなかつ  
た説話)

俊頼口伝と今昔の説話内容は全く同巧であ  
るのみでなく、その文章表現も殆ど一致して  
いる。その具体例をあげると次の通り。

再婚をすすめる母に対して夫を亡くした娘  
の言うところを見ると（右の朱書は俊頼口伝

「我し男ニ具シテ可有キ宿世有ラマシカバ

なし

全

末を

全

ありつる男（なし）  
 前ノ男（なし）コソ不死（なし）ズシテ、相具（なし）シテ有全ラマシ  
 カ。男（なし）ニ不具（なし）マジキ報（なし）ノ有（なし）レバコソ、彼（なし）レ  
 モ死全ヌラメ。啓全ヒ夫（なし）ヲ儲（なし）タリトモ、身全ノ報（宿世）  
 ナラ全バ亦（なし）モ死（こゝろ死ぬれ）ナム。然（なることおぼし）レバ此（こと）事（こと）可（た）被（ら）止（ま）シレ  
 ト。母全此（なし）ヲ聞（き）、大全キニ驚（おど）キテ父（なし）ニ此（なし）由（よし）ヲ  
 語全リケレバ……シ  
 の如く、今昔の方は漢文体で俊頼口伝の方  
 は和文脈のスタイルをとっているという区別  
 のあるだけで、こうした酷似はこの文の他に  
 も例えば最後の文の所でも言える。

此(なし)しヲ思フニ、昔ノ女ノ心ハ此(なし)ナム有ケ  
 ル。近來今やうのノ女ノ心ニハ不似ザリケルニコソヤ  
 の如くこれまた酷似してゐるのである。この  
 説話の原典がたとひ南史にあつたとしても今  
 昔はそれにはよらずに俊頼口伝に依拠してい  
 ることが指摘できるのである。  
 俊頼口伝の方には「つばくらめをとこふた  
 りせむ」といふこと文集の文なりとぞ」とあり  
 具体的ではないが出典のことにふれてゐる。  
 また俊頼口伝ではすぐこの歌の次に、



の一首をあげてゐる。この歌についてもお  
 恋ひてくもがくれなく（万葉集卷十九）  
 のつばめくる時になりぬと雁がねはふるさと  
 ほかたつばくらめはふたりとはたがひにめを  
 とこをまうけぬ物にてあると文に申したると  
 かや。ひとりくうせぬればやもめにてはつ  
 るとぞ。鴛鴦といふ鳥のさやうにあるとぞ承  
 る。つばくらめもつちのえつちのとの日はす  
 べてまうでこぬとぞ詩などにむ作りて候めら  
 と委細につばめの習俗について説明を加えて

いるところから、これらの原典は中国説話に  
依拠していることが知られる。勿論、今昔物  
語に依ったということとは考えられないところ  
である。

以上、<sup>7</sup>かぞいろしの歌についての説話的  
背景を今昔と俊頼口伝との関係を中心に私見  
を述べた。

(3)

ろと白鳥になった女の話

(1) あさもよひきの関守がたづかろゆるす時な

くまづゑめる君（今鏡・ヲ十らちぎき）

(2) たづかろ手にとりもちて朝狩に君はたちき

ぬたなくらの野に（万葉集卷十九）

(3) あさもよひきの河ゆすり行く水のいづさや

あさもよひきの河ゆすり行く水のいづさや  
イハルサヤ（今鏡）  
 あさもよひきの河ゆすり行く水のいづさや（古歌）

この三首は俊頼口伝につづけて載せている

歌で、この中今昔物語と重なるのが(3)である

この(3)の歌についての説話を俊頼は次の如く

説明している。

「昔男がいて夢に深く愛している女が出て  
来て『我は、はるかなる所にゆきなむとす。  
ただし、かたみをばとどめむとす。わがか  
はりにあはれにすべきなり』というのをき  
いて夢が覚めた。見ると女はなくて枕に一  
張の弓がたっていた。それをはなさずに大  
切にしていたが、月日へてやがてその弓が  
白鳥になつて紀伊国に至つて又人間になつ  
た。この歌はその時に男の詠んだ歌である。

といふのである。いわゆる白鳥説話の変型と  
 みるべきであらうが、人間に再び転生したと  
 いうのは珍らしい構成である。

さて、この説話は「今昔物語」卷三十の「  
 人妻化<sup>ミナ</sup>成<sup>リ</sup>了<sup>ニ</sup>後<sup>ニ</sup>成<sup>リ</sup>鳥<sup>ト</sup>飛<sup>ビ</sup>失<sup>セ</sup>語<sup>ヲ</sup>十四<sup>ニ</sup>」にも所収。

その説話内容は全く同巧。一但し今昔では「  
 人の妻」としてゐる。俊頼はただ女とある。こ  
 最後の語釈の部まで殆ど同じである。その箇  
 所を比較してみると、

アサモヨヒトハ朝メテ物食フ時ヲ言フ也折  
 イヅサヤムサヤトハ狩スル野ヲ言フ也なりとて。此  
(なし)ノ歌ハ、聞ク、何トモ心不得マジケレバナ  
 ム。亦此ノ語リ(なし)興おゆかしげに恋ク、規(なし)ニトモ不聞えぬ思エ又  
 事どもナレドモ、旧全キ記物にニ書タル事ナレバ此ナ  
 ム語リ(なし)伝ヘタルトヤシ。  
 とある。これを考えると、今昔に於ては物語  
 りを伝えるのが主目的ですで見えてきた如く  
 中国説話の場合には和歌は一首もない。  
 それが本朝になつて説話の中に和歌をも加

える様な構想になつてきた。ところがこの説  
 話の如く歌の語釈を施すということは極めて  
 稀なことゝ、しかもそれが俊頼口伝と殆ど同  
 巧ということを考えると明らかに今昔は「俊  
 頼口伝」に依拠したということと言える。とこ  
 ろで、この一首について「奥義抄」には次の様な  
 解釈があり俊頼を批判している。

(一)「この歌おぼつかなきを、或物にはあさ  
 もよひとはつとめたるものくふとき也と侍り。  
 又女の弓になりて、のちには白き鳥になりて

よめる歌也などあれど、させる証文も見えず。  
又この歌の心にもかなはず。

(二) 「ふるき物にはあさもよひとは木をいふ  
也とかけり。それはさもありけむ。きのかは  
はところの名也。木といはむとてあさもよひ  
とはおけるにこそ」と解釈し、更に、

(三) ①の歌をも引用して「これもきといは  
むとてよめりと見えたり。女のゆみになれる  
こと、古くもその心よめる歌見えず。おぼつ  
かなし」とある。

清輔のとりあげた(一)、(二)の「或物にはしと  
 あるのは明らか」に「俊頼口伝しをさし、いず  
 れも俊頼説を否定した。清輔は語釈として(二)  
 の立場即ち枕詞「あさもよひ」の解を「木」  
 に「づける解に立つている。袖中抄も「朝々  
 燎炊レ飯木と広義の外は不被心得」と清輔と  
 同じ解に立つている。つまりこれは「麻裳善、  
 きしではなく後の仙覚説の「朝にもえてよき  
 木と」づくしに展開する。「枕詞燭明抄」を  
 みると「朝炊飯謂之安佐母與比也。然れば朝

に燃す木といふ心にていひつづけたるなり。  
或説に朝もよひは朝あさ催もよほなり。朝に飯炊くとして  
まづ薪を催す心なりと言々。されど前説を信  
用すべきか。と前説の方を支持する態度の様  
だが俊頼はむしろ後説の系統に属する。す  
に俊頼時代には少くとも用いられていた説と  
思われる。従つて、  
俊頼が「あさもよひとは朝あさめて物食ふ折を  
言ふ也」と解したのは、「朝催」に通ずるも  
のである。臆測が許されるならばあるいは俊

頼自身の発案した解であつたかも知れない。

今一つ。『いづさやむさやとは狩する野を、

言ふ也』とある俊頼の解はどう考えたらよい

だろうか。袖中抄には俊頼説を批評して『い

るさやむさやは狩する野と言事も慥ならぬい

づさは出がま也。いるさは入がま也。むさや

とはいづる野の侍らばさもいひてん、おぼつ

かなし』と述べ、更に『私試案言、行水のい

づさやむさや、入さやむさやと句を可切興。

縦ば此説は恋の歌にて水のたえぬ心に恋しき

ことをよせて出るにもやむやは、いるにもや  
むやは可言歟。古歌にはかかる事のみ多かり  
いづさ、いるさ、むさや、此三のさ文字は皆  
たすけ詞也。さらばは無其事歌になりぬべし  
とあるのはさすがに顕昭の学者的解釈態度の  
窺えるものゝ後頼よりも一歩進んでいると言  
える。

山田<sup>(注14)</sup>孝雄氏らの頭注をみると「曰出づさ」

と曰入るさ』とを対せしめ、その下にムサヤ  
と置いて調子を整えたもの。ムサを後世のム

サクサと同じく、秩序の無い状を指す擬態語  
 に基因するものと見れば、紀の国を出る時も  
 紀の国に入った時も同じように不可解なこと  
 ばかりである。の意に解せられよう。然らば、  
 上句は序詞となろうしとあり、一段とすつき  
 りした解になつてきている。ところぞここぞ  
 注意すべきことは俊頼口伝所収の下句には「  
 いづさやむさやいづさやむさやしと同じくり  
 返しになつてゐる。後の歌学書は今昔と同じ  
 ように「いづさやむさやいづさやむさやしの

訓みになつてゐる。俊頼がこの下句の解を十分果たし得なかつたのもここに起因していたのである。それのみならず今昔に「此ノ歌近来ノ和歌ニハ不似ズカシ」とあるのはすでに和歌批判の詞に立ち入つており、歌に対してのかがよふな批評は今昔にあつては極めて稀なことでおそらくここだけである。俊頼口伝にもこの評語はない。これはどのように解したらよいか。歌に対しては無智であつたというのが今昔の作者に対する今日までの一般

的見解であるが、かような批評は、或は俊頼  
 から学び得た知識ではなかつたろうか。説話  
 好きの「俊頼口伝」などを読むことにより歌への  
 開眼がこうした形になつて現われたのではな  
 いか。下句の訓みにしても俊頼よりもよいし  
 或いは他の文献による古歌の所引かも知れな  
 い。要するに俊頼自身不十分な解であつたこ  
 の一首を今昔の作者がこうした批評をなして  
 いることは注意してよいことであらう。今昔  
 の作者は、俊頼口伝の説話内容により、なお

一方別な文献からも影響されていることが考  
えられる。

さて、説話内容そのものについての奥義抄  
の俊頼説否定の理由は「させる証文も見えず。  
という文献主義に立ってのことである。しか  
し、俊頼は「古き物に書きたればのぞくべき  
ならねば書きつくばかりなり」と一応依拠し  
たことをことわっている。ただその古い書が  
何であるかは明確に言っていない。白鳥伝説  
の変型とみるべきものであろう。説話に関心

の深い俊頼のことだから何かそうした古説話によつていふことは推測される。清輔はその点、俊頼の見た古説話はみていなかつたのであろう。

以上、今昔物語卷三十所収の説話と俊頼との関係を考へてきたがこの説話歌三首とも俊頼口伝に今昔が依つたという極めて深い関係ををもつものである。その原典の不詳なる点はまだ問題として残るが、ともかく俊頼口伝の方が先で今昔に資料を提供したものであるこ

とをここで指摘しておきたい。

## 第六節

わすれ草の鬼と性規臨終哀話

今昔物語卷三十一所収の説話で俊頼口伝と一致するのが二話ある。この節では両書の関係を中心に考えてゆきたい。

## (1) 7 わすれ草の説話

まあ今昔の方には7兄弟二人、殖萱草紫菀

語し（オサセ）の説話が掲載されているが、俊  
頼口伝にもこの説話があり、歌二首をあげて  
いる。（今昔には歌なし）その歌は次の二首

(1) わすれ草わが下紐につけたれど鬼のしこぐ  
さことにしありけり（巻四・大伴家持）  
(2) わすれ草かくもしみゝに植ゑたれど鬼のし  
こ草なほおひにけり（巻五・寄物陳恩）

この二首はいずれも万葉集の歌であり、そ

の語彙の取扱いについては「俊頼と万葉集」の項  
で述べたが、ここでは主としてその説話を中  
心に考えてみたい。

説話の内容は父を失った兄弟二人の内、兄  
は萱草を植えて思いを忘れ、弟は紫菀を植え  
て益々忘れざるように努め、弟は父の骸を守  
る鬼の助けを得て一日の出来事の吉凶を知る  
ようになつたという話である。俊頼は伝も今  
昔も全くその説話内容は同巧。文章表現まで  
酷似している。その例を次に示す。(朱書は

俊頼口伝

(A) 前文の箇所

「昔い失全又ル人ヲバ墓ニ納メケレバ、此(なし)ヲモ

納メテ、子供祖ノ恋シ恋しまたびに兄弟キ時ニハ打具シテ彼うちぐしつ

ノ墓ニ行テ、涙ヲ流シテ、我ガ身ニ有ル憂全

ヘヲモ歎全ヲモ、生タル祖ナドニ向テ言ハム

様ニ言ツツ全ゾ返ケル帰リナリル。

(B) 鬼のいう言葉の個所

君は親に孝あること  
汝ヲ祖ヲ恋ル事、年月ヲ送ルト言ヘドモ、

替ル事无シ。兄ハ同ク恋ヒ悲テ見エシカド

モ、思ヒ志ル草ヲ殖テ、其レヲ見テ既ニ其

ノ駿ヲ得タリ。汝ハ亦紫菀ヲ殖テ、亦其レ

ヲ見テ其駿ヲ得タリ。然レバ我レ、祖ヲ恋

フル志ノ勲ナルヲ哀ブ。我レ鬼ノ身ヲ得タ

リト言ヘドモ、慈悲有ルニ依テ、物ヲ哀ブ

心深シ、亦日ノ内ノ善悪ノ事ヲ知レル事明

カ也。然レバ我シ、汝ガ為ニ、見エム所有  
あらばラム、全夢ヲ以テ必ズ示サムト言テ、全其ノ  
全音止又。シ

まだ文は両書つづく。以下も非常に酷似し  
ているが例の如く今昔の方は漢文体である。  
ただ異なるのは、俊頼口伝には、この説話を  
語ったあとに、フされば万葉集にも萱草をば  
志詩の草とは書けるなりとぞ人申しけるし。と  
いう部分で、これは今昔にはない。今昔では  
説話を語ったのみに終り二首の歌もない。こ

れは説話文学としての今昔と歌学書としての俊頼口伝の性格の相違を示すものである。

俊頼口伝をみると、この歌の周辺はいずれも万葉集を取りあげているのがその特色である。

俊頼は、この説話を説明するに当たってはその素材を万葉集に求めているのである。尤も俊頼自身「たゞしたし、かにみえたる所なし古き人の物語なれば、僻事にもやあらむ」と一応は疑問の形で注を加えているが、俊頼自身

万葉集からこの二首を摘出したのであろう。  
この説話そのものが万葉と関係あるか否かに  
ついては俊頼も全面的に肯定しているのでは  
ない。しかし、ともかくも俊頼がまず万葉の  
二首をあげ、説話を詳述していることは歌学  
書としては最初であり、以後の歌学書に俊頼  
の説話を全文引用しているのに「色葉和難集」  
があり、「綺語抄」には俊頼口伝所載の説話  
を要約した形で引用。他の歌学書はいずれも  
「鬼のしこ草」についての語釈のみ。さすが

頭昭は「散木集注」を出し俊頼研究の第一号ともいうべき学者で袖中抄には説話はとりあげていないが俊頼の次の一首

〇わすれ草しげれる宿を来てみればおもひの木よりおふるなりけり（散木集・恋部上）

を例示している。

以上のように俊頼も「わすれ草」には興味をもつたらしくその主題歌をも詠んでおり、

これにまつわる説話を古き人の物語から採用したのであろう。従って、今昔の文が俊頼口

伝の内容のみか文章表現まで同巧ということ  
は俊頼口伝をそのまま取り入れ、俊頼の例示  
した万葉の二首は削除したと筆者は解するも  
のである。やはり万葉の二首の例歌をあげて  
説話を詳述した俊頼口伝の方が今昔より先行  
するといふ考え方を持つことが妥当と思われ  
るのである。

## (2) 惟規臨終哀歌

〇 都には恋まへしかきむ人びとのあまたあれば（後拾遺集）なほこのた  
 びはいかむとぞ思ふ（藤原惟規）

惟規の説話は先に述べた今昔物語巻廿四に  
 も所収。本話とも惟規説話は二話あるという  
 ことになる。この一首は俊頼口伝にも採用し  
 ている歌。小世継（宇治大納言物語）、後拾

遺集（恋三）にも入集している。

これは、惟規が父越中守為時の任地に下る途中重患に倒れ遂に空しくなつたその臨終の時も仙への正念を思わぬ只風流の心を以て歌をよみ最後の歌の文字一字を書き終らぬに息が絶えはて父がその字を書き添え形見にしたといういふば詠歌にまつゝある臨終哀話である。「今昔」と「俊頼口伝」の説話内容は全く同巧。今昔には諸本欠字の三個所があるが、これは俊頼口伝により補い得る。今その個所を中心に

両書の文を比較してみると次の通り。

(1) 息ノ下ニ、ソノ中有ノ旅ノ空ニハ嵐ニ類

フ紅葉、風ニ随フ尾花ナドノ本ニ松虫ナド

ノ音ナドハ不聞エ又ニヤレト

息ノ下ニ言ケレバ、僧慄サノ余リニ、糸荒

ラカニ何ノ新ニ其ヲバ尋ネ給ゾレト問ケ

レバ、惟規、然ラバ其等ヲ見テコソハ

メレト打息ミツツ言ケレバ、僧此ノ事ヲ

系狂シレト言テ、逃テ去ニケリ。父、

全

全

全

全

全

全

全

全

全

全

全

全

全

全

全

松虫の下に(袋虫)あり。

ためらひつつ

尋ねぬるぞ

それを

物ぐるほし

とて

まかりにけり

親ありて猶

働<sup>働</sup>ラカム限ハシと思テ副居ヲ守リケレバ、

惟規ニツノ手ヲ拳<sup>さきけて</sup>テカヨリケルヲ心<sup>たよりければ</sup>モ不得<sup>全</sup>

テ見居<sup>全</sup>タリケルニ、傍<sup>(なし)</sup>ナル人、若<sup>(なし)</sup>シ物書

ムナド思スニヤシト心得<sup>人の心を得て</sup>テ問ケレバ、

□ケレバ、筆ヲ湿シテ紙ヲ具シテ取セタリ<sup>(なし)</sup>

ケレバ、此<sup>かきたる歌</sup>ク書タリケリシ。

※ 迂テ言ニケリシの下に俊頼口伝には

「さる人の心ばへもありけりとしろし

めさお料に、やくなけれど申すなりし。

と今昔にない添加の文がある。

この兩文をみると殆ど同文と言つてよい。  
 ただ結文に今昔では「父京ニ返リ上テ語ケ  
 レバ、其ノ比コホヒ此ヲ聞ク人極ク哀ガリケリ。」と  
 ありこの説話の伝承者が父であることを示し  
 ているが、この部分は、俊頼口伝には全くな  
 い。

説話そのものの性質から言つてなくてもよ  
 い部分であり、これはいわば伝承者の後日譚  
 とみるべきもので、植松(注15)茂氏の「その父が語  
 ったこととしてしているのは最も自然な伝承者の

推定といふべきであらう。と言つた通りこの説話の伝承経路を示すものである。ところが更に文末には例の如く今昔に、  
「此ヲ思フニ、何カニ罪深カリケム。三宝ノ事ヲ心ニ懸テ死ヌル人尚シ悪道ヲ遁ルル事ハ難カナルニ、此レハ偏ニ其ノ方ヲバ離レケレバ悲キ事也。此ナム語り伝ヘタルトヤ」とあるのは、今昔物語筆者の批判である。ここにでは仏教的内容にまご立ち入り、惟規がその臨終にさえ正念を願わずに風流の心を最後まで

捨て得なかつたことを悲しきこととみている。これは今昔的見方の典型的表現であることは言うまでもないが、歌を最後まで捨て得ない事を少しも悲しむべきものと見ない俊頼はむしろそのことを哀れとして臨終の歌に大きく焦点をあてて書いているのである。今昔のような結文は俊頼には全く必要でなかつたのである。

とあるのは、明らかに為時の誤りであり、歌  
 今昔に、惟規の父を「越中ノ守藤原ノ為善」

のことについて、今昔の筆者は極めて無肉  
心であつたと言わざるを得ぬ。

さて、次に今昔と俊頼口伝との先後關係に  
ついてであるが、既述の通りその文章は殆ど  
同じである。これをどの様に考へたらよいか  
この説話は、今昔ではすぐ前の「わすれ草」  
につづいて配置されていゝれとも俊頼口  
伝と重複している。と同時に二話とも俊頼口伝  
とその文章が殆ど同巧ということは何を意味  
するか。本説話にしても前話と同様、「俊頼口

伝<sup>レ</sup>からその説話内容を承け入れて、それに仏教的教訓を附加したものと解釈することが出来るであらう。

以上今昔と俊頼口伝とが共存する十九話について説話内容、文章表現の両面から比較しつゝ考えてきた。結論としてこれをまとめるとみるに次の如くなる。

(1) 今昔物語卷十所収の7中国説話と七話の原典はそれ〱種々考えられるが両

書の継承関係については大方、俊頼口伝を今昔の方が承け入れたものと推定される。

(2)、  
卷十一所収の仙教的伝承説話の二話は歌四首も一致共存してはいるが、その説話の取り扱いはかなりの相違もあり、両書にはその継承関係はなくおそらく別個の成立過程を経ているものと推測される。

(3)、  
卷二十四所収の五説話は歌五首も一致

共存しているが、この中、惟規説話のみに両書の依拠関係は認められ、しかも今昔の方が俊頼口伝を典拠としてい  
 ること。他の説話は夫々別な場に於て形成されたものと推測される。

(4)、  
 卷三十所収の三説話は別に典拠原話はあるが文章の類似点から俊頼口伝に今昔が依拠していることが推測される。

(5)、  
 卷世一所収の二話は歌も一致共存しており、文章表現類似の点から俊頼口伝

を今昔が典拠としたことが推測される。  
以上の如く十九話のうち十三話まで今昔と  
俊頼口伝との間には関係あり、しかもいずれ  
も俊頼口伝の方が説話の材料提供者になつて  
いるということである。これは俊頼口伝の成  
立を今昔よりも先行する説に立つ筆者の考之  
方に基づくものと同時に、両者の関係の有無  
はその文章表現の酷似という点に規準を置い  
た事をここに特に言つておかねばならない。

その説話内容の類似ということも一つの条件ではあるが、話素が類似しているということのみでは関係の有無は決定されない。原典を同じくしている場合その話素の似ていることは当然であり、これは書承のみではなく口承でもあり得る。ここでは、文章表現が似ているということがあるが、オナーの規準設定となると、というのが筆者の考え方である。

もとくこの両書はこれまでの論述の中でしばしば触れてきた様に執筆態度そのものが

根本的に異なる。今昔は説話を語るためのも  
のであり、俊頼口伝は歌を語るための歌学書  
である。にもかかわらぬ俊頼は一首の背後に  
説話があればこれを尊重し、全くその歌の語  
釈も施さず専ら説話のみを詳述に終っている  
場合も少なくない。そこに「俊頼口伝」以前  
の歌学書のなし得なかつた特色を多く持つて  
いるのである。彼以後の歌学書に説話を取り  
入れるようになつた原流は実に俊頼口伝にあ  
ることを忘れてはならぬ。

今昔物語卷十の中国説話に和歌一首も取り  
入れなかつたのはその必要を認めなかつたか  
らである。しかし歌学書たる俊頼口伝には歌  
が必要であつた。

今昔もそれ以外の巻では見てきた如く「わ  
すれ草」以外の説話には全部歌が付随してい  
る。和歌を有している今昔の説話が全部俊頼  
口伝と関係しているとは言われないうが、今昔  
の作者は説話を好む俊頼にかなり私淑してい  
たのではなからうか。おそろく和歌について

の知識は俊頼口伝に負う所極めて多かつたこと  
が想像されるのである。

両書の関係については尚今後残されてい  
る問題も多いが、筆者の見解として以上まとめ  
て報告した次第である。

注

(1) 『今昔物語』(日本古典全書)

(2) 『今昔物語集成』(立考)

(3) (15) 『古代説話文学』(塙書房)

(4) ・ 「攷証今昔物語集」

(5) (9) 「今昔物語の成立に関する覚書」 (「古

典研究」三巻才十三号) ・ 「日本古

典の成立の研究」など)

(6) ・ 「平安朝文学に於ける説話的要素」

(文学才二巻才五号・昭9.5)

(8) ・ 「今昔物語集の成立年時臆説」

(文学才一卷才九号昭8.12)

(10) ・ 「今昔物語集」と「後頼髓忠」との関係

(二) 奈良女子大附属中・高校研究紀要

才五集・昭<sup>37</sup>・12

(11) 万葉集伝説歌考

(12) 増訂平仲物語論

(13) 平中物語附平仲滑稽譚

(14) 今昔物語集五 (日本古典文学大系本)

P243

## 第二章 俊頼の説話歌論

前章に於ては俊頼と今昔物語との関係を詳述してきたのであるが、ただこれだけでは俊頼の説話歌論の一面を知るのみであり、この章に於てはその他の説話歌群に目を向けてみようと思ふ。従つて本章における考察対象は今昔物語に採りあげていない説話グループであるのでこれを次の如くまず、

の  
三  
項  
に  
わ  
け  
る  
こ  
と  
に  
よ  
り、  
日  
本  
の  
説  
話  
が  
如

(3) 習俗説話

(2) 史的  
古説話

(1) 神仙・高僧説話

か  
に  
し、  
(二) は  
さ  
ら  
に  
の  
二  
つ  
に  
大  
別  
し、  
(一) は  
そ  
れ  
ぞ  
れ  
の  
出  
典  
を  
明  
ら

(二) 日本説話の歌群

(一) 中国説話の歌群

何なる場合に於て「俊頼口伝」では採りあげら  
 れているかといふ問題が明らかになり来る  
 と思われれる。かくして「今昔物語集」の説話  
 と合わせ、説話歌群の全体が把握されること  
 になるのである。そしてこれらの説話に対し  
 てその主題の和歌を俊頼はどのように解釈し  
 たか。またそれは後の歌学書にどのように継  
 承され、或いは否定されたか。といふことを  
 考え、俊頼の説話歌解釈の位相を確かめてゆ  
 こうとするのが本章の目標である。

第一節 中国説話歌群

(1) 徐君の故事

○はしたかの野守の鏡えてしかな思ひおもは  
ずよそながらみむ（古歌）

この歌に ついて 俊頼は 天智天皇の 鷹狩の 故  
 事（但し、袖中抄以下 雄略天皇とある書多し）  
 に 従ひ 野守のおきなが 野中の たまり水の 鏡で  
 鷹の様子を 知つた 事の 外に 徐君の 鏡の 故事を  
 も 併記して 説明して いる。

「野守の鏡は 徐君が 鏡なり。其鏡は 人の心  
 のうちを てらせる 鏡にて、いみじき 鏡なれば  
 よの人こそ ぞりて ほしが りけり。これに さら  
 我持ちと げじと思ひて 塚の下に うづみて けり  
 とぞ、又人申し けり。と記し、更に 続けり  
 とい

づれかまことならむ<sup>ら</sup>と<sup>ら</sup>と<sup>ら</sup>の結論について  
言っていない。そこで奥義抄は、俊頼の問題  
提示をうけてはいるが、徐君の鏡説は否定し  
ている。題眼は、また異なつた見地からこの  
歌については、  
。はしたかめのもりの鏡えてしがな恋しき人  
の影やうつると  
。東路の野もりの鏡えてしがなおもひおもは  
ずよそながらみん  
の二首を一首に書いていると新説を出して、

「徐君が鏡ならば、はし鷹とはいはむ東路と  
 てこそあらめ。あづまぢとさすことは野とつ  
 ぐけん料也。あづまぢは野おほかれはつづく  
 る也。但慥にみえたる事なけれど、はし鷹の  
 野守の鏡といへるあしからずしと。これは俊  
 頼説を一步進めた解である。その他袖中抄に  
 は「人の生んだ鬼が野守になつて王に奉つた  
 鏡と、いう一説をもあげてゐる。綺語抄には、  
 昔文と、いう人が女とかささき、の鏡をニつ分け  
 合つて持ち愛の愛らざることを照し合つた故

事をあげている。しかしこれは袖中抄によつて否定された。又「色葉和難集」には「俊頼義に、は、無下に心、あさく、厚中なり。たゞ水にうつりたるかけをみむからに人の心のおもひ思はずをばいかゞしるべき」と俊頼説（鷹狩の故事の方）を否定している。

俊頼自身は、元永元年（644）修理大夫頭李子卿の宅における柿本人麿影供に「水風晚来」の題で、

○夕日さす野守の鏡かひもなくふれける風は

かげしそはねば

の一首を詠いでいる。これは先に述べた鷹狩の故事を背景にして詠んだ歌である。俊頼が徐君の故事を採りあげているのは後人により否定はされたが、中国故事に対する俊頼の考え方を知る上に注意すべき事である。

(2) 博物志

〇忘るなよたぶさにつけし蟲の色をあせなば

人にいかゞ答へむ (古歌)

返し

○あせぬとも我ぬりかへむもろこしのねもり  
もまもるかぎりこそあれ (〓)  
○ぬぐくつのかさなることのかずなればねも  
りのしるし今はあらじな (〓)

俊頼はこの古歌三首を説明し、

「これはもろこしの事なめり。こゝには蟲  
はあれどつくる事なし。遠き所などにまか

る時かひなにつけつれば、洗ひのこひす水  
 どおつる事なし。たゞをとこのあたりによ  
 るをりにおつるなり。ぬぐくつのかさなる  
 事のとよめるは、女のみやかごとある折に  
 おのづからはきたるくつのかさなりてぬぎ  
 おかるゝなり。さてはかくよめるなりし。  
 と述べている。

この俊頼の説明は、まだ具体的ではないが、  
 奥義抄以下の歌学書では、漸次詳しくなつて  
 いる。奥義抄では、  
 一是はもろこしの人には女

をうたがひて、ものへゆく時にはおもりと云ふ  
心蟲の血を合葉してかひなにつくるなり。  
とよめり。たゞ蟲のりろなどもよめり。な  
ど具体的になつてきている。  
この歌に「蟲の色をあせなば」とあるとこ  
ろからすると、奥義抄の説明の方が俊賴の、  
蟲そのものを腕につけると言つていふより合  
理的な様に見える。

「袖中抄」には、故事の出典を「法花經玄

賛」と「嘉祥法花義疏」の仏典に求めている。  
 童蒙抄には、この歌の成立を中心に「一條院  
 の御時或人のめによみてとらせける歌也」と  
 時代を明かしている。

「やもり」の故事は、博物志によれば、

「漢武帝試之駿也」とある。「ぬぐくつ」の  
 故事も中国に発生し、男女のみそかごとを、

「ぬもり」、「ぬぐくつ」によつてためされた  
 中国の故事であり、「俊頼口伝」以降、各歌学  
 書が、俊頼の説を基底に発展させている所に

俊頼の解釈の意義と位相とがある。

(3)

華陽國志・寰宇記

の時鳥なきつる夏の山辺にはくついでいだしぬ  
人やわぶらむ（寛平右宮歌合・夏歌）

この歌についでにはつくつてしに關する中国  
の故事があり、俊頼は、その故事によりて歌  
の解釈を試みた。つくつてしとは、時鳥の雛

の啼声がかくつてと聞きなされるところからの  
 名で附会して「查直クツテ」(「香の価」となり、さ  
 らに「くつてどり」というホトトギス時鳥の異名に発展  
 し、又の異名が「蜀魂」という中国の伝説か  
 らきている。

その出典は、「華陽国志」(「晋常璩」と  
 「寰宇記」(「宋・樂史」)にあり、いずれも蜀  
 の皇帝が死して時鳥になった故事である。

蜀帝が、塵落して香を作つて売り、塩売り  
 の翁が之を買つて価を拂わないうちに共に死

に蜀帝は時鳥となり、翁は賜となる。へもず  
のはやにへといらのもこのためにいう。  
こうした伝説をふまえてこの歌を俊頼は、  
「郭公といへる鳥はまことには百舌鳥といへ  
る鳥なり。そのもずを時鳥とはいふべきなり。  
昔くつぬひにてありける時、くつの料をとら  
せざりければ、今四、五月ばかりにたてまつらむ  
と約束してうせにけり。そののち如何にも見  
えざりければ、はかるなりけりと心をえて、  
くつをえざらめとうせしくつてをだに返しと

らせむと思ひてとらせむとちぎりし四五月に  
 来て、時鳥こそく<sup>く</sup>とよびありくなり。もず  
 まるそのほどはよにはあれども秋つかたする  
 やうに木の末にねて声高にもなかで、音もせ  
 ひかきぬをつたひて時々<sup>々</sup>こ<sup>こ</sup>とく<sup>く</sup>しくとつ<sup>つ</sup>ぶ<sup>ぶ</sup>  
 やくなり。此事<sup>事</sup>が<sup>が</sup>こ<sup>こ</sup>とならば昔の歌合によ  
 みていらむやは<sup>レ</sup>

と委細<sup>細</sup>を尽して中国説話を語つてゐる。以  
 後奥義抄も俊頼の説を要約して引用。『綺語

抄』、『和歌童蒙抄』、『色葉和難集』などいず

れも俊頼説を継承している。

(4) 史記

○鹿をさいで馬といひける人もあればかをも  
もをいしと思ふなるべし (藤原 仲文)

(返し)

○なしといへば惜しむかもとや思ふらむ鹿や  
馬とぞいふべかりける (能宣)

俊頼はこの二首の贈答歌を、拾遺抄から採  
 用してゐる。

拾遺集にも入集してゐるが、その詞書には  
 「能宣に車のかもをこひにつかはして侍ける  
 に、侍らずとひひて侍ければ」とある。

仲文が、能宣に車のかも鴨（カリモ 釭）を乞うたが

ないと言つたので、駕（借し）と思ふかと掛言  
 にしたのである。その背景には、秦二世の王  
 が鹿と馬との判別も出来な、暗愚な説話を詠  
 み込んでゐる。能宣またこれにうまく応酬し

て当意即妙な贈答歌に仕上げているのである。  
さて、この説話の出典は史記にある。秦の  
佞臣、趙高が傷つて二世に鹿を馬と言ひ諸臣ま  
た彼の威を懼れて加担し遂に王位を奪つた故  
事による。俊頼の解釈も全くこれによつたも  
ので、結語抄、和歌色葉、色葉和難集等いず  
れも俊頼の解を引用した。(因みに、俊頼自  
身にもこれに依拠した歌がある。)  
〔和歌一編・和ニ章・和一節「中国出典の歌」  
の項参照〕

(5)

## 論語

○雪ふりて年のくれぬる時にこそそつひにもみ  
ぢぬ松もみえけれ (古今集・よみ人しらす)

この歌は、寛平御時佐の宮の歌合によまれ  
た歌である。

俊頼はその解に「これは年の寒くて松が板  
をるといふことの候なり。賢き人も只こども

なき折は賢き事も愚かなる事も見えず。』とい  
う書き出しになつてゐるがこの解は、論語の  
「歳寒然後、知松柏之後凋。」と、「貞松彰  
歳寒」、忠臣見ニ国危。」を出典としてゐる。  
ここから「松の木かへの木などもよろづの木  
の青き時には何ともみえぬに、冬になりても  
ろもろの木のはの落ちぬる時に、松の木もか  
への木もみゆれば、この木なむ、まことの木  
といへる事のあるをよめる歌なり。』  
といふ解釈が導き出される。

奥義抄も俊頼の解を継承している。

(6) 竹官仲の故事

夕やみは(後撰集)  
ゆふされは(大和物語)  
冬されば道もみえぬどふるさとをは(後撰)も(大和物語)とし

駒にまがせてぞ行く(後撰)  
(後撰集)

これは後撰集恋の歌で詞書をみると「おもひわすれにける人のもとにまかりて」とある。

この一首は大和物語五十六段にも所収。

越前権守平兼盛が兵衛君に贈つた歌として出てゐる。初句は「中ふされば」とある。

後撰集では「夕やみは、俊頼口伝には「冬されば」といずれも異なる。

この歌につりての俊頼の解は、「是は菅仲と「へる人の裡道をゆくには我はくらさに道も見えぬど馬にまかせてゆくといふ事のあるをよめるなり。老馬智といへる事は是より申すとぞ承る。」出典は蒙求。菅仲は看桓公に仕えた上卿。桓公が孤竹国を征した時大雪が降り、

人皆路を失う。仲曰「可用老馬智。於是放老馬隨其路得歸本国。」と奥義抄、童蒙抄などにほ原文を引用して説明しているが、いずれも俊頼口伝によつていふことは明らかである。

(7) 仙人主題の歌

(6) につづいて俊頼は、中国の仙人を主題とする歌四首を一括して配列させている。歌は

古歌、素性法師、伊勢、山上憶良の順で必ず

しも時代順にはなつていない。

(イ) 斧の柄

○斧の柄はくちなば<sup>ば</sup>又もすげ<sup>が</sup>かへむうきよの  
なかにかへらずもがな (古歌)

俊頼は「これは仙人の室に圍碁を打ちてお  
たりけるを、木こりのきて斧といへる物を  
もたりけるがつかへてこの打碁を見けるに  
その斧の柄のくちなくてただけにければ、あや

しと思ひて帰リて家を見れば、あともなく  
 昔にて知れる人もなかりけるとぞと、  
 この解は至つて簡単で具体的ではないが、以  
 後の歌学書は、漸次、具体性を増してくる。  
 例えば、綺語抄には、この歌は、晋王質と  
 りけりほどの、仙家にいたりて琴を弾ずるをき  
 にしてゐる。(但しここでは碁でなくて、琴を  
 きくという異伝になつてゐる。)色葉和難集で  
 は更に詳しく、場所が博胡山になつており、

斧が朽ちて白髪となり、歸つたのは四、五百年の後で七世の孫に会つたといふことになつてゐるのは浦島説話の原型を思わせる。

ところ、この説話の原典は、「述異記」によつてゐるのである。こうした仙境類話は、

「遊仙窟」 「搜神後記」 「龍女伝」 「桃花源

記」 「槐宮記」 などあり、いずれも場所は山

中、或は山窟であるが、仙境と龍宮などは超

現実的世界、超時間的觀念など一致する点、

浦島伝説の原型とも言える。只海洋民族と大

陸民族との説話の相違は当然おこり得ること  
 であらう。いちはやく歌学書「俊頼口伝」の  
 中に「斧の柄」の歌をとりあげた俊頼の功は  
 多とせぬばなうぬ。この説話などは広くわが  
 国にも伝播したものとみえ、多く歌にも詠ま  
 れてゐる。次にそれらの勅撰集入集歌を参考  
 にあげておく。

① ふるさととはみしこともあらず斧の柄の朽ち

しところぞ恋しかりける（古今集・紀友則）

② もゝしきはをのゝえくたす山なれやりに

し人のおとづれもせぬ (後撰集・をんな)

③ 芥の柄の朽ちんもしらず君がよのつきんか

ざりはうちこゝろみよ (後撰集・命婦いさぎよ)

④ をのの柄は水のもとにてや朽ちなましはる

をかぎらぬさくらなりせば (金葉集・大中臣公長)

⑤ 芥のえのくちし昔は遠けれどありしにもあ

らぬよをもふるかな (新古今集・式子内親王)

⑥ 芥のえもかくてや人はくたしけむ山が覺中

る春の空かな (新勅撰集・按察使善宗)

⑦ 幾千世の秋をへぬらむ斧の柄の朽ちしとこ

ろの山のはの月（続古今集・左近中将公雄）

⑧ 君が代は斧の柄くちし山人の千度かへらむ

時もかはらじ（公・皇太右宮大夫俊成）

⑨ 斧の柄をくたす仙人帰りきて見るとも君が

御代は変らじ（風雅集・従三位 頼政）

⑩ 我が君は斧の柄朽ちし年を経て民の七世の

末に逢ふまで（新拾遺集・津守 国冬）

⑪ 幾夜わが家路わすれて斧の柄の朽木の松の

月を見るらむ（新続古今・法印淨弁）

⑫ 君のみやあかづかも見む斧の之の朽ちにし  
山の嶺のもみぢ葉（今・後八條入道前内大臣）  
⑬ 斧の柄も朽ちやしぬらむ鷲の山暫しと思ふ  
法のむしろに（今・法印経賢）

(四) 山路の菊

○ ぬれてほす山路の菊の露の間にいつかちと  
せも我はへにけん（古今集・素性法師）  
これは、一寛平布疋右宮菊合一の歌で素性

自身仙人になつた思ひでよんだ題詠歌。俊頼  
 は「これも仙人の事なり。露の冏といふはた  
 だしばしといふなり。そのほどに十世をふと  
 云ふなり」と註してゐる。この歌も(1)と同じ  
 く時間を超越した仙境にあつては露のまでも  
 十年を纏てゐるといふことを歌つたもので、  
 菊の花を配したのも仙家の象徴であり、謠曲  
 「菊慈童」などの世界にもつながらる。この歌  
 を取りあげたのは「色葉和難集」であり、そ  
 の解は俊頼説を継承してゐる。

(ハ) 裁ち縫わぬ衣

〇たちぬはぬきぬきし人もなきものを存に山

姫のぬのさらすらむ (古今集・伊勢)

俊頼は「これも仙人のきぬはぬひめのなき

といふ事のあるをよめるなり」と注してゐる。

古今集の詞書によると伊勢が、龍門寺(奈

良)に詣でて瀧のもとにてよんだ歌である。

「扶桑略記」によると、昔三人の仙人がこ

の龍門寺に飛行したとある。そうした仙境に  
 きて今は仙人もいないのにどうして布をさら  
 しているのだらうと、滝を布にみたとの感  
 慨がある。この歌も「色葉和難集」のみがと  
 りあげ俊頼説をそのまま引用している。

(二)

はこやの山

心ざしふかうの里におきたらばはこやの山

をゆきて見てよし (万葉集)

俊頼は「はこやの山といふは是も仙人の居

所なり。ふかうの里といふはえもいはぬ事の  
心に覚え、おぼしき所の目にみゆる事のある  
なり。さらましかばかの仙人のすみかをばみ  
てましとよめるなり。』と注してゐる。

この「ふかうの里」についての俊頼の説明  
は、必ずしもはつきりはしてゐないが、莊子  
のよく用いた虚無、自然の世界の意を継承した  
ものである。はこや（藐姑射）の山と、  
ことばで莊子に出ている仙人の住む想像上の山  
のことである。綺語抄には「ふかうといふは

无何有といふ事也」と説明し、藐姑射と共に

「仙人の住む所也」と注している。奥義抄も

これを継承、和歌色葉は奥義抄と同文である。

訓も「こゝろをいふかうの里におきたらば

はこやの山を見まうちかけむ」と現在の訓と

殆ど変らない。只、「ふかう」は現在の訓で

は「<sup>む</sup>無<sup>か</sup>何有<sup>う</sup>」(日本古典文学大系による)とあ

る。俊頼は下句を「ゆきてみまし」と訓ん

で「<sup>い</sup>る<sup>が</sup>」これは無理である。「心をし」と「

心ざし」と訓んだのも不十分であつた。

以上の様な欠点もあり、中国説話の内容説明なども極く簡単ではあるがその後の歌学書の據りどころとなつたことは、史的にみて俊頼の価値は高い。これは中国説話に限らずその他、日本説話の語釈についても言えることである。

以上主要な中国説話を基底にした歌に対する俊頼の解とその後の歌学書への影響について考察してきた。

要は、俊頼を起点として中国説話の語釈が

出発したといふことである。先に述べた如く  
 に彼自身も中国説話をふまえた歌を詠み、今  
 時にそれらの歌について論究を進めてソつた。  
 素朴な短評もあつたが、以後の歌学書は、  
 いずれも「俊頼口伝」を足場にして或はこれ  
 を継承発展させた所に彼の中国説話に因する  
 歌の解釈的位相があつたのである。具体的に  
 言えば以上13首の解の中後の歌学書に否定さ  
 れたのは僅か2首であり、他はいずれも俊頼  
 説の継承といふのがその実態であつた。

## 第二節 日本説話歌群

俊頼口伝の序が終ると種々な歌体、歌病についで論が始まる。この中に神話、伝説として素盞鳴尊、聖徳太子、修業僧の夢枕などの歌も含まれている。しかしこれらは、一反歌のすがたを例示した歌であり説話そのものを対象として採りあげたものではない。

(但し、聖徳太子の説話は「今昔物語」との肉係に於て筆者はその対象として論究した。)

この一段が終ると、俊頼は

「およそ歌は神仏、みかどきさきより始め

奉りて、あやしの山賊にいたるまで、其心

ある物はみなよまざるものなし。」

という古今集序の継承と思われ、一文を述

べて、以下歌の内容論に及ぶ構想をたててい

る。この内容論にも小段があり、複雑多岐に

わたつていゝが、これらの中から説話の歌を

抜き出して考えて中こうとするのがこの節の

目標である。説話の歌を全体的に把握する意

味から、(一) 神仙・高僧説話、(二) 史的古説話、  
、(三) 習俗説話の三つに類別して考えてゆく方  
法をとつた。以下これに従つて俊頼の日本説  
話の歌に対する態度を分析してゆきたい。

(一) 神仙・高僧説話

まず登場して来るのが行基菩薩、婆羅門僧  
正との贈答歌であるが、これは今昔物語集と

の關係に於て採りあげたので省略。次には片  
 因親王と弘法大師との贈答歌、伝教大師など  
 の歌を採りあげてゐる。

例えは伝教大師の、

○阿耨多羅三藐三菩提の仏たちわがたつそま

に冥加あらせ給へ（新古今集入集）

の歌をとりあげてこの人こそ歌などはさる物  
 もやあるとも知らずおはすべけれど、われが  
 国の風俗なればみなよみ給へり。と注してい  
 る。これは専門歌人でなくともかゝる高僧の

歌を「国の風俗」として大切にした彼の広い  
視野からの和歌観が知られる。

さて神仏の歌は、(1)明神託宣説話、(2)明神  
感應歌徳説話、(3)明神示現説話、等の形をと  
つて表われる。(1)の例は、

(A) 物思へば沢の虫もわが身よりあくがれ出づ  
る魂かとぞみる (和泉式部)

巾返し

(B) おく山にたぎりておつるたぎつ瀬にたまち

るばかり物な思ひそ（貴船明神）

(A) は和泉式部が夫に忘れられた時に貴船明神に参詣し詠んだのに対し明神が(B)の歌を返した託宣の形をとつてゐる。この二首は後拾遺集（神祇）にも入集。古今著聞集にも収録された。(2)には、

(A) 天雲のたちかさなれるよはなれば神ありと  
ほしとも思ふべきかは（貫之）

の有名な貫之の一首がある。この歌は貫之

か蟻通明神の前を暗いたため馬に乗りすゑると  
俄かに馬が病み臥した。物とがめの著しい明  
神であつたが、明神の托宣によりこの一首を  
詠ずると馬はおきて身ぶるいをして、いなり  
き立つたといふのである。これは明らかに貫  
之の歌徳説話の形をとつて、しかも明神の感  
應夢想による詠歌といふ莫に特色をもつてい  
る。もとく蟻通説話は中国伝説の「孔子蟻  
通説話と印度の「棄老国説話」とが混成され  
たものであるが、我国では蟻通明神縁起とし

てこれらの話素の形はなく専ら蟻通明神縁起として変形し伝播したものである。

我国の初見は「紀貫之集」であるが、只明神感応歌徳説話としてのみに終つてゐる。

俊頼の解もこの系統に属する。(但し、枕草子

春曙抄には蟻通説話と桑老説とを詳しく述べ明神縁起にふれてゐる。)

(B) 天の河なはしろ水にせきくだせあまくだり  
ます神ならばかみ(能因法師)

この一首は伊予守実綱が国のうちに早魃の  
続いた時、三島明神に能因の雨乞いの歌を奉  
らせたもので金葉集、古今著聞集にも収録さ  
れた。これも明神感応歌徳説話の中に属す。

(3) の例としては、

(A) 夜や寒き衣やうすき片そきのゆきあはぬま

より霜やおくらむ (住吉明神)

(B) 恋しくばとぶらゐ来ませ午早振三輪の山も

と杉たてるかと (三輪明神)

(c) 三輪の山いかに待ちみむ年ふともたづぬる

人もあらじと思へば (伊勢)

(D) 住吉のきしもせざらむもの中魚にねたくや

人にまつといはれむ (住吉明神)

の四首がある。(A)・(B)は住吉明神の示現歌

である。由来住吉明神は和歌三神として古来

より尊信厚い明神として示現説話を多く生ん

だ神。(A)は、新古今集(神祇歌)にも入集。

俊頼はこの歌につぎ、この御社の年つも

りて荒れにけれはみかどの伊勢にみせたてま

つらせ給へる歌なり。と其の歌の成立を説明し、解説としては、<sup>一</sup>片そぎを鶺鴒とかけるともあるか、歌論義に互に牽へることあり。かさ、ぎといひては心も得ず。と鶺鴒説を否定した。俊頼は<sup>一</sup>かたそぎといへるは、神の社の棟にたかくさしりてたる木の名なり。住吉の社は二の社さしあひてあれば、その二の社の朽ちにたる由をよませ給へるにや。と歌論義に従つて解説している。(鶺鴒説をとつたのは、孫姫式を始め奥義抄、袖中抄等) (四) は、

拾遺集（神樂歌）入集。左注に「ある人の曰

く任吉の明神の托宣とぞ」とあり、俊頼は「

これも任吉の明神の御歌とぞ申しつたへたる、

ひが事にや」と全面的には肯定していな口

吻をもらしてゐる。俊頼も一応は任吉明神の

歌として提示はしてゐるもの、これには説

話の伴なつてゐない矣、「神樂歌」の中の「

首である点又、この歌自身、「任吉の岸」を

「まゝし」に掛け、松「に」待つ、を掛けたり

して恋の歌になつてゐる点等から俊頼の「ひ

が事<sup>ニ</sup>や<sup>シ</sup>と言<sup>フ</sup>たの<sup>ニ</sup>従<sup>フ</sup>べ<sup>キ</sup>であ<sup>ら</sup>う。

(B)は三輪明神が佐吉明神に奉<sup>ツ</sup>た歌、(C)は

(B)の歌をふまえて返歌の形で、伊勢が枇杷大

臣に忘れ<sup>ら</sup>れた思<sup>ハ</sup>いを詠<sup>ヒ</sup>た歌であり、へ古

今集恋五入集へ今一首つづいて「我宿の松は

し<sup>る</sup>し<sup>も</sup>な<sup>か</sup>り<sup>け</sup>り<sup>し</sup>へ今昔物語集との関係

に既述<sup>シ</sup>の歌があり、い<sup>ず</sup>れ<sup>も</sup>こ<sup>れ</sup>ら<sup>の</sup>歌は、

三輪山説話を形成する一連の歌である。

さて、俊頼は以上明神関係の種々な説話を

あげた後に「これらよ<sup>し</sup>、な<sup>き</sup>事<sup>な</sup>れ<sup>ど</sup>、神の

つゞきに、さることありけりと申し召さむ  
 料にかきて候なり。まして人の形したらむ者  
 はこのみみるべきにや。生とりけらむもの  
 何ものか知らざらむ。目に見えぬ鬼神をもあ  
 はれと思はせ、たけきもののふの心をもなぐ  
 きむと古き物にも書けれど、昔の事にや。こ  
 の頃は、さも見えず。しと古今集の序を引き合  
 に出しその当時と今の人々の歌に對する在り方  
 の相違点を指摘すると今時に批判してゐる。  
 こうした考え方ももつてゐたればこそ、老

人七人の歌し、後撰集にみえる「幼なり五節舞  
姫し、盗人、乞食などまで年令身分の如何に  
拘わらず歌に執した説話を例示して歌の盛ん  
であつた昔のことを述べたのである。

次に神仏示現・高僧説話そのものではない  
が、これと関連する仏教説話を加えている。

○露のいのち草の葉(根)にこそかゝれるを月の鼠  
のあわたしきかな (花山院御製)

○草の根に露のいのちのかゝるまを月の鼠の

騒ぐなるかな

(全)

この二首について、後頼は「これは世のほか  
 なきたとひにて、経文にある事とぞ承る」と  
 まず歌そのものの仏教説話たることの性格を  
 明らかかにしてゐる。即ち、これは「樓炭経」から  
 来てゐる説話であり、その内容話素は或る人  
 が荒野の虎に喰われようとして古い井戸の底  
 に逃げ込む。底にはわ、に、が、劍の如き歯で呑み  
 こもうとしてゐる。頼りとする草の根には白  
 黒二匹の鼠が代るくかみゆらうとしてゐる  
 の様を周囲の急迫した状態を説話の場と

してゐるが、この説話の内容についで俊頼は  
「底にあるわには我遂のすみかの地獄なり。  
上に追ひいれつる虎はこの世にてつくりあ  
つむる葦障煩悩なり。たちかはりつゝ草の  
根をつみきる鼠は月日の過ぎ行くなり。白  
き鼠は白なり、黒き鼠は月なり。月日のゆ  
くさまはなむかの鼠の草の根をつみきるが  
やうに程もなきといへるたとひなり。しとし、  
最後は「これらを見てもにあらむ人はよのほ  
かなき事をば思ひしるべきなりし。と結んでい

る。いわゆる仙教説話としての性格を規定づけてゐる。奥義抄<sup>レ</sup>の解も殆ど同巧、引用のあとがみうけられる。以下「和歌色葉<sup>レ</sup>」色葉和難集<sup>レ</sup>いずれも俊頼の解から出発してゐる。二首とも「露のいのち<sup>レ</sup>」月の鼠<sup>レ</sup>の語句と有することには仙教歌としての特色をよく発揮してゐるといえよう。俊頼は以上の如く神仏・高僧説話の十首についてはいずれも現実の人間との交渉をもたせ生きた歌として考えようとしたのがその特色であつた。

(二) 厂史的古説話

この(二)に於ては厂史的古説話を中心として考えるのが目的である。その方法としてその説話の歌が上代の歌、或いは作者不詳の古歌、又は平安朝の歌であれ、凡そ古説話にふさわしい作品に焦点をあて、俊頼を中心にその他関係事項につき考えたい。(但し、万葉集については

第二編第三章に改めて詳述したのでここでは省略した。)

(1) いなむしろ

のいなむしろ川そひ柳水ゆけばなびきおきふ  
しその根はうせず（顕宗天皇）

俊頼は、この歌の「いなむしろ」の語釈に  
ついて、「いなむしろといへる事は、楢のほのい  
でとりのほりて、田に波よりたるなむむしろ  
をしきならべたるに似たるといふなり」とし、

更に「又河のつらに生ひたる柳の枝の水にひたりて流るゝが又いなむしろに似たるなり。と」と兩義を提出してゐる。次にこの歌の背景としての説話について、「その柳の木のもとには傷かで、枝の水に流れてなみよるなむ我かく、あやしくなりてまどひ歩くに似たると、昔のみかどの末なりける人のあやしき童になりて、釣する者になりてその柳の本におて釣すとて口ずさみにうたひ居りけるとぞいひ伝へたる。と」と説明してゐるのは具体的ではないが、日本

書紀に伝えり知く顯宗天皇の父「市辺の押齒の王

が雄略天皇から殺され、その後、兄おほほけ意富祁王と共に

に播磨の志しみ深村の首伊等美の家には馬飼、牛飼

となつて使われ、た流離の物語を背景にこの歌

が作られたことを説明したものである。

語義として「綺語抄」には、いなむしり

を「み、なむし、ろ」とする説をあげている。こ

れは童蒙抄に引き継がれる。袖中抄では田舎

には稲をしく故田舎を「いなし、きし」いなむ

し、ろ、といふ説と、万葉の例から「水、下の草、

をもち、なむしるゝと云也。されば、なむしるゝ河  
とはつづけたる也。と槐詞的に用いられる事  
をも指摘してゐる。また「されば此河そむ柳  
と云事にひかれ柳のしづ枝の水にひかれた  
るが、いなむしるゝに似たるぞ、若くは柳のかげ  
の水にうつるを云ふなど申すは余りの事な  
り」と言つたのは俊頼説とは大いに異なる点  
である。

基俊が「ひとへに梢に似たりともいひきり  
給ふまじくや」と言つたのは俊頼説を否定し

たものである。説話の詳しいのは奥義抄で、  
 「柳の末はとかくなれど根はうごかぬを我身  
 によせてとかくまどへどわがもとはたえじと  
 よめる也」と注したのは説話に即した解で、  
 ここから「いなむしろとは旅の心也」という  
 新しい説も出てくるのである。

また一寸変つた伝流としては栄華物語にも  
 引用され、ここでは道長の栄華を讃えて「大  
 殿は世は変らせ給へども、我身はいとど栄え  
 まさらせ給ふやうにて、川、副、柳、風、吹、け、は、勤、く、

とみれど、根は強し。といふ歌のやうに動きな  
くおはしますも、えも言はずめでたき御有様  
なるに、とあるのは寿歌の性質を有してい  
る。(久老・守部もその意に解す。)

以上、この歌の語釈についで、俊頼以後  
異見も少なくなひし、俊頼の説話歌説明も簡  
単であるが、ともかく後の歌学書の先鞭をつ  
けてゐる所にやはり彼の位置の重いことを忘  
れてはなるまい。

(2)

くものふるまひ

のめがせこが来べきよひなりささがにぬ(紀)の蜘蛛

のふるまひ行(紀)かぬてしるしも今宵(紀)(夜通姫)

この一首は日本書紀允恭天皇八年の策に出

ている天皇を恋う近江国郡司の美女夜通姫の

歌で、蜘蛛のふるまひに待つ人の来る前兆を

占う歌として古来から有名である。書紀では

天皇が藤原に御幸して密かに衣通姫の消息を御覽になつた時、衣通姫はそのことも知らず独り居てこの歌を詠んだことになつてゐる。続日本紀にも所收。俊頼は、ここで天皇がわが娘を寵愛の余り国政を顧みないのを恐れ親は娘を押し込める。幾度かの使いにもしんぜず、やがて賢き宣旨が決死の覚悟で迎えに来てやうやく参内。この歌はその時作られたものであるという経緯を詳述してゐる。最後に「任吉にべちの神にておはしますと承る。」と

いう衣通姫祭神説話を加えている。

最も詳細なのは和歌童蒙抄の説明で、ここのには、「西京雜記」まで引用している。この中には「蜘蛛集則百事意」とか「蜘蛛垂客人来」とかの詞があり、これによる「蜘蛛のふりまひ」も中国説話にその起因のあることが知られるが、俊頼は、これには触れていない。

奥義抄の解釈は、専ら書紀に依つていえるが、  
 「任吉の社は四社おはします。南社は此衣通姫也。」とある祭神説話は、俊頼によつたものの

では存いかと思われ。

(3) くがだち (探湯)

あまかしの(色葉和難集)

あかしのりをかのくがだち清ければにこれ

る民もかばねすいしき (古歌)

くがだちしについては日本書紀(垂仁紀

・応神記・允恭紀・継體紀)にみえている上

代の刑罰法で事の正邪を神に盟わして熱湯の

中にこ水を模する方法である。俊頼はその由  
 来を説明した後、この歌につき「始めの五文  
 字は所の名也。神はいのり申してぞしけるを、  
 世の末になりてしどけなき事どもありけれ  
 ばとゞまりにけるとぞ」と説明を加えた。色  
 葉和難集は、俊頼のこの説をそのまま引用し  
 ている。へ他の歌学書には、この歌はとりあ  
 げない。

(4) 下照姫

○から衣下照姫のせなつまいこいひいが天にいきこゆる鶴

ならぬねを (中納言當時)

俊頼は、下照姫はあめわかみこのめなり。

そのをところうせたる時かなしぶ声空に聞ゆる

なり。又鶴の沃になく声なむ天に聞ゆるとい

ふことのあるなり。と親した。色葉和難集

には、そのまま引用しているが、只原歌の三句を「妻ごひに」と訓ませているため「男を妻と云ふこと、この歌の心なり。可為證據」と新たな説を追加している。

それは夫をツマとも訓むことを中心に語釈したものである。

記によると、天若日子が矢にあたつて死去した時、その妻下照姫の哭く声は「風の去た郷音きて天に到りき」と叙している。

この歌も、まさしくこの神話を受けて作成

したもので、鷗の声と対比せしめられているのである。この歌は、延喜六年日本紀竟宴の時、当時の詠んだ一首で「新勅撰神祇歌」の巻頭を飾っている。今、鶴の声と対比せしめられていると言ったのであるが、俊頼はこの歌について古事記の舞台をちよつぱり誤っている。しかし俊頼の関心の中心は「沃」ではなく「鶴の声が天に聞ゆ」ということの方にある。だからここにでも古事記の世帯のみに終らざつて、又、鶴の沃に……と転換せしめていっているのである。こゝうした習俗

にむしろ俊頼の国心はあつたと解すべきであ

る。

(5) かぞいろ

○かぞいろはあはれと如何に思ふらむみとせ

になりぬ足たゝずして(大江朝綱)

この一首も全じく日本紀竟寧和歌Lに於て朝

綱LかLひるLじLを題に詠んだ歌。俊頼はこの

歌LについでLかLぞLいろLとは父母をいふなりL。

と語釈を試み以下の歌学書綺語抄・奥義抄・  
童蒙抄その他いずれもこれによつてゐる。こ  
の歌はいうまでもなく伊弉諾尊、伊弉冉尊二  
神が蛭兒を生んだ神話にもとづいてゐるが、  
俊頼はこの歌の作者朝綱のことにふれ「朝綱  
公家のかしこまりにてみとせありければ、我  
身なむかのひるごのやうにいふかひもなくて  
みとせになりぬれど、かれによそへてよめる  
なりし」と説明を加えてゐる。ところがこの事  
にっついては基俊が勅勘の身で題を賜わつて詠

むことはないと否定した。神中抄は基俊説に

対してこの時には「非勅勅」と反対。これに

従うべきであろう。俊頼がこの一首を採りあ

げた理由は「かぞい、ろ」という語釈のみでは

なく、朝綱の史話と紀の神話と関係づけられた所

に意味がある。最もこの歌について諸説とあ

げて評述しているのは神中抄であり、他の歌

学書は簡単に綺語抄などは語釈のみである。

なお、俊頼自身の歌にも

○ 郭公ながかぞい、ろの鳥にまれになくてふ事

ななうひそ  
（師時歌合）

などあり、俊頼は革新歌人ではあつたが古  
語をも大印にした態度の窺われる一、の例である。

(6) なごしのはうへ

○さばへなす荒ぶる神もおしなべて今日ほな  
ごしのはうへといふなり（藤原長能）

俊頼はこの一首を拾遺抄から抜いている。

「なごしのはらへ」(夏越抜)という六月晦の  
 大抜行事を主題にした歌で、「さばへといふ  
 はあらしき神のさばへの如くに多く集り人のた  
 めにたゞりをなす。これをはらへなごめてな  
 むよはよかるべきといひて、水無月のつごも  
 りの日はりらへなごむるなり」と日本紀にこ  
 の事のおこりありとして葦原中つ国のさばへ  
 なす悪しき神を天穂日のみことか遺わされ平  
 定したという神話を中心にした解釈で、語釈  
 はない。「奥義抄」の解は「俊頼口伝」よりも具

体的であるが、その書きぶりは「俊頼口伝」か  
 うの引用と思われる。「色葉和難集」には「  
 祐云」としてやはり日本紀の神話による解が  
 なされている。この中に「たとへば夏のはへ  
 の散りかたれたるやうに悪しき神なり。又般若  
 根木立草のかき葉も猶よくもの云ふ」とある  
 のは「俊頼口伝」に「その國にさばへなす悪  
 しき神たちあり、又草木みなものいふ」とい  
 うのに甚だ書きぶりが似ている。ここに「祐  
 とあるのは「祐盛」のこととて久曾(注)神昇氏か、

「祐盛は俊頼の子ではあるまいか。」と言つて

いることは注意すべきことである。たゞ、祐

盛という人の名は尊卑分脈にも俊頼の子とし

てはあげられていない。その点判然としな

しかし「色葉和難集」には「祐云」という

項が數十項にも及び、その説は俊頼によく似

ている。久曾神氏が、俊頼の子と推定されて

いるのもこうした点からであらうが、又献の

上からはまだ決め手にはならな

つ。綺語抄は「象蚊成雷」といふ心也」とあり、

俊頼とは異伝。

(7) 岩橋夜契

○ 岩ばしの夜のちぎりも絶えぬべしあくるゆ  
ゑしきかづらきの神（春宮女蔵人左近）

俊頼はこの歌の由来を「日本紀」、「日本靈異  
記」にも見えてゐる説話、即ち葛城山から吉  
野山に橋をかけるに当たり顔の醜い葛城の一

言主神が夜のみ渡し昼渡しさぬため役行者がこ  
 の神を呪縛した説話である。俊頼はこれによ  
 りそのまま解釈している。最も詳しいのは「袖  
 中抄」であり、「真義抄」。「色葉和難集」では「金  
 峯山の縁起」に依據しているので、俊頼口伝  
 よりは詳しくなっている。異伝としては、童  
 蒙抄に伝える説話でここでは秦始皇帝が海中  
 に石橋をつくり、形の醜い海神が柱をたてる  
 事になつていゝるなど説話の精神は変らぬにし  
 て、その表現方法の上にかなりの相違がある。

俊頼口伝より漸次後の歌学書は、詳しくな  
つていゝが、歌学書として左近のこの一首を  
採りあげ説明したのは俊頼口伝が先鞭をなし  
ていゝ。

この歌は拾遺集に入集。その詞書には「大  
納言朝光下鵲に侍りける時、女のもとに忍び  
てまかりてあかつきにかへらじといひける。」  
とあり恋の歌であるが、古説話によつたため、  
雑賀卷十八に入れられた一首。

## (の) 鳥の歌

〇からすとふおほをそどりの心もてうつし人  
 とは何なのるらむ (古歌)

この一首は伊勢国の郡司の家に子をうみて  
 温めていた男鳥が人に殺されたためその女鳥  
 が他の男鳥と遊んでいるうちに雛をかえらず  
 に腐った。俊頼はこのことになれ、郡司道

心をおこして法師になりけり。それが心をよめる也。おほをそ鳥といへるは鳥ひとつの名なり。」とこの歌の生成背景を説明している。奥義抄ではこの時出家したのは、行基菩薩の弟弟子となつた信教入道であるといふ。「日本霊異記」の説話を添加している。

「童蒙抄」、「色葉和難集」は「俊頼口伝」の説明を殆どそのまま引用しているが、「和歌色葉集」は「或物」には「とかき、以下述べたい」が、「この」或物とは「俊頼口伝」に外

ならぬ。「但しさせた證文見えず」として俊  
頼説を否定し「鳥をば書にも貪鳥といひて、  
鳥の中に心貪欲に非常なる物にいひならはし  
たればかくよめり」と別な新しい解を下して  
いる。このように俊頼の説は、或は繼承、発  
展させられ、或は否定されるといふ様な形  
をとつていゝ一つの例である。

(19) 芥つみの歌

の芥つみし昔の人も我ごとや心に物ほかなは  
ざりけむ (古歌)

この歌にっいては古来から諸説が多いが、  
大きくわけて日本と中国との説話に分れる。

俊頼は、この一首の背景となる日本古説話  
を説明している。即ち、芥を召している嵯峨

の后を朝淨めする者が后をかそめて物思ひに  
 なり、今一度見奉るために芥を搦んで供えた  
 がそのしるしもなく遂に思慕しつゝ、「我をい  
 とほしと思はば芥を搦みて功德にせよ」と言つ  
 て息絶える。やがてこの者の娘が女官となつ  
 て后から寵愛されたという説話である。  
 つまり、思ひのかなわな事を主題にした  
 歌である。「結語抄」では山の男の掃除夫と  
 美しい姫との恋物語になつてあり、「奥義抄」  
 にはその人物を大和国の猛者の姫君と内もり

の姫の子まぶくだ丸との事にし、更にこの姫  
君は行基菩薩の化身、まぶくだ丸は智光である  
とする往生仏教説話にまで転化せしめている。  
一方中国説話を基底としたのは顕昭である。  
即ち「袖中抄」には「俊頼口伝」。「奥義抄」など  
の説を否定して、「たしかなる證文も見えず」  
とし、「文選」の「嵇叔夜與山巨源絶交書」  
にある野人が至尊に芹を献じた中国説話を正  
しいとしている。「さればこの（歌の）心は  
我心によしと思て云事をもちおられぬことを

うらみでよめるなるべし。此義叶愚意<sub>ニ</sub>。とし

ているがや、牽強付会之感がある。俊頼の説

は童蒙抄に継承された。なお、俊頼自身「芥

摘み<sub>レ</sub>の歌に左の如きものがある。

○芥つみしことをいはいはじさかりなる花の夕

ばへみける身なれば(散木集春部・二月)

○芥つみし心ならひの悲しきはみだのちかひ

もたのまれぬかな(全・第六・秋教部)

いずれも「芥つみ<sub>レ</sub>の説話をふまえこの俊

頼の心懐である。

以上の如く、<sup>「芥」</sup>芥つみしの説話については種々  
異伝も多いが、そのうち俊頼と対立異見に立  
つ代表が袖中抄であった。しかし、この説話  
は、中国説話ではなく、また内容的にも仏教  
説話でもない。俊頼の魂の如く日本説話に立  
つて解釈するのが妥当である。

(10)

浦島伝説

○ <sup>(なつのは)</sup>みづの江の浦島のこがはこなれやはかなく  
あけてくやしかるらむ (中務)

浦島伝説については、「日本書記」「続日本後記」「丹後風土記」「浦島子伝」「続浦島子伝記」「万葉集」「古事談」その他にもみえ我が国の代表的海洋神婚伝説であることは周知の通りである。この中務の歌は、夏の夜の短かきをよむのが本意で浦島伝説は序の役目をしているにすぎないが、俊頼は、ここでも歌の解そのものはせず、その背景となつた浦島伝説を詳述している。

奥義抄は俊頼と殆ど同文を引用している。

その原典となつたのは、日本書紀に並びに  
それと同系統といわれる丹後風土記など  
である。日本書紀の雄略天皇二十二年の條に  
「丹波国余社郡管川人、水江浦嶋子、乘舟而  
釣、遂得大亀、便化爲女、於是浦嶋子感以爲婦、  
相遂入海、到達某国、歴觀仙衆」とある如く  
仙境淹留説話の代表的な浦島説話であり、実  
在の人物としてとりあつかつてゐる。歌学書  
「和歌童蒙抄」にも「四條大納言抄」に浦嶋子  
は雄略天皇の時の人也」と言つてゐる。

これなども歌学書が古説話を継承した例で  
 ある。『綺語抄』には、日本書紀の外に『浦  
 島子伝』、『万葉集』の所伝をもとりあげその  
 相異にもふれている。『童蒙抄』は『浦島子  
 伝』によつてその伝説を述べている如く、俊  
 頼よりも詳しくはなつているがその先鞭をつ  
 けたのは俊頼であつた。俊頼自身も『浦島子  
 の歌を作つてゐることはすでに述べた通りで  
 ある。(『和ニ編』・和ニ章・和一節参照)

(11) 長能のこと

心うき年にもあるかなはつかあまりこゝぬ  
かといふに春の暮れぬる（長能）

この一首は公任郷の家で三月尽の夜、長能  
が暮ぬる春を惜しむべしをよんだ歌であるが、  
公任が「春は三月十日やはある」と難ぜられ  
たのが原因で取じてその翌年病氣にたり遂に

亡くなつたといふ話である。これなどは歌徳  
 説話とは逆に歌禍説話の例である。亡くなつ  
 た後「大納言殊の外になげきけり」とぞ承りし。  
 と「う大納言の回想的心中にふれ、これに対  
 し、俊頼自身は「さればかばかり思ふばかり  
 の人の歌などはおぼつかなき事ありとも難お  
 まじき料にしるす存り」と、たとひ歌は拙くと  
 も執心の人の作品を批判する場合は細心の配  
 慮が必要である事を評して文を結んでゐる。  
 こうした歌禍は、和歌史の上では少なくな

い。『古今著聞集』にもこの説話は載せてい  
るが、その文は明らかに『俊頼口伝』によつ  
たものであり殆ど同文。『和歌童蒙抄』もま  
た同じ文を伝えている。その他この説話はか  
なり有名で俊頼以前では「かげろふ日記」・「紫式  
部日記」などに既に取りあげられていて俊頼も  
熟知していたことは勿論であるが、俊頼以後  
成立の執学書はその文脈からみて大方「俊頼  
口伝」に依據しているといふことが指摘出来る  
のである。

(12)

みかの夜の餅

○みかのよのもちひはくはじわづらはしきけ  
ば夜殿にはこつむなり（藤原実方）

この歌を「実方朝臣集」にみるとオ三句が「

うかりけりし、結句が「つみけりし」となつてお

り、後拾遺集誹諧集にも入集。表現技法とし

て「淀野にははこ草を摘むしを「夜殿に母が

娘<sup>い</sup>をつむしに掛けているあたり誹諧的世界に通じている。「実方朝臣集」の詞書には、「  
 一 小一條にある人のむすめを忍びて語らふに  
 女親きゝつけていみじう腹たちてつみなど  
 するときく比三日の夕がた北のかた餅<sup>もち</sup>まい  
 れとあればし、  
 とある。後撰集には「三條<sup>忠義公</sup>太政大臣のもとに  
 侍ける人のむすめを忍びて語らひ侍けり」と具  
 体的になつている。(注、実方は生年未詳―長  
 徳四年(998)没・左大臣師尹の孫・侍従貞時の男

・今昔物語、今鏡、古事談等には甚だしく伝

説化された歌人。俊賴（口伝もこれらに依って

この歌の成立事情を語っている。

俊賴は「みかよのもちしにいついて「人のむ

すめの初めて人にみゆるはみえてのち三日

といふにもちひをくはするなり」と説明し、

実方の歌については「さきくも人に見えに

けりと思ふことのあるにはその餅をくはぬな

り。さることのありければよめるなり」と注

した。実方がこの様な歌を詠んだのも当然な

ことであつた。この娘は実方にとって始め  
ての女ではなく、勿論新枕後の三日目ではな  
かつたからである。この歌の主想は「みかよ  
の餅はくほじ」といふことと下句の「夜殿に  
は、こつむなり」との誹諧的照応が中心をな  
していると言えらる。俊頼は「みかのよの餅」と  
いふ民俗行事と実方の歌とが奇妙に一致し  
た物語的内容を有していた所に興味を覚えた  
ものであろう。「色葉和難集」は俊頼の解をその  
まゝ引用。他の歌学書にはこの歌は取りあげていない。

これは村上天皇と齋宮との間に交わされた

やこのほかにすむ身は（齋宮の女御）

○いかでかは稲葉もそよといはざらむ秋のみ

返し

のうらむべしやは（村上天皇）

○時しもあれ稲葉の風に波よれるときさへ人

(13) 后といなごのこと

贈答歌である。俊頼はこの歌の解について、  
「后」といふなごといへる蟲とは物ねたみせぬも  
のぞと文に申したれば、此御返しに物ねたみ  
のけしきやありけむ。かく申させ給ひたりけ  
るなり。……(中略)いなごまろといへるは、  
蟲の名とおぼしくて、いなごの風に波よること  
はよませ給へるを、御心を見て我は后にあら  
ねばなどか物ねたみもせざらむとおぼしくて、  
秋の宮のほかなる身なればとほよませ給へる  
なり。と故事を中心に二首贈答歌を注してい

的に指摘出来るのである。  
 その大部分は俊頼説の継承が多いことだが結論  
 書の間には俊頼説に対する異説もあつたが、  
 た歌は十四首。その解釈については後の歌学  
 う。以上俊頼の古説話を背景として取りあげ  
 俊頼が取扱つてゐることは注意すべきである  
 うした習俗をふまえての厂史的古説話として  
 いられてゐたかは不明であるが、ともかくこ  
 何によつたか、またいつ頃からそのように信  
 る。后といふなごは物ねたみせぬといふ習俗は

(三)

習俗説話

俊頼の採りあげた説話の歌の中には、民俗的な面として風俗・習慣などの因習生活に關するものがかなり多い。この(三)に於てはこのような歌について考えてみたい。(但し、万葉集については第二章・第三章に詳述したので省略した。)内容としては(三)を(A)恋の習俗歌、(B)祭神の習俗歌の二類に分けて考えてゆく。

(A) 恋の習俗歌

(1) 錦木

(A) 錦木はちづかになりぬ今こそは人にしられ

ぬねやのうち見め (古歌)

(B) あらてくむやどにたてたる錦木はとらずば

とらずわれや苦しき (全)

この古歌二首は陸奥国における男女の愛情  
を標示するために消息をやらずに錦木を女の  
門に立つる習俗を詠みこんだものである。こ  
の習俗について俊頼は次の如く説明している。  
「をとこ女をよばむと思ふ時、消息をやら  
で、たき木をこりて日ごとに一束其の女の  
家のかどの程にたつるを、あはむと思ふ男  
のたつる木をば程なく取入れれば、その  
後は木をばたてむひとへにいひよりて親し  
くなりぬ。あはじと思ふ男の立つる木をば

如何にも取入れねば、千束をかぎりにして  
 三年たつるなり。それをほ取り入れねば思  
 ひたえてのきぬ。L  
 というのである。また、  
 こまほこのさをのやうにまだらに彩りて立  
 つればいふなりととく知りたりとおほしき  
 人は申せど、まことにはさませぬにや。L  
 と實際に即した錦木についで、の感想をもらし  
 ていゝる。L  
 山がつの卑しきかどに家のめぐりをとほし

てみつくりにしたるわらのくみをもちてそ  
のかきをしめたるといへるなりし。  
と説明してゐる。  
袖中抄は、俊頼の説を批評して「  
薪をこりて日ごとに一束たつと云、後にはま  
だらに色どりたれば錦木と云といへり。色ど  
る義にては薪一束と云べからず。薪一束とい  
はば色どる義有べからず。おぼつかなし。一  
方にいひとほすべし。然に實にはさもせぬと  
かや。錦木と云に付て云へるにやと有は、あ

しからず<sup>レ</sup>。結果に於ては賛成してゐるが俊  
 頼説の不統一を指摘してゐるのは顕昭らしい。  
 その他、<sup>レ</sup>錦木と云は灰木也<sup>レ</sup>。の説をもあげ  
 ている。奥義抄は<sup>レ</sup>灰にて錦の糸をも染れば<sup>レ</sup>  
 錦木と云。又薪を色どれる也<sup>レ</sup>。の説をたててい  
 る如く種々説はあるが、俊頼はそれらの説に  
 ついては触れていない。總じて俊頼説が後の  
 歌学書には引用されてゐるところからみて、  
 他に諸説はあつても俊頼説が一般的解とみて  
 よいであらう。<sup>レ</sup>錦木と関連して同じく恋

の習俗歌に「けふの細布」を詠んだ歌がある。

(2) けふの細布

(A) 錦木は立てなからこそ朽ちにけれけふのほ

そ、ぬの、胸あはじとや (能因法師)

(B) みちのくのけふの細布ほどせばみ胸あひが

たき恋もするかな (古歌)

俊賴は「けふの細布」について「これもみ

リ	俗	れ	「	お	ば	袖	ば	ぬ	ち
ア	を	る	け	な	か	な	く	も	の
ゲ	表	が	ふ	り	り	ど	ひ	の	国
る	示	、	の	し	を	の	ろ	し	に
の	す	み	細	と	か	や	も	て	鳥
は	る	ち	布	説	く	う	短	織	の
ゆ	もの	の	し	明	し	に	け	り	毛
ず	ので	国	は	し	て	下	れ	ける	し
し	は	の	悪	て	胸	に	ば	布	て
も	なく	産	の	い	ま	着	、	な	織
適	、	出	歌	る	で	る	上	れ	り
当	そ	織	を	。	は	な	に	ば	ける
で	の	物	詠		か	く	着	、	布
は	点	で	む		、	、	る	は	な
な	こ	錦	む		さ	た	事	た	り
い	こ	木	場		れ	ば	は	ば	。
が	こ	の	合		ば	せ	な	り	多
、	こ	如	に		せ	な	く	。	か
(A)	こ	き	用		か	て	小	多	か
の	で	習	い			小		か	ら
	と		ら					ら	

歌の如く錦木と共ニに詠みこまれて  
いる歌もある。りここで取りあげた  
次第である。俊賴説をそのまま引  
用したのは「色葉和難集」である。  
袖中抄には「みちのおくにいで  
るせばき布也」とあり、俊賴の如  
く鳥の毛で織ることについては俊  
賴説の引用の時に「鳥の毛して織  
らん事さもや侍らん」と賛成して  
いる。同時に鬼の毛で織るため「  
うるさくおづらはしき物をねば、  
せばく細きなり」とも添加の注  
解を附している。

綺語抄も俊頼説と同じ。ただ、  
 奥義抄は「  
 みちの国のけふの郡よりいでくる布也」とそ  
 の産出の郡よりの呼称としているのが他と異  
 なる。この説は袖中抄により否定され、陸奥  
 の郡にはほつけふ<sup>レ</sup>はない。そして「かゝる義  
 いはんには郡とはいはで只えびすがすみ家に  
 けふと云所とふと云所へ注」とふのすが薦を  
 さす。有とぞ云べき<sup>レ</sup>と解釈上の注意を与え  
 ている。従つて「けふの細布は俊頼の説が  
 ずつと継承されてゐることになるのである。

俊頼自身も「けふの細布」を主題として

○卯の花の垣根なりけり山賤のはつきにさら

すけふとみつれば  
(散木集・夏)

の歌を詠じている。尚、細布のことについて

は「類聚三代格」(大同五年)にもみえて古

くから知られたものである。

錦木<sup>レ</sup>と「けふの細布」の説話を合体させ

て世阿弥は謡曲「錦木」(四番目物)を作つて

いる。シテが「錦木」ツシ(女)が「細布」を

それ「持物」として出場するものもこの曲の恋

ろ  
で  
あ  
る。

無縁でなかつたことは容易に想像されるところ

頼口伝レ 袖中抄レ などの説話内容も全くの

か。むろん、以上の歌が中心ではあるが、レ俊

世阿弥は何によつて描想をたてたのだらう

の重要なモノキレフを形成してゐるのである。

けふの細布レの三首とも入つており、この曲

なりぬレ「錦木は立てながらこそレ」みちのくの

慕の象徴である。この曲には「錦木は千束に

(3)

額の髪・夜の衣の返し着

○わぎもこが額の髪やしぐらむあやしく袖

にすみのつくかな (古歌)

俊頼はこの古歌について「人をこふる女の

類のしぐらといふ事のあるなり。人のかみは

ぬれぬるをなでつくろふにこそかゝりたれ。

涙にぬるゝ類の髪を恋するほどによろづを

忘れてうつぶしたれば、  
 額の髪のしいけむこ

とわりなりしと注している。人を恋うる女の

額の髪はちぢむへしいくという俗習があつ

たらしい。俊頼の解は色葉和難集がそのまゝ

継承。こうしたことはまた次の

○いとせめて恋しき時はむばたまの夜の衣を

かへしてぞ着る  
 (古今集・小野小町)

という俗習にも通ずる。恋する人は夜着

たる衣を返して着れば、その人の夢にゆずみ

俗歌がある。	はずつと後の方になるが「下紐のとけるし習	なおこれと関連するものに歌の配列として	も恋の習俗歌をまとめたものの如くである。	俊頼口伝におけるこれら一連の歌はいずれ	などを詠んだ恋の習俗歌を配置させている。	後には万葉の「駒ぞつまづくし」まゆねかき	「ぬぐくつし」について例示されておりの	は、すでに中国説話の項で述べた「おもりし	ゆる也 <sup>し</sup> 。」と俊頼は注している。この二首の歌
--------	----------------------	---------------------	----------------------	---------------------	----------------------	----------------------	---------------------	----------------------	-------------------------------------

(4)

下紐のとけること

俊頼は「下紐をとくといふ事はまたさだめ

なし<sup>レ</sup>と注し次のような三つの場合の歌を例

示してゐる。

(A) 相見ぬもうきもわが身のから衣思ひしらず

もとくる紐かな

(古今集・いなば・恋五)

ど	(C)	る	(A)			(C)		(B)	
そ	は	し。	に			悪		あ	
れ	「	(B)	つ			し		づ	
く	人	は	い			と		ら	
の	に	「	て			は		し	
場	恋	め	は			さ		き	
に	ひ	づ	「			ら		人	
放	ら	ら	人			に		を	
て	る	し	を			も		み	
下	「	き	怨			い		む	
紐	人	人	む			は		と	
の	の	を	る			じ		やし	
と	下	み	人			下		しか	
け	紐	む	の			紐		かも	
る	は	と	下			の		せ	
こ	と	と	紐			と		ぬ	
と	く	く	は			け		わ	
を	る	る	は			む		が	
後	し。	し。	と			を		下	
	な	し。	く			人			

(後撰集)

在原元方

悪三

(古今集)

よみ人しらが

悪四

頼は説明している。

(C) は伊勢物語百十一段所収の歌。下紐のと

けるという俗習はすでに万葉にも詠んでいる  
ところ。ところで奥義抄にはその例歌もあげている。

「下紐」のとける俊頼の解は「色葉和難集」にそ

のまゝ継承された。以上、恋に関する主な習

俗歌について述べて来たのであるが、これら

の例によつて俊頼が恋の習俗歌にはかなり関

心を有していたことが知られる。但し、万葉集

ではなく、いずれも平安朝の歌をその例にあげ

たのが奥義抄に比して範囲が狭まかつた。

(B) 祭神の習俗歌

祭神に因する歌として侵頼は次の三首をあげている。

(1) つくまの明神

○ 近江なるちくまの祭とくせなむつれなき人

の鍋の敷見む

(B)

(2) うさかの明神

した がひ ひて、 土し て作 りた る鍋 をそ の神 の祭	と申 す神 の御 ちか ひ、 女の をと こし たる 数に	(1)に ついて 俊頼 は「 近江 の国 つく まの 明神				もあ はむ とぞ 思ふ  (紀 友則)	○東 路の 道の はて なる 常陸 帯の かご とば かり	(3)鹿 島明 神	○い かに せん うさ かの もり に <small>(みわす)</small> みえ ずと も君 が	しも との 数な らぬ 身を 一俊 頼・ <small>散木集神祇</small> 数		
---	--	---	--	--	--	---------------------------------------	--	-----------------	---	--	--	--

の目たてまつるなり。男あまたしたる人は見  
ぐるしがかりて少しをたてまつりなどすれば、  
物あしくて悪しければ、つひに敷の如くたて  
まつりていのりなどしてぞことなほりけるし。  
と説明してゐる。

(2) は越中の国うさか明神の祭の日の行事。

「  
樹のしむとして女の男したる敷にしたがひ  
て打つなり。女のその折になりて、禰宜に尻  
をまかせてふせり。禰宜しもとを持ちてを  
この敷をとふし。  
(1) の行事と大体同じ。さら

に俊賴はこの習俗は古よりあつたが、古い歌  
 がなないので俊賴自身の例歌をあげた。この歌  
 は散木集には「春宮大夫公実の許にて恋の心  
 を」の題詞があり、「色葉和難集」には俊賴  
 の説明をそのまま引用し、全く俊賴のこの  
 歌を例示している。只、「日本紀」に見えた  
 り」とその出典を明らかにしてゐるのは「和  
 歌色葉」によつたもののようである。しかし、  
 「和歌色葉」では「みをすれど」とあり、「  
 みをすれば」とは神に物まゐらするをいふ也。

進食とかけり。進食とはみ、をし、すとよむなり。  
 と「俊頼口伝」にない説明を加えている。「色葉  
 和難集」では「みわす」とも「とあり、群書類  
 従本」散本奇歌集」では「みはすと」とも「とあ  
 る。散本集の間宮本、圖書寮本では何れも「  
 身わぬ」神宮文庫乙本、尚舎源忠房旧蔵本  
 、大野広城本、上賀茂三手文庫蔵本、岸本由  
 豆流旧蔵本はいずれも「見えず」とあり、こ  
 れは俊頼口伝の訓と一致している。これによ  
 れば意味も明らかになり、俊頼の原歌もおそ

らくこの訓みではなかつたかと思われ。

(3) は常陸の国鹿島明神の祭の日に行なわれ  
 た行事。俊頼は「女のけさう人の數多ある時  
 に、そのをとこの名ども布の帯にかきあつめ  
 て、神の御前におくなり。それが多かる中に  
 すべきをとこの名かきたる帯のおのづからう  
 らがへるなり。それを取りて福宜が取らせた  
 るを女みて、さもと思ふをとこの名ある帯な  
 れば、やがて御前にて上のかけ帯のやうにぞ  
 近づくなり。それを聞きてをとこかこちから

りて親しくなりぬし。と評しくこの習俗を語つ  
てゐる。

奥義抄には俊賴の説は引用はしてゐるが、

「此ことたしかにみえたる物なし。又かごと

く云ふ事もおぼつかなし。或人の申されしは

、是は僻事也。しと不定し、  
「常陸国には男女

のなうひをううなはんとして、をと云ふ物を帯

にして、一には我名をかき、一には田力の名を

書き、彼神の御前にてのと申して帯を折返

して末をねぎに結ばするなり。それにあろか

するにとどまり、自説はたてていない。大き  
 くは俊頼説と清輔説に分たれるが、異伝があ  
 ったために分れたことであり、いずれが正し  
 るべきかはなれぬに結ばれ、よかるべき  
 はかけ帯のやうに結びつながはるゝを、さも  
 と思ふなれば、やがてうちかへやますけうら  
 の様なることをぞ云へりし。と別伝をあげて  
 説明してゐる。『色葉和難集』はこの奥義抄  
 の説をそのまゝ引用。『和歌童蒙抄』は俊頼  
 説に依據した。袖中抄は、奥義抄の説を引用

い  
か  
の  
結  
論  
は  
早  
急  
に  
は  
下  
さ  
れ  
な  
い  
。  
た  
だ  
一  
般  
的  
に  
は  
俊  
頼  
説  
の  
方  
が  
流  
布  
し  
て  
い  
る  
。  
以  
上  
三  
首  
は  
い  
ず  
れ  
も  
祭  
神  
の  
習  
俗  
歌  
で  
あ  
る  
が  
説  
話  
の  
内  
容  
と  
し  
て  
は  
恵  
の  
習  
俗  
歌  
と  
み  
て  
よ  
い  
も  
の  
で  
あ  
る  
。  
そ  
し  
て  
両  
者  
と  
も  
明  
神  
の  
祭  
祀  
行  
事  
と  
し  
て  
こ  
の  
習  
俗  
の  
行  
な  
わ  
れ  
て  
い  
る  
点  
が  
一  
致  
す  
る  
。  
こ  
れ  
と  
少  
し  
趣  
旨  
の  
変  
っ  
て  
い  
る  
歌  
に  
次  
の  
一  
首  
が  
あ  
る  
。

に筆者が配置したのは「木綿をつけて山に放

めて簡単な注を加えている。この一首をここ

綿をつけて山に放つまつりのあるなり」と極

頼は「ゆふつけどりとほ鶏の名なり。鶏に木

この歌についてはいろく問題が多い。俊

山にをりはへてなく（古今集・よみ人しらす）

(4) たがみそぎゆふつけどりかから衣たつたの

(4) ゆふつけどり

つまつり、  
 といふ俊頼の考えにもとづく。  
 袖中抄には「大和物語」154段の説話を引用  
 して、いるのである。その解も「世の中さはが  
 しき時、四境祭として、おほやけのせさせ給に  
 、鶏に木綿を付て四方の肉にいたりて祭也。  
 あふさかは東の肉なればかく詠りし」とあり、  
 俊頼と異なるのは四境祭の事を説明し、さら  
 に大和物語のことにふれて、いる点である。即  
 ち、大和の國の美女をぬすんだ京の男が馬に  
 のせて日ぐれ時龍田山に宿つた時の男の歌で

あり、女は恐しと思ひものも去らず、

△立田川いはねをさしてゆく氷の行方もしら

ぬわがごとやなく

と詠んで死んだといひ話。つまり四境祭とい

う公の行事に於て鶏に木綿をつけて四方の肉にい

たつて祭つたといひのである。

童蒙抄には「齋宮の業平がために緋してい

だしたりし鶏をゆふつけ、逢坂の肉に放ち

たりしによせてよめるとぞ。とその起原を説

明し、綺語抄には「いにしへ鬪鶏せしに、ゆ、

小、を、つ、く、と、云、事、も、あ、り、と、別、伝、を、注、し、て、い、る、  
 如、く、さ、ま、が、ま、で、あ、る、。、題、昭、は、こ、れ、ら、の、説、を、否、  
 定、し、<sup>レ</sup>「、四、境、祭、に、鶏、に、ゆ、ふ、つ、く、る、事、を、不、知、也、。、  
 就、<sup>レ</sup>中、鶏、尾、の、長、く、て、白、き、が、木、綿、し、で、付、た、る、に、似、  
 た、り、と、云、義、<sup>、</sup>以、外、の、今、案、歟、。、遺、恨、々、々、。、と、論、  
 難、し、て、い、る、。、し、か、し、俊、頼、が、<sup>レ</sup>ゆ、ふ、つ、け、ど、り、と、は、鶏、の、  
 名、な、り、。、と、説、明、し、た、の、を、題、昭、も、こ、れ、を、う、け、て、  
<sup>レ</sup>「、夕、つ、け、鳥、と、は、鶏、を、云、也、。、<sup>、</sup>と、言、つ、て、い、る、点、で、は、  
 同、じ、。、ま、た、俊、頼、の、<sup>レ</sup>「、鶏、に、木、綿、を、つ、け、て、山、に、放、  
 っ、祭、の、あ、る、な、り、。、<sup>、</sup>と、い、つ、た、の、は、祭、の、行、事、た、る、

ことを指摘したことであり、顕昭が全面的に  
 否定したのはゆきすぎである。ただ四境祭と  
 いう事を俊頼が具体的に説明しなかつたこと  
 への不満であつたのであろう。また実事俊頼  
 はそのことまでには言つていない。顕昭の方が  
 説明としては確かに詳しくなつてきているが、  
 歌学書として祭の行事のことにふれてゐるの  
 は俊頼が最初であり、俊頼の説を継承したの  
 は「色葉和難集」で「夕付鳥とは庚鳥なり」。  
 かれにしでを付て山に放つ祭のあるなり。立

田山、逢坂などにて常にするにや。と  
書きぶりは俊頼の文の引用とみてよい。  
要するにこの歌は「ゆふつけ鳥」を四境祭に  
放つという祭の行事を中心に大和物語説話の  
伝える恋の話であり、祭事と恋の合体された  
もので「俊頼口伝」に於ては種々の鳥の歌の場所  
に配置されている。そういう意味から俊頼は  
説話そのものからは大和物語のことまで語る  
のは目的でなかつた様に思われる。以後の歌  
学書になるにつれ詳しくなっている一つの例である。

以上を以て第二章「俊頼の説話攷論」に  
 いての論考を終りたいと思ふが、  
 ここではふりかえつて結論をまとめたい。

「俊頼髓腦」にとりあげられた説話関係の歌は

(1) 中国 (2) 日本を合わせて總數五十首ほどに及

ぶ。(「今昔物語」関係は除く。) これらの説話歌に

ついて俊頼を中心にその歌の繼承、享受の様

態。或いは俊頼独自の解釈批評態度など具体

的に述べてきたのであるが、俊頼と説話歌と

の關係はここでくり返すまでもなく「今昔物語集」を始めとして極めて深い。それは「俊賴隨腦」の他の致学書に比して最も顕著な特色をなしてゐるものである。後の致学書に与えた影響もまた大きく、中には俊賴独自の解釈もあるし、誤解と思われる節もないわけではな  
いが、ともかく俊賴の解釈が起点となつて以後それが更に發展、継承されてゐる場合が極めて多いのである。又一方俊賴説が否定、批評もされてゐる。その代表的位置にゐるのが

顕昭であつた。その意味で顕昭が最も対立的  
 である。これは俊頼の歌人的（直感的）と顕  
 昭の歌学者的（分析的）という両者の個人的  
 人間の相違であると同時に六條源家と六條藤  
 家という歌学の家の道統系譜の対立でもあつ  
 た。ともあれ、俊頼は説話の歌について金葉  
 集時代のどの歌人よりも関心をもち、造詣の  
 深かつたことをここで革新歌人であるといふ  
 ことよりも先にわれわれは考へる必要がある  
 のである。

この事はやがて「俊頼髓」が単なる語釈  
の歌学書に終らずに、個性的歌論書であるこ  
とはもとよりであるがその中にあって説話を  
交える歌への道案内書の役割をも持ち、金葉  
集時代の歌人達を指導し後の歌学書の先鞭と  
もをつたいたのである。そうしたところに歌論家  
俊頼の説話歌をめぐつての位相があつた。

(注)

(1) 「精撰本色葉和難集」  
「解題」(日本歌学大系 別巻 卷二)

後冷泉		天皇	
後朱		先皇	
頼		内	
今五	今四	天喜三	号
1057	1056	1055	曆
3	2	1	齡
○六條南院歌合(589月) (この年以後同もななく類 (歌歌合十卷本)成るか)	○経信詠歌	○俊頼出生(父経信三男) (経信四十才の時)	重要事項
○藤原仲実出生	○藤原基俊出生 (古今著聞集所依) ○皇后宮春歌歌合 ○清凉殿にて詩合	○藤原顯季出生	関係事項

源 俊頼年譜

※ 俊頼の歌壇登場以前に於て  
 も歌壇の重要事項及びその他  
 関係事項についてはこれを記入  
 した。

治曆元	〃	〃	〃	〃	〃	〃	全	康平一
1065	七	六	五		四	三	二	
	1064	1063	1062		1061	1060	1059	1058
11	10	9	8		7	6	5	4
〇皇太后禎子内親王秋合(十月)	〇庚申禎子内親王秋合(12.29)	〇丹後守公基家秋合(八月十月)	〇この頃祐子内親王草合(続詞)		〇祐子内親王宮にて秋合(3.19)	〇师実弟にて和秋合(3.8日)		〇前大宰大貳長房詠秋(金堂集)
〇基綱大舍人權助(3.29)	〇顯仲出生				〇関白頼通(法性寺にて七十の加賀)(11.22)	〇天皇、白河院行幸(3.25)		〇藤原経輔大宰帥となる

後三條						
通						
三	二	延久元 (西一三改元)	四	三	二	
-71	-70	-69	-68	-67	1066	
17	16	15	14	13	12	
經信正三位(十一・十八)	禊子内親王秋合(一・廿八)	兄基綱治部少輔(四月・六日)	經信叙從三位(五月・五日)	禊子内親王秋合(12・22)	備中守定綱秋合(3・15)	禊子内親王秋合(9・9) 經信大井河道遠詠秋
			國信出生	後冷泉天皇崩御(4・19) 44才 教通白となる。(四・七) 後三條天皇即位(7・21)	賴通白と罷む(12・5)	

白 河

師		実					
〃 二 -78	承暦元 (二・一七〇元) 77	〃 三 -76		〃 二 -75	承保元 (八・廿三〇元) 74	〃 五 -73	延久四 1072
24	23	22		21	20	19	18
<p>「内裏秋合」(四・廿八) (判者源顯房) 俊頼の秋入授せず 後宣の 管絃奉仕にとどまる (伝長百子卷二)</p>				<p>藤原通俊白河天皇より 勅授皇の勅宣受く 摂津守有綱秋合(八・三十一)</p>		<p>天王寺 後三條天皇 住吉 御幸和秋(二・廿一)</p>	
		<p>出雲守藤原清綱(俊頼 妻の父)没(水左記)</p>		<p>大井川行幸(十・廿四)</p>		<p>教通没(九・廿五)八十才 師実白となる。(十・十五)</p>	
				<p>頼通没(二・三)八十三才</p>		<p>後三條法皇山朋御(五・七) 四十才</p>	
						<p>頼通出家</p>	

<p>三 年 -83</p>	<p>二 年 -82</p>	<p>永保元 -81</p>	<p>四 1080</p>	<p>三 1079</p>
<p>29</p>	<p>28</p>	<p>27</p>	<p>26</p>	<p>25</p>
<p>の父経信権大納言に任 せらる。</p>	<p>刑部卿政長八条茅会<small>（十且）</small>に 俊頼作の秋あり。<small>（長秋）</small></p>	<p>の父経信権中納言、皇后宮 権大夫となる。正月廿六日 尊民部卿。</p>	<p>帥記七月廿七日の条に 少将俊頼とあり、この頃 右近衛少将であったこと を示す。八月廿二日左少将に 遷り、同閏八月五日再び右 少将になる。<small>（水左記・帥記）</small> 以下、寛治元年まで少将 在位。</p>	
			<p>師俊<small>（左大臣源俊房の男）</small> 出生。 ○実行<small>（藤原八実三男）</small> 出生。</p>	<p>堀河帝誕生<small>（三十二）</small>、全鏡</p>

堀河

12/19

白河院政時代 日26!!月

三年	二年	寛治元年	三年	二年	元徳元年
-89	-88	-87	-86	-85	1084
35	34	33	32	31	30
<p>○朝観行幸(正月十日)</p> <p>○四圣宮扇合<small>(八・廿三日)</small></p> <p>俊頼出詠あり。(凡て美濃の代作)(歌本集による)</p>	<p>○石清水臨時祭陪從(廿等を勤む)(三・廿三日)</p>	<p>○後頼左京権大夫に任ぜられ従四位下となる。以降十八年向在任。(朝野群載)</p> <p>○内侍所御神楽に管絃の役勤仕。</p>	<p>○若狭守通宗朝臣女子達歌合<small>(五・五)</small></p> <p>○通俊「後拾遺集」撰進。<small>伊し、</small></p> <p>俊頼の歌入撰せず。(九・一六)</p>		<p>○殿上子の日に経信・通俊詠歌(一・廿四)</p>
			<p>○堀河天皇即位(八才)<small>(一・二・一九)</small></p>		<p>○藤通宗没(四・一二)</p>

通 師				
四年	五年	六年	七年	嘉保元年 (十二・十五日 改元)
1090				1094
36	37	38	39	40
<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 顯輔出生</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 加賀茂臨時祭陪從。 菅絃勤仕(十一・廿五日)</li> <li>○ 相模呂合に兄基綱と共に益供をつとむ。(七・廿九日)</li> <li>○ 宗通御家秋合(五・五)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 郁芳門院根合(五・五日)に俊頼の代作あるも入擧せず。(散本集による)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 高陽院七番秋合(八・十九)に五首出詠。判者は父經信。</li> <li>○ 石清水臨時祭陪從。 菅絃出任(三・廿三日)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 橘俊綱妻没(五・四日)(中右記)</li> <li>○ 俊頼は、俊綱の養子になつて、たことあり。</li> <li>○ この事、中右記七・四の条にもみゆ。</li> <li>○ 父經信太宰府権帥と兼ねた。(六・十三日)</li> </ul>

河 堀

時代 政 院 白 河

<p>嘉保 二年 1095</p>	<p>永長 元年 （十二・十七日 改元）</p>	<p>承徳 元年 （十一・廿一日改元）</p>	<p>康和 元年 （八・廿八改元）</p>
<p>41</p>	<p>42</p>	<p>43</p>	<p>44</p>
<p>○大宰権帥に赴任する父経信に従って筑紫に下向。 （七・廿二日）（中右記）</p>	<p>○中納言匡房卿致会（五・二五）</p>	<p>○俊種は経信の葬事を了すて、夏春の渡帰京の途につき、五月五日着京。 ○喪の服を脱ぎ、また左京権大夫として出仕した。 ○散木集「悲歎部」六十余首は、この悲しみの旅程紀である。</p>	<p>○加茂臨時祭に四位陪従として奉仕。（十一・廿九日） ○内侍所御神樂に奉仕（十二・二日） ○「師通鞍馬詣」に殿上人として供奉（正・一〇日） ○中宮和致御会」に出詠（三・廿八）</p>
<p>○師通六條殿にて経信壮行の作文会開催 （七・廿一日）</p>	<p>○菅絃和致会（二・二日） ○能実卿家致会（五・三日） ○師時家致会 ○襟子内親王玉返（九・十三） 58才</p>	<p>○経信大宰府にて没（八・三） （閏五月六日）</p>	<p>○大江匡房大宰権帥として赴任。（八・二〇日）（中右記） ○関白師通没（六・廿八日）廿八才。</p>

五 年 1103	四 年	三 年	二 年 1100
<p>49</p> <p>○「皇子作七夜(鳥羽天皇)」に出仕 (正月、廿三日)(菅絃奉仕)</p>	<p>48</p> <p>○「堀河院艶書日合」(五・二日)に一首出詠。 (正月、廿三日)</p> <p>○「法皇五十賀」に菅絃奉仕。 (十一月、廿八日)</p> <p>○「加茂臨時祭使」に (十一月、廿八日)</p> <p>○「尊勝寺」供養に俊賴、秋人として列席。(七、廿一日)○「中宮</p>	<p>47</p> <p>○「鳥羽殿和秋御会」に出詠。 (十、廿七日)</p>	<p>46</p> <p>○「国信家秋合」(四、廿八日)に五首出詠。象、裁判の形なるも、事實上は俊賴の判、これを去来点として俊賴の秋壇的活動がめざましくなる。(五首出詠)</p> <p>○「仲実家女子根合」に一首出詠。</p>
<p>○「藤原顯綱没」(六、廿六)(七十五才)</p>	<p>○「俊賴二女、堀河院典侍、五位下に叙せらるる。」</p>	<p>○「師実没」(二、二三日)六十才</p> <p>○「俊賴の子俊重、式部丞に任せらるる。」</p>	<p>○「師時家秋合」(五、二六日)</p> <p>○「野時家探題秋合」(六、三日)</p>

忠 実		12. 25
嘉承 元年 (四・九改元) 1106	〃 二年	長治 元年 (三・二改元) 1104
52	51	50
<p>○この年「堀河院御時百首 和歌」奏隆見か。</p>	<p>○木工頭(従四位上)に目付任。 (三月十六日)(中右記)</p> <p>○「忠実南白拜加賀の供奉 殿上人となる。(十二・廿五)</p> <p>○和歌管絃御会に出任 (三・五日)</p>	<p>○新造中宮御所堀河殿にて 「和歌管絃御会」に出仕(四・五)</p> <p>○「堀河院百首」に出詠。</p> <p>○「俊忠家秋合」の判者となる。 (五・廿九日)。一首出詠。</p> <p>○「中宮女房花合」(閏二廿四日) に出詠。</p> <p>○殿上贈子の念人となる(三・四)</p> <p>○「無名秋合」の判者となる。 一首出詠(七月)</p>
<p>○藤原行家没(三・十九) (七十八才)</p>		<p>○左大臣俊房七十の加賀 管絃より(十二・廿五日)</p> <p>○御所御作文(七・十日)</p> <p>○祐子内親王没(十一・七) (六十八才)</p>

鳥羽天皇

7  
19

<p>二年 1107</p>	<p>天仁 元年 (八・三改元)</p>	<p>二年</p>	<p>天永 元年 (七・二三改元)</p>	<p>二年 1111</p>
<p>53</p>	<p>54</p>	<p>55</p>	<p>56</p>	<p>57</p>
<p>○鳥羽殿行幸の和歌会(三・六)に出詠 (中右記) ○朝觀行幸に菅絃奉仕 (三・五)</p>	<p>○臨時祭の陪徒となる (十二・十六日)</p>	<p>○「師頼家歌合」に判者となる (五)</p>	<p>○師時の八条の家で催された「山家五番歌合」に五首出詠 (四・三日) ○俊賴越前介兼任(作者部類)</p>	<p>○俊賴は九月頃木工頭兼任。 ○長い官人生活に終る。</p>
<p>○園白忠実大卿(正・五) ○堀河天皇山崩御(七・一九) ○公実改元(五・三)(二十九才) ○鳥羽天皇即位(七・一九)</p>	<p>○侑子内親王(白河法皇皇女)十月廿八日禰宮となる。</p>	<p>○「野季卿家歌合」(五月)</p>	<p>○目</p>	<p>○園信没(二十日)四十三才 ○匡房没(丁・五日)七十一才</p>

<p>天永 三年 1112</p>	<p>永久 元年 (七・三改元) 1116</p>	<p>二年 1116</p>	<p>三年 1112</p>	<p>四年 1116</p>
<p>58</p>	<p>59</p>	<p>60</p>	<p>61</p>	<p>62</p>
<p>○ 退官し、後頼房、父 経信の山荘、近江の 田上にこの三ヶ年ほど 隠棲する。</p>	<p>○ この時の作品を中心に 後人の編んだ「同上集」 が伝存している。</p>	<p>○ 伊勢初度下向も天永三年 に班定される。</p>	<p>○ 忠実の女、高陽院のため 執筆した「俊頼口伝」 はこの年に完成。 (正月頃)</p>	<p>○ 実行家秘合(判者頼孝) に五首出詠(六・五) ○ 雪居寺縁縁経後尊教合 に一首出詠(八月) ○ 永久四年「百首」に出詠(十二・廿)</p>
<p>○ 白河法皇六十の賀 (三十六) ○ 忠実太政大臣(五・十四)</p>	<p>○ 俊惠出生(母は木工助 敦隆の女)</p>	<p>○ 内裏教合(八・一三) 三井寺教合(九月)</p>	<p>○ 内大臣忠通作文和歌 の会(六・七) ○ 関白忠実作文和歌 の会(九・九) ○ 内大臣家教合(十・廿六)</p>	<p>○ 鳥羽殿和歌御会 (二・五) ○ その他多くの教合、 作文の会等あり。</p>

<p>五年 1117</p>	<p>元永 元年 (四・三改元)</p>	<p>二年 1119</p>
<p>63</p>	<p>64</p>	<p>65</p>
<p>○「内大臣家歌合」(思通)など 開かれてはいるが、この年には 関係してはいない。</p>	<p>○「源雅定家歌合」に三首出詠 (五・十)</p> <p>○「実行家歌合」に三首出詠 (六・廿九)</p> <p>○「内大臣家歌合」(一〇・二)</p> <p>○「内大臣家歌合」(一〇・五) 判者</p> <p>○「内大臣家歌合」(一〇・十三)</p> <p>○「顕季邸に催された「人麿 影供」に初献を勤む。 (六・十六)</p>	<p>○「源師時邸歌合」(一〇・一)に 俊頼出席(長秋記)</p>
<p>○内大臣家歌合(五・九) ○内大臣家歌合(五・二) ○俊頼の兄基綱没(三・三〇) ○美福内院出生(六・八)</p>	<p>○藤原仲実没(三・廿六) (六・三才)</p> <p>○思通、鳥羽殿に文人と 集め詩宴(八・九)</p>	<p>○「内大臣家歌合」(判者 顕季)(七・十三)</p> <p>○崇徳天皇誕生 (五・廿八)</p>

忠通

保安

元年

(四一〇改元)

1120

二年

1121

67

三年

1122

68

○「類聚歌合」(廿卷本)増補  
編纂始まるか。

○「元永寺古今集」書写。

○「香宮侑子内親王石名歌合」  
はこり頃か。(金吾集)

○「長実家歌合」(題季判)  
に三首出詠(五・一三)

○「同家歌合」(題季判)  
に三首出詠(五・廿二)

○「題季家歌合」に三首出詠  
(五・廿六)

○「園白内大臣家歌合」に基俊  
判者となつたか。俊頼追判  
をなす。(九・一二)

○「無動寺歌合」に基俊と共  
に判者を勤む。(二・廿)

○俊頼は、この年二月以後、伊勢  
に赴き、香宮に奉仕。  
伊勢方に在つて贈答をなす  
歌。散木集に多くみゆ。

○藤原頼長出生(五月)

○木工助敦隆没(七・廿七)  
(五十余才)

○海皇熊野より帰途、  
忠実を勤当し内膳見  
を停止。

○忠通園白となる。(三・五)

○淳頼園没(五・二九)廿九才。

○淳俊房没(五・二九)八十七才。

○淳頼俊以(四・十二)  
(五十九才)

○参議実行勅使として伊  
勢に赴く。俊頼伊勢に  
在つて贈答。(散木集)

四年  
1123

69

- 伊勢出家（正月廿八日）
- 櫻の代味く頃帰京。
- 各種和歌会・秋合は多く催されてゐるが、俊賴は出席してない。

- 崇徳天皇即位。5才（二・一九日）
- 藤原俊忠（俊成父）没（七・九二五三才）
- 顕季子没（九・六）（六九才）

天治  
1124

70

- 「金葉集」撰進を拜命。
- △初度本の成立は十二月廿日以前翌二年一月までと推定。奏上せしむ却下。
- 「永縁奈良房秋合」に六首も出詠。判者を動めた。（三月下旬）（初判は基俊。俊賴は進判。）

- 「無動寺秋合」（五月）
- 「天治本」金葉集」書寫さる。

二年  
1125

71

- 「金葉集」二度本（精撰本）を四月に奏上。

- 「永縁没」（四・五）（七八才）（無福寺寺務次第によ）
- 「鳥羽院殿上初秋合」（三・三日）

大治  
1126

72

- 「攝政左大臣（忠通）家秋合」に二首出詠。判者となる。（八月）判詞は後日に加えたものの如し。

- この頃「類聚秋合」の世巻の組織なるか。

元年  
（一・廿三改元）

<p>7/7</p>		
<p>四年</p>	<p>三年</p>	<p>大治二年</p>
<p>1129</p>	<p>1128</p>	<p>1127</p>
<p>75</p>	<p>74</p>	<p>73</p>
<p>○俊頼没(十一月)        (「史料綜覽」読史備考        (忘日常引)等による)</p>	<p>○「散木奇致集」成立。</p>	<p>○「金葉集」三巻本は其下稿のまま未定上。白河院の御嘉納をようやく受付け、金葉集の撰進のこゝと、こゝにて終了。</p>
<p>○白河海皇小朝御        (七・七)(七十七才)</p>	<p>○「応田社(西宮)致合」(基俊判)(八・廿九)        ○「応田社(南宮)致合」(大僧正判)(九・廿一)        ○「住吉致合」(顯伴判)(九・廿八)</p>	<p>○四條宮寛子没(八・四)(九三才)</p>

結

び

にかえて

俊頼の和歌史的位<sub>置</sub>づけ

金葉集時代を背景とする歌壇史の下部構造

をみると政治的、或いは血縁関係などにより

それ〈 〉所屬する歌壇圏が別な形で派生した。

仙洞歌壇、堀河歌壇、忠通歌壇などと称せ

られるのがそれぞれであるが、さらにこれらの延

長線上に貴族出身の僧侶達が地下歌人として

組織した一団の歌壇が出現した。「歌林苑」という特殊な集団がそれである。その中心に俊賴の子俊息がいた。

これらのグループは宮廷生活をはなれた地下の歌人達によって支えられた自由な在野の文学結社であつた。身分の高下、僧俗、男女の別なく集合して和歌の会をもつたのである。東大寺の僧であつた俊息は父俊賴の歌風、歌論の系譜を継承し、その中心的存在として白河の自坊に多くの地下、僧侶達を集めみず

からば執行となりこれを主宰した。この期間  
 は保元から治承へかけて約二十余年であつ  
 た。ここに集る執人達は地下が中心ではある  
 が中には清輔、隆信、教長、頼政、長明など  
 の廷臣も交つており、女流に般富門院大輔、  
 贄政、三河内侍の三人もおり、和歌の私的交  
 友の場を形成し、月次、臨時の歌会が開かれ  
 た。薬瀬一雄博士の調査では常時、臨時の考  
 会の差はあつても、また前後時を異にする者  
 もあつたが三十名名のメンバーであつたらし

い。一「俊恵及び長明の研究（第一冊）」、「秋苑抄」。  
「秋林抄」。「拾遺秋苑抄」などの私撰集を撰  
述している。こうした組織・事業などと思う  
と何か近代の文学結社の運動などと想起させ  
る。権力の介在もなく、政治性もなく、ひた  
すら和歌の道に精進した地下を中心とする歌  
人のかゝる団体こそ真の歌壇といえるであろ  
う。こうした私的グループが二十年の久しい  
交友の場を続けたということは注目すべきこ  
とであつた。すでに時代は俊頼の金葉集歌壇

の時期をはるかに三十年近く過ぎてゐる。しかし俊頼の子俊恵がこうした形の「花林苑」を主宰したといふことは決して俊頼系譜の継承の面から無縁ではなかつた筈である。

六條源家経、信 ↓ 俊、頼 ↓ 俊、恵の血統の最

後の歌人として歌壇に異彩を放つた。それが俊恵であつた。そしてその内下から鴨長明と

輩出させ、中古最末期歌壇からやがて中世歌壇へと展開する過渡的一時機に於ける俊恵の和歌史的位相は極めて重く、そこにまた重要な

な意味があると言えるのである。

一方、中古末に於ける六條藤家は、六條源家とは別に致学の家としての重みを持ち、一代の政治経世家として隠然たる勢力を擁し、致壇的にも重きとされた顕季が長子、次子に政治的地歩を継承させ、顕輔（三男）にその致学を継がせたのはなほ、巧妙な保身の策であった。顕輔の子、清輔・重家・顕昭・季経の顔ぶれをみるといふれもそれなれ業績ともち、六條家独自の致学がそこに樹立された

ことが知られる。六條源家に比すとほるかに  
 秀れた歌学の門閥であつた。しかし、俊成の  
 出現により、歌壇の表だつた勢力は俊成に移  
 行し、定家がこれと継ぎ、六條・御子左家の  
 対立が続く中世となる。そこには体動かせない  
 時代の力があつた。

俊成が花林苑を主宰し活躍したのは年令に  
 して四十代から六十代であり、俊成より一年  
 年長であるにすぎず二人は同じ世代といつて  
 よい。俊成の四十才の時（仁平三年）には崇

徳院の命により「久安百首」を部類分けしてい  
る。和歌史的に見た場合、俊惠の如きは俊成  
の安定した地位には及ぶべくもなかつた。特  
異な秀れた結社花林苑ではあつたが宮廷に直結した  
俊成に比すれば傍流的な存在にすぎなかつた  
のである。俊惠は父俊頼の革新的態度をその  
まゝ継承はしてゐない。時代の差もすであ  
り、新旧両方の調和の世界たる「余情論」を  
確立し、それは彼のよき門人長明に継承され  
、長明はそれを基盤に「幽玄論」として新し

い文学理念に展開し中世に肉花する。

「兼載雑話」によると、「俊賴はにくけれど歌はにくからず」と俊成の語った話が出ている。

基俊の弟子俊成の俊賴観としてなか／＼面

白い。事実、俊成は歌論に於ては基俊の影響

を受けているが、俊成の庶幾した歌は俊賴の

作品であつた。その具体的顕われとして俊成

が千載集を撰するに当たり最も多く採用した

のは俊賴作品五十二首であつた。詞花集に僅

か一首しか採用されなかつた俊惠の歌は廿二

集も採用され一躍第五位にのしあかっている  
 ののである。(注)五位までの採用数・俊賴(52首)・俊  
 成(36首)・基俊(26首)・崇徳院(23首)・俊惠(22首)  
 それにしては師基俊の廿六首は少ない。俊  
 賴の採用五十二首といふのは千載集自体の最  
 高といふのみでなく、俊賴の各勅撰入集歌の  
 最高の数を示しているのである。先の「兼載  
 雑詠」の伝える如くその師の基俊の対者俊賴  
 は憎かつたかも知れないが、歌は憎くなくつ  
 たのである。ここに俊賴 ↓ 俊成 ↓ 俊惠 ↓ 長明と

いう作品の伝流系列が考えられる。(……線は

間接的関係を示す。これは歌論史的にも云える。)

ここで「花林苑」の肉題をまず第一に取りあげた所以のものは俊頼の和歌史的或いは歌壇史的位相を明らかにするために外ならぬ。

晩年に至つても俊頼と基俊との対立は宿命的に続く。天治元年三月下旬(俊頼70才)興福寺別当永縁がその住寺花林院に於て主催した「奈良花林院歌合」に基俊が初判を勤めた

のであるが、この歌合の歌人卓延の陳状に  
い、俊頼が再判を勤めねばならぬという結果  
になりここに「永縁奈良房歌合」が再生する  
という事態の起つたのがそれである。この歌  
合の内容性格については本論に詳述したので  
これ以上ここでほくり返さないが、季は基俊  
の子光覚の左方に勝が多すぎたという私情的  
反論が基になり起こされた陳状であり、もと  
より革新俊頼と保守基俊の歌論的対立ではあ  
つたが同時に二人の人間の相違であつたとい

うことである。このことは本歌合のみでなく  
二人の共判「内大臣家歌合」(元永元年十月二  
日)にも窺われる所である。

こうしたことでこの二人の人間像について  
は後の歌学書には種々取沙汰されている。そ  
れをまとめてみよう。まず、「無名抄」には  
興味ある話が種々伝えられている。

(一) 無名抄レより。(「日本古典文学大系本」)

(1) 三位入道基俊成弟子事

「かやうに師弟の契をば申したりしかど、

よみ口に至りては、俊頼には及ぶべくも  
あらず。俊頼いとやむごとなき人なりとぞ。

(2)

俊頼基俊いどむ事

或人云、基俊は俊頼をば、蚊蛇の人と  
て、<sup>レ</sup>さはい子共、駒の道行にてこそあら

め<sup>レ</sup>といはれければ、俊頼返り聞きて、<sup>レ</sup>文  
時・朝綱よみたる秀歌なし。躬恆・貫之

作りたる秀句なし<sup>レ</sup>とぞいはれける<sup>レ</sup>。

(3)

脛句手文字事

永久四年  
「雲居寺歌合」の話

「秋の暮の心と、俊頼朝臣、

○明けぬとも猶秋風の訪れて野辺の気色よ

面憂りすな

名と隠したりけれど、是を口さよ山と心得

て、基俊挑む人にて、難じて云、口いか

も秋は、腰の句の末に、て文字据ゑたる

に、ほかくしき事なし。又へていみじ

う聞きにくきものなり山と、口圍かすべく

もなく難せられければ、俊頼はともかく

もいはざりけり。口（其座に琳賢がいて證

秋ありと言ひあして、）

桜散る木の下風は寒からで（貫之の歌）  
と末のて。文字を長々となからたるに、色真  
青に成りて、物もいはづうつぶきたりける  
時に、俊頼朝臣は思ひに笑ひける」とぞ。

(4)

基俊僻難事

（「内大臣家秋合」元永元年十月二日の話）

「俊頼の歌に、

○口惜しや雲井隠れに棲むたつも思ふ人に

は見えけるものを

是を基俊、鶴と心得て、田鶴は次にこそ

すめ、雲井に位ふ事やはあると難じて、

負になしてける。されど俊頼、其座には

詞も加へず。其時殿下、曰今夜の判の詞、

各書きて参らせよとと仰せられける時、俊

頼朝臣、曰是鶴にはあらず、龍なり。彼な

にがしとかやが、龍を見むと思へる心ぞ

しう深かりけるによりて、かれが瓦めに

現はれて見えたりし事の侍るを、よめる

なりとと書きたりけり。(註・莊子の故事)

甚俊弘才の人なれど、思ひあたりにつ

るにや、すべて思ひ量りもなく人の事を

難ずる癖の侍ければ、あゝに失の多くを  
ありける。

(5)

俊賴歌傀儡云事

「富家の入道殿に（注・藤原忠実奥白のこと）

俊賴朝臣候ひける日、かゞみの傀儡共考

りて歌つかふまつりけるに、神歌に成り

て、

○世の中は憂き身に添へる影なれや思ひ捨

つれど離れざりけり  
（注）  
歌本集卷十雜部下長歌の  
反歌。千載入集。堀河百首。

此歌を歌ひ出たりければ、  
「俊賴、至り候

(6)

## 俊成入道物語事

ひにけりな』とて居たりけるなん、いみじ  
かりける。』

「五條三位入道云。『俊成は当世の上手也。

されど俊頼には猛及び難し。俊頼は思ひ

至らぬくまなく、一方ならずよめるが、

力及ばぬ也。』

(7)

## 俊成入道物語事

「俊成云。『世の常のよき歌は堅文の織物

のごとし。よく艶優れぬる歌は浮文の織

物を見るがごとし。空に景気の浮べる也。

本工頭の歌に、

○ 鶉鳴く真野の入江の浪風に尾花波よる秋

の夕暮

(注) 散木集茅三秋部八月  
金葉集秋入集

是もまがはぬ浮紋に侍るべし。堂玉集にも  
此の事あり。

(8)

故実の躰と云事

「秋には故実の躰と云事あり。きと風情

を思ひ得ぬ時は、心の工たくみにて作りたつ

べきさまを習ふなり。

一には、古歌の言葉のわりなきを取りて

おかし<sup>(ま)</sup>くいひなせる、又おかし<sup>(ま)</sup>。又、圃  
きよからぬ詞を面白く続けなせる、わが  
とも秀句となる。

○ 思ひ草葉末に結ぶ白露のたま<sup>く</sup>来ては

手にまたまらず<sup>(注)</sup> (散木集<sup>(卷八)</sup>・老下<sup>(卷七)</sup>・金葉集<sup>(卷七)</sup>・老上<sup>(卷七)</sup>)

(他にこれ一首好忠の歌あり。者畧)

一には、秀句ならねど、只詞遣ひおもしろく

ろく続けつれば、又見所あり。

○ あま<sup>(ま)</sup>でほすあづま乙女の萱筵しき忍びて

も過ぐす頃かな (散木集<sup>(卷七)</sup>・千載集<sup>(卷十三)</sup>・老上<sup>(卷三)</sup>)

○あしの中の賦機帯の片結び心安くも打と

くるかな

「古今」新古今集 卷十三 入

へ他に一首俊恵の歌あり。省略

以上、最も身近かな「無名抄」からの諸例を

引いたのであるが、(1)から(4)までは兩人につ

いての人物評価論であり、その対比は温和を俊

頼と剛慢を基俊の人間像がそのまま、浮き彫り

にされぬてくる。ことに(3)・(4)は歌合の直接の

場を活写しており二人の姿が目に見えるよう

である。

「八雲御抄」に、

「基俊といふもの此道稽古ありて、俊頼に

時々争ふとあり。然れば今の世までこの

流たりといへども、そのこつ俊頼に及ぶべ

からず。天下に肩を並ぶるものなくて俊頼

数年をへたり。世間にも秋の道むげにすた

れて此道をきか如し。

と評しているもの「無名抄」の(4)と同じ考

えの上になつている。また、(5) ↓ (8) まで

俊頼の歌そのものについて、具体的な評価であ

る。(5)は俊頼名歌の逸話。(6)は俊成の俊頼。  
俊恵比較素描であり、(7)は俊頼の「鶉鳴くし  
に對する俊恵の「浮紋し歌舞の設定。(8)は、  
俊恵の「故実の舞」からみた俊頼の歌の位置  
づけであつた。これら(6)を除いていずれも  
俊恵の俊頼作品評といえる。

尚、これと関連するのに「後鳥羽院御口伝  
の次の批評がある。

「俊頼堪能の者也。歌の姿ニ様によめり。うる  
ほしくやさしき様も殊に多くみゆ。又もみ

く 人はえよみおほせぬやうなる姿もあ  
り。この一椽すなはち定家卿が庶箋する姿  
なり。

○うかりける人をはつせの山おろしよはげ

しかれとは祈らぬ物を

(注)「散本集卷第八」「千載集  
志部下」卷十二「入」

この姿なり。又、

「近代秀歌」・「三四代集」採用

○鶉鳴く真野の入江の法風に尾花をみよる

秋の夕暮

(注) (既出)

(「秀代秀歌」・「三四代集」にも採用)

うるはしき姿なり。

これによると、後鳥羽院は、俊賴の歌に、

(一) うゝはしいくやさいきく様と、(二) もみく、  
とし、た、宴、のニつの要素をみいだして、いること  
が知られる。(一)には俊成・定家、(二)の「もみ、  
く、  
し、  
と、  
い、  
う、  
の、  
は、  
「  
う、  
か、  
り、  
け、  
る、  
」  
の、  
歌、  
に、  
み、  
る、  
如、  
き、  
詰、  
屈、  
な、  
表、  
現、  
手、  
法、  
と、  
と、  
る、  
も、  
の、  
で、  
式、  
子、  
内、  
親、  
王、  
定、  
家、  
ら、  
が、  
こ、  
れ、  
に、  
入、  
る、  
と、  
後、  
鳥、  
羽、  
院、  
は、  
み、  
て、  
い、  
る、  
。  
こ、  
れ、  
ら、  
に、  
よ、  
つ、  
て、  
考、  
え、  
ら、  
れ、  
る、  
こ、  
と、  
は、  
こ、  
と、  
に、  
定、  
家、  
が、  
俊、  
頼、  
の、  
歌、  
を、  
庶、  
幾、  
し、  
て、  
い、  
た、  
こ、  
と、  
で、  
あ、  
る、  
。  
勿、  
論、  
俊、  
成、  
も、  
そ、  
う、  
で、  
あ、  
る、  
が、  
俊、  
頼、  
の、  
歌、  
風、  
の、  
中、  
に、  
は、  
す、  
で、  
に、  
中、  
世、  
の、  
歌、  
風、  
を、  
生、  
み、  
出、  
だ、  
す、  
母、  
胎、  
を、  
内、

包していた。そこに俊頼短歌、俊頼歌論の中  
世に対する原流的位相があつたのである。

かゝる意味に於て次にあげる定家の「近代  
秀歌」(遣送寺)に俊頼の歌を具体的に取り込  
それを風体別に類別してゐることは注意すべ  
きことである。

(二)、「近代秀歌」(遣送寺)より。(「日本歌学大系本」)

俊頼朝臣

○山桜さききそめしよりえ方の雲井にみゆる瀧

のしらす糸

(注)

散本集第一・春部二月

○ おちたぎつハ十字汎川のはやし瀬に岩こす

波は千世のかずかも (注) 散木集巻五・祝部 千載集入撰

▲ これは晴の歌、秀歌の本侍と申すべきにや

○ うづらなくまのゝ入江のはま風に尾花なみ

よる秋のゆふ暮 (既出)

○ ふるさとは散るもみぢ葉にうづもれて軒の

しのおに秋風ぞ吹く (注) 散木集巻三・秋部九月 新古今集入撰

▲ これは出雲におもかげかすかにさびしきさまなり。

○ 明日もこむ野路の玉川はぎこえて色なる浪

に月やどりけり (注) 今八月・千載集入撰

○ おもひ草葉末にむすぶ白露のたま／＼きては  
手にもたまらざ

▲ これは面白く見所あり、上手のしごといみゆ。

○ うかりける人をはつせの山おろしよはげし  
かれとはいのらぬものよ（既出）

○ とへかしな玉ぐしのほにみがくれて鴟の草  
ぐきぬぢなうずとよ（牙丸 雑部・續古今集入撰）

▲ これは心ふかく詞心にまかせてまねぶとも言ひつゞけ

がたく、誠に及おまじき姿なり。

以上八首を二首ずつにくくり（一）秀歌の手体

(二) 出去体、(三) 面白体、(四) 心ふかき侍の四体に  
類別したのである。この近<sup>7</sup>代秀歌<sup>8</sup>にとりあげ  
た歌人と歌教と示すと経信(3首)、顕輔(3首)、  
清輔(4首)、基俊(2首)、俊成(6首)、俊頼を含め  
て六人26首である。基俊の歌が最も少なく、  
定家の評価観からは俊頼には、はるかに及ば  
ない。それのみか六人の中俊頼の八首が最高  
で、しかも▲印で示した風体別の説明は他の  
歌人にはないのである。こうした点からも、  
定家はこれら当代の歌人の中俊頼の歌に最も

私淑していたことが明らかになるであろう。

そのほか後の秋学書で俊頼の作品をとりあげているのは多いが、中でも顕昭は「袖中抄」に三十余首に及ぶ俊頼の歌をとりあげ種々の面からこれを説明している。しかしそれ以前に「散木集注」(寿永二年)を完成していることはさらに注意すべきことで、いわば顕昭は俊頼研究の第一号であつたのである。

それでは次に俊頼の撰進した金葉集に対し

ては後の人達はどのよう<sup>に</sup>受けとつていたであ  
らうか。この事につき若干考えてみよう。

まず、「古来風侍抄」からみよう。

(一)、「古来風侍抄」の金葉集観

日本の和歌史観の確立されたのは「古来風  
侍抄」が最初である。その「古来風侍抄」の和歌  
史的時代已分の設定は次の通り。

「かみ万葉集よりはじめて、中古、古今、後  
撰・拾遺、しも後拾遺よりこなだぎまの歌、  
ときよのうつりゆくにしたがひて、姿もこ

と葉もあらたまりゆくありさまを代々の撰  
 集にみえたるをほしくしるし申すべきな  
 り。  
 と述べている。これによると後成の考え方  
 は、上古、中古、今に大別し、この中、古と拾  
 遺集までとし、後拾遺以下千載集までを今と  
 した。金華集は勿論、今の中にくまれる。三  
 代集を一群としたのは当を得ている。後拾遺  
 以下を近代の体として位置づけている所に古  
 末風俚抄レに於ける和歌史観の特色がある。

そして、全集集の作品を38首抜粋し、内俊  
頼の歌は次の7首で個人作家として最も多  
く採りあげている。

(1) 木ずゑには吹くともみえず  
梅花かざるそ風

のしるしなりける  
(注) 散木集・二月

(2) 風ふけば蓮の浮葉に玉こえて涼しくなりぬ

日ぐらしの声  
( 〃・三月 )

(3) 此星も夕立しけり  
浅ぢふの露のすがらぬ草

の葉もなし  
( 〃 六月 )

(4) 鷗なくまのゝ入江の浪風にもばな浪よる秋

の夕暮

( " 八月 )

(5) よとゝもに玉ちる床のすがまくらみせは"や

人に夜はのけしきを ( " 恋部・上 )

(6) 世の中はうき身にそへる影なれや思ひすつ

れどはなれがりけり ( " 雑部・下 )

(7) 小ざくらさきそめしより之方の雲井にみゆ

る瀧のしら糸 ( " 二月 )

この七首いざれも倭成の庶幾した歌傳であ

った。そして金葉集についでこの総評は、

「携者のさほどの款人に侍れば、款どももみなよろしく侍るを、すこし時の花ををる心のすいみけるにや、当時の人のみはじめよりつゞきたちたるやうにて、いかにぞ見え侍るなるべし。」  
と、い、う、結、論、で、あ、つ、た。『時の花ををる心』と、い、う、近、代、主、義、の、表、立、つ、て、き、た、こ、と、と、金、葉、集、の、特、色、と、み、て、い、る、所、に、優、成、の、金、葉、集、観、が、あ、り、  
『い、か、に、ぞ、見、え、侍、る、な、る、べ、し。』と、い、う、批、判、も、一、寸、の、む、か、せ、て、い、る、が、こ、れ、は、金、葉、集、の、和、款

史的位<sub>レ</sub>置<sub>レ</sub>づ<sub>レ</sub>け<sub>レ</sub>から<sub>レ</sub>見<sub>レ</sub>た<sub>レ</sub>批<sub>レ</sub>判<sub>レ</sub>であ<sub>レ</sub>ったと<sub>レ</sub>考<sub>レ</sub>え<sub>レ</sub>る<sub>レ</sub>べきもので<sub>レ</sub>ある。つまり、金葉集の<sub>レ</sub>歌<sub>レ</sub>そのも<sub>レ</sub>のは<sub>レ</sub>秀<sub>レ</sub>れて<sub>レ</sub>い<sub>レ</sub>る<sub>レ</sub>が<sub>レ</sub>全<sub>レ</sub>体的<sub>レ</sub>に<sub>レ</sub>み<sub>レ</sub>た<sub>レ</sub>場<sub>レ</sub>合<sub>レ</sub>近<sub>レ</sub>代<sub>レ</sub>作<sub>レ</sub>家<sub>レ</sub>が<sub>レ</sub>多<sub>レ</sub>く<sub>レ</sub>並<sub>レ</sub>び<sub>レ</sub>す<sub>レ</sub>ぎ<sub>レ</sub>て<sub>レ</sub>い<sub>レ</sub>る<sub>レ</sub>と<sub>レ</sub>見<sub>レ</sub>た<sub>レ</sub>ので<sub>レ</sub>ある。「歌<sub>レ</sub>の<sub>レ</sub>李<sub>レ</sub>侍<sub>レ</sub>に<sub>レ</sub>は<sub>レ</sub>、<sub>レ</sub>只<sub>レ</sub>古<sub>レ</sub>今<sub>レ</sub>集<sub>レ</sub>を<sub>レ</sub>仰<sub>レ</sub>ぎ<sub>レ</sub>信<sub>レ</sub>ず<sub>レ</sub>べき<sub>レ</sub>事<sub>レ</sub>なり。と<sub>レ</sub>い<sub>レ</sub>う<sub>レ</sub>伝<sub>レ</sub>統<sub>レ</sub>的<sub>レ</sub>和<sub>レ</sub>歌<sub>レ</sub>史<sub>レ</sub>観<sub>レ</sub>を<sub>レ</sub>有<sub>レ</sub>して<sub>レ</sub>い<sub>レ</sub>た<sub>レ</sub>俊<sub>レ</sub>成<sub>レ</sub>から<sub>レ</sub>は<sub>レ</sub>金<sub>レ</sub>葉<sub>レ</sub>集<sub>レ</sub>と<sub>レ</sub>こ<sub>レ</sub>の<sub>レ</sub>よ<sub>レ</sub>う<sub>レ</sub>に<sub>レ</sub>批<sub>レ</sub>判<sub>レ</sub>した<sub>レ</sub>のも<sub>レ</sub>当<sub>レ</sub>然<sub>レ</sub>な<sub>レ</sub>こ<sub>レ</sub>と<sub>レ</sub>で<sub>レ</sub>あ<sub>レ</sub>った。

(二)、「無名抄」の金葉集観

長明は「近代歌体事」の中に、

拾遺の比より其躰ことの外に物近く成り  
 て理とまなく現れ、姿すなほなるをよろし  
 とす。其後、後拾遺の時、今少しやはらぎ  
 て、昔の風を忘れたり。こゝや、其時の古き  
 人などは是を請ざりけるにや、後拾遺姿  
 と名付けて口惜しき事にしける。とぞ、或  
 先達語り侍し、金葉は又わがとおかしから  
 んとして、軽々なる歌多かり。詞花・千載  
 大略後拾遺の風なるべし。

といふことをのべている。この考えは「古

来風能抄しの和歌史観に基づくものであろう  
 が、金葉集をつわぶとをかしからんとして、  
 々々なる歌多かりしとみていろのは俊成よりも  
 一層具体的になつてゐるのが特色。なお、俊  
 成が三代集と後拾遺との間に境界を置いたの  
 に対し長明が後撰集と拾遺集との間に一線を  
 画した所には相違がある。俊頼の系統を引く  
 長明が金葉集をかく批判していろのは俊成的  
 考への延長と思われろが、もつと独自のもの  
 がなかつたものか。金葉集の一面のみを型の

如くに位置づけられているように思われてならぬ。

「金葉・詞花、きやうん」なるやうに候。午

敷おちしづまり、誠に勅撰からはめでたく候

と評したのは「越部禅尼消息」(俊成女)であ

るが、これは長明の考えに引きずられたもの

であろう。よく言えば「無名抄」の金葉集観、

は客観冷靜的な立場からの批評であった。

(三) 八雲御抄の金葉集観

「たに経信一人、天下の判者にてならびな

し。其外は匡房、俊頼などはかりなり」。

と喝破したのは順徳院であった。また作歌

指針としては「俊頼、俊成、いずれにもわた

りて侍れば、甚やうと字び侍らむこそ、いた

くたいそるまじくは侍れし。の方向を平された

如く「八雲御抄」の祇論の基底には俊頼が大

きく存在していた。御抄のいたる所に俊頼の

論が引用されていゝるのもそうした理由にもと

づく。

さて、その「八雲御抄」の金葉集観をみると、

「後拾遺、金葉集のころより後がまの歌、

おほく平壤なる体なれど、ぬけてよき歌は  
又多し。

とある。後拾遺以下を一つの時代にくくつて  
いるのは俊成と同じ和歌史観にもとづくもの  
で、金葉集の風体をそのまゝ賞揚はしていな  
い。平壤なる体としてみているのであるが、  
よい歌はまた多いという見方に立つている。

古典主義の順徳院が後拾遺・金葉集をこの  
ようにみているのは至極尤もなことであつた。  
貫之、公任など古い歌人をもむげに捨てる態

度を戒めたのもそのためで、「たけたかきばかりに  
 して心すくなく、秀句ばかりにて出立をわ  
 すれ、やさしきばかりにて何となきこと多し、  
 という調和の世界を庶幾したのが順徳院の御  
 考えであつた。こうした考えから俊頼・俊成  
 と、いう個人（として）の歌人が浮かびあつてくるので  
 ある。古今風と新古今風との統合調和を是調  
 とした順徳院の典雅な歌風と考へる時、金葉  
 集の如き新奇を志向する勅撰集はそのまゝに  
 は受け入れられなかつたのである。これとよ

く似た金葉集観は「無名草子」である。

(四)、無名草子の金葉集観

由来、「無名草子」は物語評論書であるが、

和歌について若干ふれてゐる。従つてこれ

までに見てきた歌論書とは多少意味も異なる。

しかし、金葉集について、

「金葉集よしと思へる人もあり。されどそ

の頃の歌すべて目の及び侍らぬやむ。さ

しも覚え侍らず。又今少し見どころ少くそ

覚え侍る。世にもさ思ひて侍るなるべし。

といふ一節のあることは注意すべきである。

その作者についてには女流ということでは一

致してゐるが、後成卿女説、式子内親王説な

どあり定説をみない。ともあれこの作者は「

あはれ」を基調にした伝統主義にたち「金玉集」

（公任撰）を推賞しており、また「千載集」に

ついで

「千載集こそはその人のあざなればいと心に

にくく侍るをあまりに人に所をおかるとに

やさしき覚えぬ歌どもこそあまた入りて

侍るわれし。

と評して、いる所から俊成を熟知して、いるこ

とは容易に想像される。こうした立場にいる

作者が「金葉集よしと思へる人もあり」と評

したのも至極尤もなことであり、逆にこれを

言えは作者自身は金葉集をよしと思つていな

いのである。そしてむしろ、後拾遺の方を「

よき歌」と侍るべしと言つて、この方を推賞

して、いる。これは和泉式部などを始めとする

女流歌人の華やかな活躍の舞台を回想してい

るのであつて和歌史としては逆行するものであるが、この作者の伝統的立場からはやむを得なかつた態度であらう。

以上、金葉集について（後）の主要な歌論書がど

のようによつて受けとめていゝるかといふ問題を中心  
に考へてきた。これらの著者は、その和歌史  
観に於ては必ずしも一律ではなひ。しかし、  
金葉集に對しての批判を中心と考へると、さ  
して異なるものはない。要するに俊賴が金葉

集時代という一エポックを樹立したというこ  
とについての認識はみな持つていたのである。  
ただこれらの著者の歌に対する嗜好がそれ  
ぐ異なるつていたことはいたし方のよい作家  
の個性であつた。  
しかし、ひるがえつて俊賴自身をもう一度  
考えてみるとわくも画期的な金葉集時代の歌  
壇を形成したにもかゝりわらず、經信↓俊賴  
↓俊惠の三條源家は三條藤家が歌学の家と  
して中世に發展し御子左家と対立して活躍し

たのに比べると短かい生命であつた。短かい  
生命ではあつたが、わが國の和歌史の伝流か  
らみる時には六條藤家をはるかに凌ぐ業績と  
残した。ここに淳俊頼の歌人としての位相が  
あつたのである。



あとがき、

白山鷄声台の母校と巣立つたのが昭和九年  
 以来三十余年の歳月はいつの間にか過ぎ去  
 っ ていた。学祖井上円了先生の胸像を仰ぎな  
 がらあの階段を上つたり下つたりした五ヶ年  
 間の学窓生活のなつかしい思い出は未だに消  
 えな い。予科時代には松浦貞俊先生の御指導  
 に今かり、学部国文学科に進んでからは当時

主任であつた島津久基先生の講筵に座した。  
当時病氣勝ちな先生には休講が多かつたが、  
源氏物語のあの名講義の印象は今も脳裏深  
く刻みこまれてゐる。そのほか菊池吾人、次  
田潤、湯池孝、各務虎雄の諸先生。東大から  
は藤村作先生、新進氣鋭な久松潜一先生、そ  
れに國語学の橋本進吉先生らが来られていて  
物違はまことに恵まれた環境の中に勉強が出  
来た。卒業論文には「藤原定家の研究」を提  
出した。以後私は主として和歌方面の研究に

関心を持ち今日に至っている。

在学中の一年先輩に現東洋大学教授吉田章

一博士、二年先輩に今じく平野宣紀教授がい

た。当時、島津先生を中心にして東洋大学国文

学会が絃成され、諸先輩の指導のもとに狭

く細長い研究室で新進後輩は国文学の研究方

法を教えられた。狭くはあつたが家庭的なま

ことに和やかな国文学研究室であつた。

和歌研究には自らも実作が必要であり、こ

れまた東洋大学出身の小泉荃三先生主宰の「

ポトナム短歌会<sup>レ</sup>に入会し、今日に至つてい  
る。私は、和歌を研究し、一方また作らねば  
ならなかつた。和歌の研究と創作は關係はあ  
るにしても、<sup>レ</sup>本質的には異なる次元  
であり、この二重生活にはかなりの負担があ  
るが、これにも耐えてゆかねばならず、今  
も作歌は続けている。

昭和廿六年、福岡教育大学から派遣され内  
地留学生として東京大学で一年間久松先生の  
許で歌論の研究の指導を受けられた。この年には

母校の研究室にもよく出向き吉田幸一博士か  
 ら何かと研究上の御教示を得た。松浦教授か  
 ら<sup>は</sup>「君は教育大学にいるから國語教育の講義  
 をしてくれな<sup>い</sup>か。」との懇懇で夜間部の教壇に  
 立つという縁に恵まれたこともあり、この年  
 の在席一年間は私の研究はもとより母校との  
 つながりと深めた意味で楽しい実りの多い年  
 であつた。

しかし、由来怠惰無能の私は地方の大学に  
 いて思うようにならぬ研究成果もあげ得ず、徒ら  
 に

歲月は流れ、馬齢を加えるのみであった。

この間、学会では「耕雲」。「厚葉」などの歌

論を発表し、昭和廿七年にささやかな歌集「

単色の季」(ポトナム叢書 52編)を上梓し、廿九

年には宇因連歌新資料「誥宮千句」。「賦初何

連歌百韻」の翻刻を完了、「西日本国語国文学

会」(九州大学文学部国語・国文学研究室内)から

刊行。これはいずれも宇因自筆本の発見でい

ささか宇因研究の上に新資料を加え得た。

俊頼に肉心もち始めたのは彼が院政末期



いてはかからずもこの九州の地で出会い出会った  
のである。そして「中世もよいが俊頼の研究  
をひとつまとめてみてはどうかし」という示唆  
に富むありがたい激励の言葉に接した。私が  
本格的に俊頼研究に取り組んだのはこの時に  
始まる。俊頼の研究を新規に書きおろすこと  
に決意し、文献蒐集の研究旅行から始めた。  
学校では或る役取も持たされ、そのために会  
議に出席することも多くこうした公務の隙を  
縫うごとく私には俊頼の研究を継続していつ

た。原稿執筆から清書へとこの間には非常な  
 時間を要した。清書には本学の学生、妻にま  
 で応援を依頼した。本論文に種々な字体の混  
 じっていろのはそのため、出来るだけ早い  
 完成を希望したのであるが、それでも意外に  
 長い年月がかゝつたのである。(一応清書には  
 目を通したが、思わぬ誤謬をそのまま見落し  
 ていた所もあるかも知れぬ。その点、御寛恕を乞う。)

この永い間、吉田博士には文献の借覽をお  
 願ひしたり、問題点については数度も御教示

を仰いだ。いのちを削り込ん思いで書き続け  
てきた本論文であつたが、今読み直してみ  
るとなお多くの不満な点もある。ただ、序論に  
於て述べた如く金葉集時代の歌壇を形成した  
俊賴を大きく四編にわかし、総合的に俊賴を  
考えようとした試みはこれまでにほなかつた  
ように思う。書き足りない問題も多いが、今  
は今後の課題としていとまず本論文を脱稿す  
る。論文を葺するに當つては種々先学の著書  
、論考から多くの学恩を蒙つた。おけても、

こうした研究態勢に私を誘導され、直接に御  
 教示に与かつた母校の先学吉田幸一博士の多  
 年の御配慮に對して深甚なる謝意を表し、こ  
 の<sup>ア</sup>あ<sup>カ</sup>とがき<sup>シ</sup>の<sup>ハ</sup>結<sup>ヒ</sup>びとする。

昭和四十一年九月

池田富蔵



